女子文壇

第三巻第拾四號

明治四十年十一月一日発行（毎月一回一日）



明治三十七年

生花



重松せい子筆

女子之友の購讀者により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



矢野龍溪先生著
六版
出鱈目の記
山田美妙先生註
全一册　正價金卅五錢郵稅六錢

評註
近松著作集
矢野龍溪先生著
全三册　正價金九十錢郵稅不要

三版
浮城物語
長島今四郎先生
丸田賓雄先生　共編
全一册　正價金五十錢郵稅八錢

千代田城大奥
全二册　正價金七十錢郵稅不要

岡崎屋書店編纂
西班牙語獨修

山口造酒先生著
英吉利語獨修

山口造酒先生著
佛蘭西語獨修

山口造酒先生著
獨逸語獨修

小柳津邦太先生著
露西亞語獨修

三原好太郎先生著
支那語獨修

松岡馨先生著
朝鮮語獨修

加藤節先生著
エスペラント獨修

各全一册
正價金貳拾五錢　郵稅二錢

發行所　東京市神田區今川小路
岡崎屋書店

賣捌所
本鄕六丁目　岡崎屋書店
（大阪）吉岡、丸善、ふみや
（京都）若林大黑屋
（名古屋）川瀨、星野

振替貯金口座番號第三千八百十四番

特電話本局一四八番



下田義天類校訂　指原乙子編纂

版最新

女子文章軌範

斯學に造詣深き指原乙子刀自が古の諸名媛が書かれたる中の殊によきを選りて消息記事紀行哀傷序跋教訓論文の七部門に別ち懇切なる註釋と作者小傳とを加へ下田大人の校訂をも經たる書にて福羽大人が本書の序に世に文章のことを云へる書數多あれど其正格を得たるをとり揃へて之を人に示し人をして其博學の一助ともなり文章を作る時の師ともなるべき書甚少なし今此書を一閲して其佳なるを覺ゆ人是を讀みて其徒を得ること尠なからざるべしと云はれたる、能く本書の價値を評せるもの也と云ふべし苟も斯學に志ある婦人は是非とも座右に備へらるべき良書なり。

洋裝美本全壹冊
定價金五拾錢
郵稅金六錢

理學士大森千藏先生著

（特價壹千部限り金壹圓七拾錢）

訂正五版

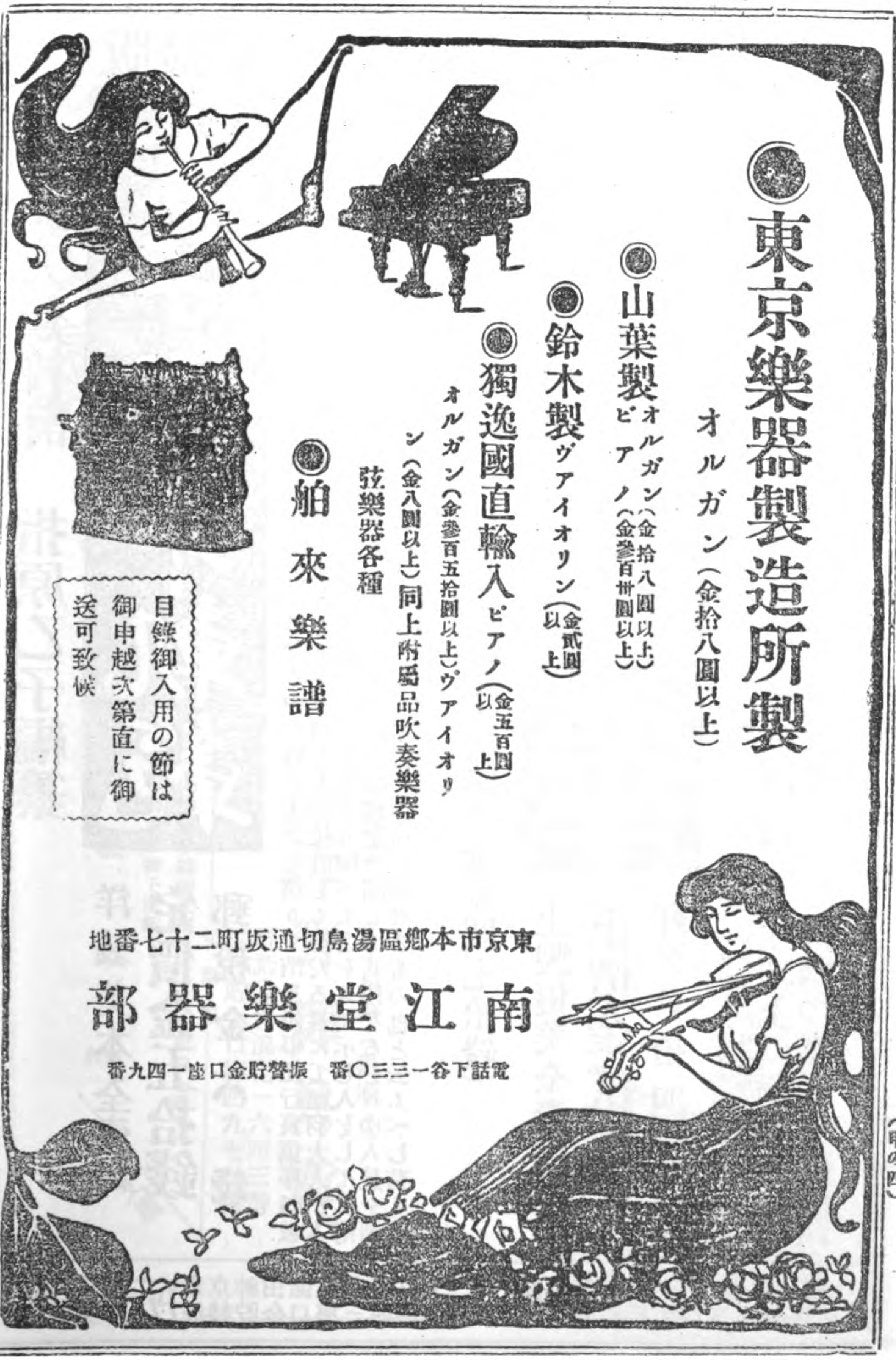
普通生理衛生學

人に在ては貴重なること身體に優る物なし其生理を知り其衛生法を知るは苟も身體を有せる者に取つて又最も貴重なる事言を要せず本書の著者多年泰西諸大家の書に渉獵し其粹を拔き其要を摘み簡宜しきを得るを旨として本書を編纂せり期する所は普ねく世人に此貴重なる知識を與へ又一般此學の教授に從事せる人に參考に資せんとするにあり以上の趣旨に基き本書は先づ人體構造の大意より其各部の**解剖組織**の概要を示し次て**其生理上の學說**より次第に**衛生上の**法則を論及し特に注意親切なる**實驗法救急法**等をも略示せり其所說の周到にして興味あるの精確にして文章の流暢なる其の**挿圖の精緻**にして**鮮明な**る恐らくは本書の右に出づるものなく家庭には是非とも備へざるべからざる良書なり

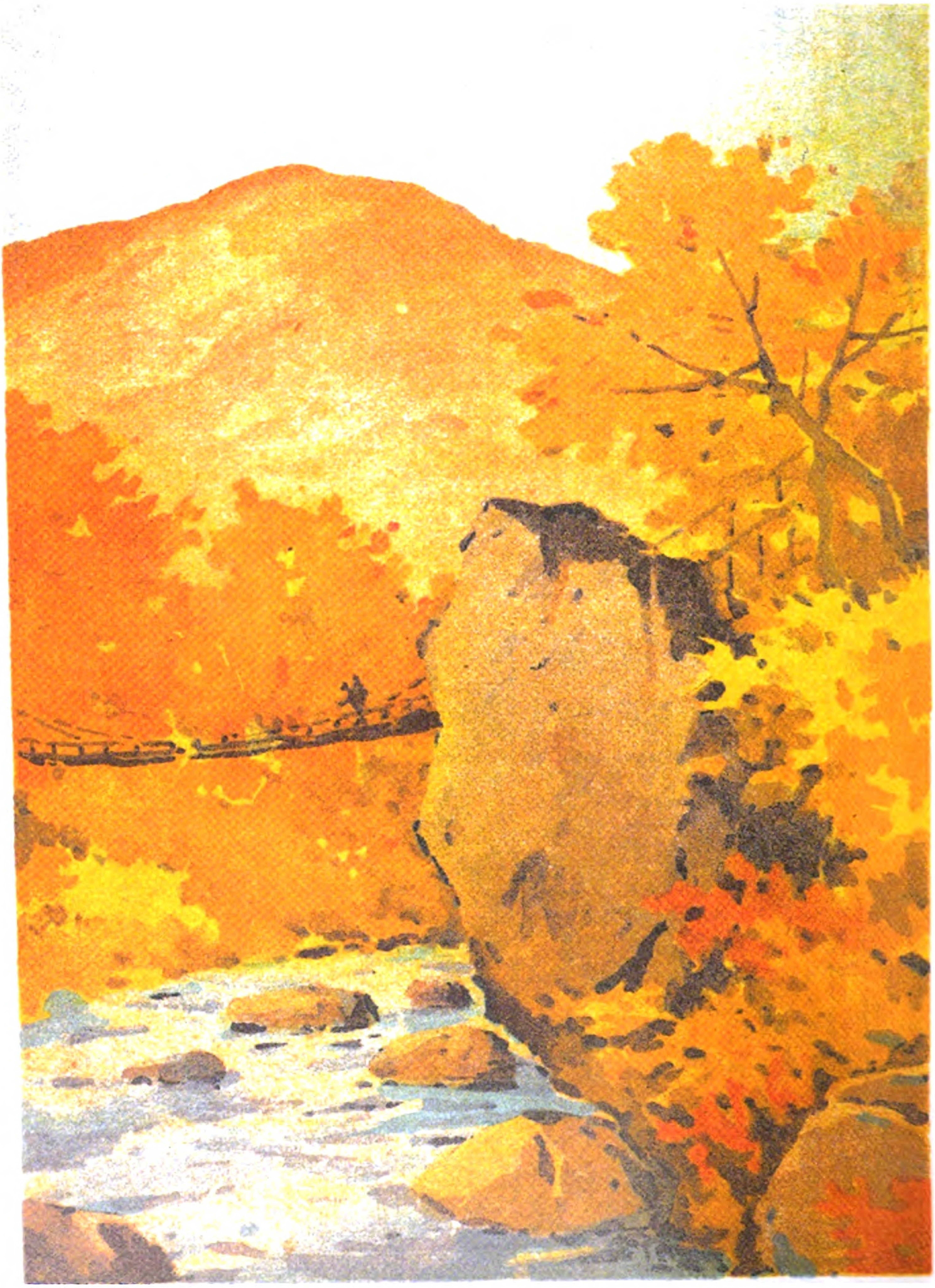
上製優美全壹冊
正價金貳圓
郵稅金拾四錢

發行所　東京神田區上白壁町九　振替貯金口座三四〇九　二松堂書房

賣捌所　全國各書店


東京樂器製造所製
オルガン（金拾八圓以上）
山葉製オルガン（金拾八圓以上）ピアノ（金參百卅圓以上）
鈴木製ヴアイオリン（金貳圓以上）
獨逸國直輸入ピアノ（金五百圓以上）オルガン（金參百五拾圓以上）ヴアイオリン（金八圓以上）同上附屬品吹奏樂器
弦樂器各種
舶來樂譜
目錄御入用の節は御申越次第直に御送可致候
東京市本郷區湯島切通坂町二十七番地
南江堂樂器部
電話下谷一三三〇番　振替貯金口座一四一九番

山中の秋色



三宅克己先生筆

第五回内國勸業博覽會賞牌及褒狀受領

登錄商標

壽美禮おしろい

五二會品評會功勞賞牌

THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ヴワイオレツト煉製
附屬乳白硝子器入
壽美禮おしろい

◉壽美禮おしろい

◉ねり製 定價（大壜二十錢 小壜十二錢）

水製 定價（大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢）





ヴワイオレツト水製

錫栓附乳白硝子壜入

すみれ白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素新成績液體等を以て配劑しあるを以て肌を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの性あり『壽美禮白粉』は常に用て御顔肌へを清淸しく天然の色白きに至るべし菫『おしろい』は芳香馥郁と長く保つが故宴會、祝席、雜踏の塲合に臨て衛生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

◉西洋洗滌劑 壽美禮あらひ粉の特性

◉弊舖製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞發する香料及弊舖新製の原料を用ひて製せしものなれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば能くあかを落し御肌を美くしくなす

◉常に髮洗ひに用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生ぜず又手ふきハンカチーフ絹綿等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白するの性あり

◉使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は溫湯に溶し又はぬかに混ぜ入浴の際用ふるを良とす

綠、藍、紅彩蝶番ひ 鑵詰八錢 袋入壹錢 大袋入二錢 別製鑵入五拾錢

登錄商標

西洋色白くなるあらひ粉

SUMIRE
Washing Powder

壽美禮あらひ粉



製造本舖

東京東兩國 元町兩國橋際

壽美禮堂謹製

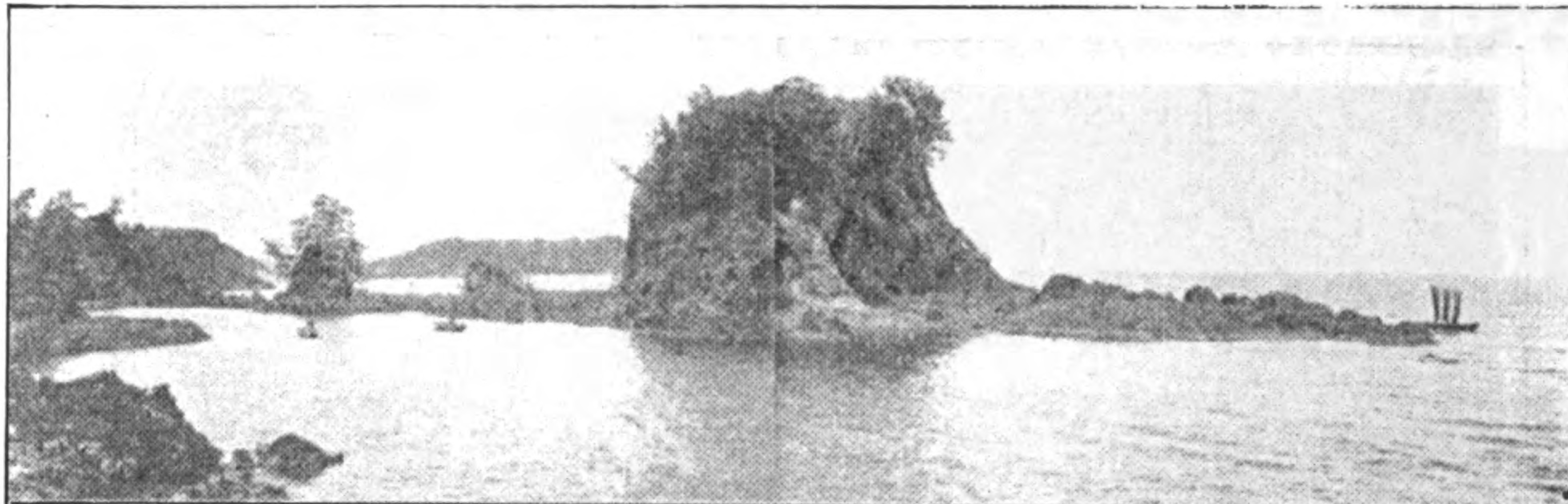
販賣所ハ全國到ル處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工塲各劇塲運動ニ有り

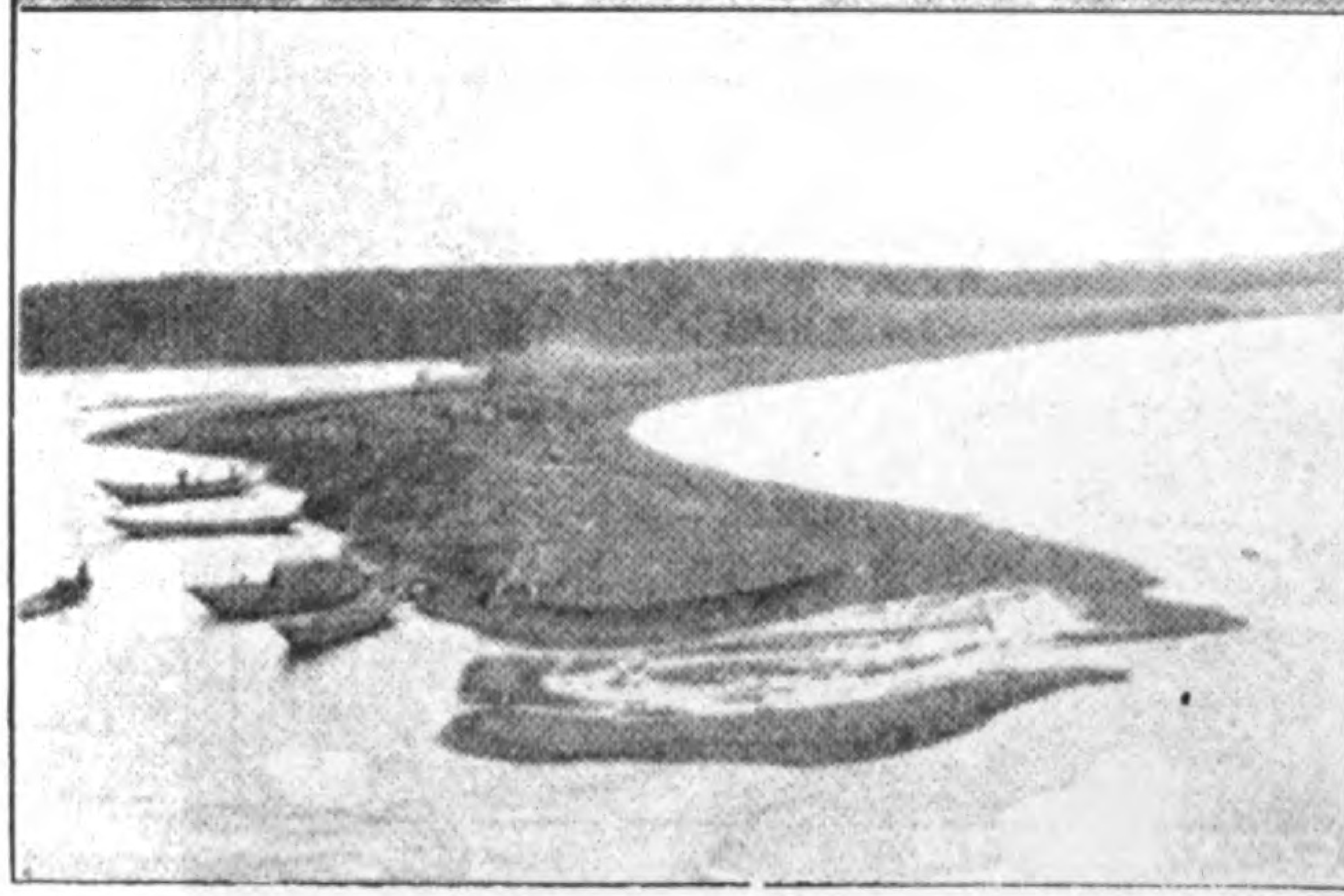
獨唱家フレック孃



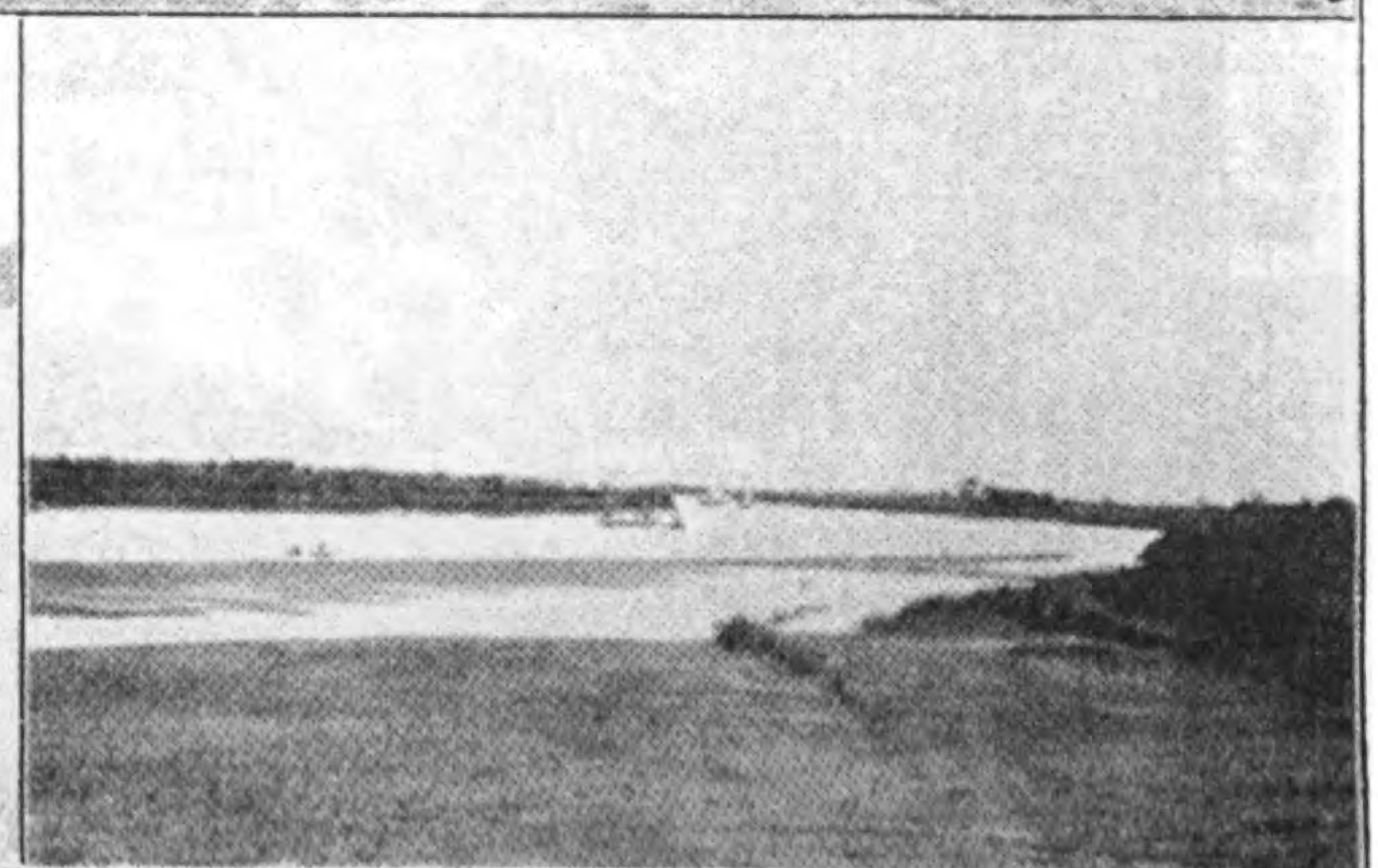
シャロッテ、フレック孃は獨逸伯林の生れにして唱歌の研究に身を委ね殊に獨唱に妙を得たるが、今回わが東京音樂學校にて獨唱專門の敎師として雇入れ前月五日來朝したり

佐渡小木港の經島と矢崎の景 （境野茂登子寄）





樺太西海岸トーロー業場の一部 （中野よね子寄）



下總市川利根の景 （板橋たい子寄）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

壇友優待◎毎號大懸賞◎筆戰雜誌

秀才文壇

毎月一日十五日發行　一冊金十錢　賣捌全國書店

第廿三號 十二月一日發行　第(七卷)第廿四號 十二月十五日發行

毎號賣切れの大盛況

水彩繪葉書(石版十色刷)……三宅克巳筆
スケッチ……山中古洞選
小説……吉本雅美筆

▲毎號選評擔任大家▼

○叙事文……文學士 中内蝶二
○抒情文……同上
○短篇小説……德田秋聲
○俳句……高濱虛子
○新體詩……馬場孤蝶
○新派和歌……文學士 尾上柴舟
○和歌……佐々木信綱
○漢詩……小笠原盧舟
○評論文○日用文○五行文學○人物評論○文士會(以上編輯局選)

正價　大判百三十頁
一冊郵稅共金十一錢◎六冊同六十三錢◎十二冊同壹圓廿錢◎廿六冊同二圓卅四錢
◎定期增刊　年二回

明治卅四年十月創刊

◀少年之友見本一冊(入用の時は)郵券三錢送らるべし▶

少年之友

毎月一日發行　一冊金五錢　東京神田文光堂

大評判少年雜誌　第二卷第十一號(十二月)

○紅葉狩り(石版五色刷)……宮川春汀畫
○少年書手本(石版二色刷)……山中古洞 吉本雅美筆
△鴨△大原女△枯野△小春

菊のうた……少年子
お母様……小川未明
三つの靈藥……華園李蹊
菊の話……笹尾藤造
月の兎……木村小舟
白銀城……鹿目野徑
觀兵式……栗田軍太
ぼくの日記……記者
霧降の井(太田道灌の話)……秋畝生

少年文壇　○普通文○日記文○はがき文○四行詩○和歌○俳句○お笑草○新考物○友達會○○筆蹟スケッチ

無比廉價　一冊金五錢○郵稅五厘　六冊前金廿七錢○十二冊前金五拾四錢(郵券代用一割增)

發兌元　東京神田區旅籠町一丁目　文光堂(振替口座壹九五五番)

賣捌　東京堂　北隆館　東海堂　良明堂　上田屋　至誠堂



（佐渡）土屋きせ子



（千葉）島田郁枝・安村靜代



（滋賀）飯田富美榮子



（埼玉）佐久間玉江



（東京）黒田吉野・岩崎榮子

（續々御寄送を願ます逐次掲出お返し申します）

誌友おもかげ（二十）



瓜崎てる子（静岡）



今井智賀子（宇都宮）



牧富久子（大分）



稲葉静子（土浦）



阪本とめ子（鹿児島）



曾波末子（廣島）



副田みつ江子（大阪）



倉成彌生子（對馬）

記者申す　續々寄送して下さい順次掲出の上お返し申します

世界唯一 痳病消渇の根治新藥

麻滅（りんめつ）

痳滅は最も進歩したる最新の痳病消渇即治模範藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新藥を主劑とし是を内服して痳病消渇の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち滅殺する處方に基き製劑せし新藥に付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず癒て根底より根治するを確證す但し彼の舊式洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者豫め之を諒せよ

藥價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢郵劵代用貳割増しの事

專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

色白特効 ペーアス石鹸

此石鹸は世界第一等の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を掲げん皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質を治するは此石鹸特有の神効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し蒸るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する内國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ（昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個荷着せり速に御注文を望む）

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

輸入一手專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

痳病根治新劑

痳病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の痳病桿狀菌の媒介による傳染症たること發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多の研究を重ね數千患者の實驗に徵し苦辛經營の末今回始て完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調製せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚説に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絶し生涯永久の榮華を完ふせよ、輕症は壹劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す、藥價送料共壹劑五圓拾錢特別製分拾圓拾錢

着金即刻小包密封送る

梅毒根治新劑

本劑（藥名ドクトル）は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一の**ばい毒**根治特効新藥なり故に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症（即ちばいどく。ひゑ。かさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。痳毒。ろいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等）ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて**誓って根治**するを確證す從來醫療賣藥幾百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ。藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢着金次第送る、郵便切手代用貳割増しの事

以上 專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

眞正極秘 粹珍書案内

望の人郵劵四錢送れ直に送呈すべし披閲忽ち愉絶快絶眞に粹士必讀の珍書案内

申込所 東京市下谷區西黑門町廿番地 東雲堂書店

安いこと天下無比

改正賣價

河井醉茗著

詩と美文 玉むし

色クロス箔入上製 正價六拾錢

賣價金四拾五錢

郵税六錢

諸大家選評

女子懸賞文集第二

全一冊洋裝五百頁 正價三拾五錢

賣價金貳拾六錢

郵税六錢

第一は賣切れ増刷せず

小森松風著

言文一致文範

全一冊洋裝大判 正價四拾錢

賣價金參拾五錢

郵税四錢

中村報知新聞記者著

實地踏査 女子遊學便覽

全一冊洋裝校長肖像入 正價三拾錢

賣價金貳拾五錢

郵税四錢

鈴木秋風著

小説美文 朝ばれ

全一冊本綴彩色畫入 正價四拾五錢

賣價金參拾五錢

郵税四錢

小森松風著

美文作法

全一冊洋裝大判 正價四拾錢

賣價金參拾五錢

郵税四錢

發兌元 東京市京橋區大鋸町十一 振替貯金口座第一七二九番 女子文壇社

賣捌 各店

女子文壇

第三卷　第拾四號　目次

女子文壇



第三卷第十四號

(明治四十一年十一月一日發行)

愛嬌

愛嬌と謂ふのは女子特有の表情を指す言葉で、男子の方は愛嬌があつても無くても通るが、女子の方は愛嬌が無いと甚だ女性美を損ずるのです、近頃女子に學問をさせる結果、愛嬌の乏しい女が追々增加て來るやうです。最も愛嬌ばかりで出來上つたやうな女も、賤むべくして尊ぶべき理由を見出しませんが、全然愛嬌を殺して居るのは不可せん、人の前に出て顏を紅潮するとか、若い女が嬌羞を呈するとか言ふ事は、女子が生理的心理的に自然に表現て來る動作で、私は學問をして居るからうつかり人の前で笑つてはいけない、何でもむづかしい顏をして見せればならぬと、强て感情を抑へて、形式的に流れるのは甚だ面白くないのです、愛嬌は尊嚴を害しません。從來の女子が餘り優柔不斷であつた反動で、自覺した女子は何の場合にも尊嚴を失はないやうにと、殊更愛嬌を殺ぐやうになつて來たのでせう。教育があつて愛嬌もあるのが眞に理想の美人と云ふべく、然う云ふ顏が多くならなければ、我婦人界に新しい花は咲きません。愛嬌も無意味に振舞はすと却て輕侮せられる許りですが、修養ある愛嬌は決して輕侮を招かないのみならず、一種、人を引つける女子特有の力となつて働くでせう。

冬と日本文學

文學士　武島羽衣

冬は終也て、冬になると萬物が皆終るものであるといふことから支那ではふゆを冬と書くのである。日本にてふゆといふは冷ゆといふ言語の轉じたので、冬になると物がひゆるからといふことである。さてこの冬には三月ある。故に三冬といふ、したがひて九十日あるところからして九冬ともいふのである。この三個月のはじめの月則十月を孟冬、あるひは初冬ともいひ、音樂のしらべからして應鐘とも呼ぶのである。日本ではしぐれ月、またはかみな月というてをる。また十月の頃は冬とはいへ、まだのどかに暖き時も多いより小春となづけてをる。小睦月などいふことがあるのもこれから出たのである。次の月則十一月を仲冬またこの月にひく音樂のしらべによりて黄鐘ともいふ。日本では霜月といふのである、最後の月則十二月を臘月といふ。これは臘は獵で、この月には獵をして先祖をまつる事が支那にあつたことから、かく呼んだといふ説がある。また大呂といふこともあるは音樂のしらべの名である。日本ではしはすというてをる。

さて冬といふ時候はいづかたより來るものであるかといふに、支那の説によれば北方からくると考へられてをる。さうしてその色は黒いと思はれてをる。故に冬のことを玄冬といふこともあるし、また冬の神を玄冥というてをる。

それでこの冬といふ時候は人生と比較せられてその老年にたとへらるゝぐらゐで、まことに寂しくものかなしい時候に見える。西行法師が

　つの國の難波の春は夢なれや
　　葦のかれ葉を風わたるなり

とか、もしくは文屋康秀が

　山里は冬ぞさびしさまさりける
　　人目も草もかれぬと思へば

とあるのは最よく冬の寂寞たるありさまをそどらせ

てある、このほか冬のありさまはいかにといふに、國基の歌に

いつのまに空のけしきのかはるらむ
はげしきけさの木枯の風

とあるやうに、嵐が吹きすさぶとか、あるひは俊成が

おきあかす秋の別れの袖の露
霜こそむすべ冬やきぬらむ

と詠じたごとく、霜がさやぐとか、もしくは、蘆庵の歌に

朝ごとにならす硯のすみやかに
手のうら寒き冬はきにけり

とあるやうに寒さが日に〳〵ますとかいふやうなさまて一言にしていへば悲涼凄慘閑寂といふのが實に冬の特質てある。また蜀山の狂歌に

冬の月は炬燵やぐらにたてこもり
うつて出づべき勢ひもなし

ともあり、また冬ごもりなどいふ言語のあるのでも知らるゝ如く冬は散策の樂もなく因循な不愉快な時候てある。しかしこれは冬の暗黒面の觀察て、光明面の觀察をもなさねばならぬ。弘訓が

夏かげとたのみし椎の木のもとに
落つる實ひろふ冬はきにけり

とか、あるは公衡の

かりくらし交野のましば折りしきて
淀の河瀨の月を見るかな

などいふ樂は冬をまちてはじめて出來るのではないか。ことに蘇東坡が

一年好景君須記。正是橙黄橘綠時。

とあるは冬をたのしき時と考ふる上に大に力ある句というてよろしい。

さらに飜りて、裏面から觀察して見るとこの冬といふ時候はその外見のさびしく興味うすきには似ずして、きはめて趣味ある深長の意をもつてをる。古へ支那にては十月一日則冬の初にあたり酒を飲み、肉を食して相樂む風俗がおこなはれた。これを煖爐會といつてをつた。日本でもこの風を傳へたものと見えて冬

のはじめ炬燵を開くことがある。これを爐開きといつて一の祝ひごとにしてをる。また茶をこの日人は爐のほとりにて新茶を賞味して人を饗することがある。これを口切りといふのである。かく考ふると冬といふ時は次第に一家の團欒のはじまる時である。したがひて、うからやからの打解けたる、いふべからざる樂の生ずる時である。野坡の句に

あたゝかにやどは物くふしぐれかな

もしくは白川樂翁公の

うづみ火のあたりのどかにはらからの
　まどゐせし世ぞかなしかりける

などあるはこの意味を歌うてをる。

また考へると冬は人間が過去を顧る時である。回顧の時期である。一年の終にあたり空しくすぎしその年をふりかへりて一身のうへを考ふる時である。國信が

一年ははかなき夢のここちして
　くれぬるけふぞおどろかれぬる

とか、宣長が

あつめても光はそはで窓の雪
　かひなくつもる年のくれかな

とか、あるひはある人の

讀みさせる文のかず／＼とりそへて
　机につもる年のくれかな

もしくは、知紀の

かくばかり流れて早き年浪を
　のどかにのみも渡りつるかな

その他來山のいうた如く

來年は／＼とてくれにけり

などいふ吟詠は、いづれかこの意味にもるゝものはない。

かやうな次第であつて、冬は實に懺悔の時である。奮發の時である。もしこの冬といふものが無かつたならばこの人生といふものはいかにあだにすぎさるてあらう。さらぬだに醉生夢死にをはりやすいのに、ましてこの歳暮といふものがなかつたならば人は全く勇猛

精進の心を失ひて向上發闘の思をたやすであらう。かやうなわけて、冬といふ時節は肉體の目にこそおもしろきうつくしき觀をあたへないが、精神のまなこ、心眼といふものにはまことに奥ふかき深甚なる思想を啓示してをる時候てあるというてよろしいと思ふ。

簑虫

兒玉花外

私は今しがた『薄命傳』を綴つて居たが、ある悲哀しい局所になつて、濕んだ眸を側へおとすと、小さな虫を發見けた。其れは簑虫てあつた。

この烈しい夕立に、綠の葉裏を忍び出して、奴さん！簑をかついて人の窓へ逃げて來たのてあらう、疊の上にとまどふて居る。

机の詩集の赤表に截つけて、筆の毛尖て戲に突ツくと、小さな頭を簑か家かへ凹めて了ふ。而して暫くは怖れてか動かない。

私は、この虫が灰色の簑を着てチヽよく〳〵と啼いて、庭を歩き廻るのに、笈摺姿の彼の順禮の子を想像する。

凡そ世の中に順禮の扮装ほど東洋的て、しかも哀れなものがあらうか？ 私は旅て幾人か可愛い順禮の少女に邂逅つた記臆を存つてゐる。

南海道、紀の國は粉河寺の松並木て鉦の音！ 熊野那知瀑への海道て、御詠歌は悲しう波に響いて、私は旅の袖を霑らした。

四國路は阿波の徳島から、讃岐金毘羅への途すがら、夥多……紅頰は櫻色のした美しい女巡禮と行合ふた。——天刑病は少時は別けて艶美だが——成人となるまて惡血の肌を紫染めぬやう、大慈の御大師へ願ひの廻國てある。

千年、杉と檜との風下ろす、高野の山の中て、年齒は七八才ともあらう例の笠と白衣の背は黑々と字をしるした女の兒が、母親(？)に連れられて坂を登る——。

私は、この小娘がお山へ入れられるのか、亦は諸所

を廻り歩くのであるか、孰れ家庭にいはれぬ因果な事情の爲めであらう!!!と、思ひやつて山中で泣かせられた。短い髮毛、後影が今でも睹える。

若し市街ならば、關西地方は順禮は多いので、人の檐下に立つ姿!秋の夕暮抔に露路へ這入つて、鉦と哀音に十軒餘も浮世小路を充たすともある。

噫!私も人生の哀歌を唱つて、世の中を往く漂浪者であると改めて言つて置く。

と、見ると、机の上に簑虫は錢も無い。あはれ!汝も順禮を人間に眞似るのであらうか?

靜夜

小川未明

自分は琵琶を抱いて、山道を馳せ下つた。岩や石が凸凹としてゐて、幾筋となく溪川が流れてゐる、それを越えて細い山路に差しかゝると繁る梢や、山梨や、木下影の暗い徑を一心不亂に脇見もせず麓の村里を指して急いだのである。

宵闇をたゞ風の聲と溪川の音とを聞くばかりで、蜩の啼聲もせなければ兩岸に聳ゆる山又山、脚下は暗い深谷——この深山の中を歩いてゐながら時々溜息を洩しては、目の前に彼女の面影を思はざるを得なかつた。すると溫泉場の光景が目に浮んで來る。

動もすれば霧がかゝつて來て、一寸先も見えなくなる崖の下に危げに犇々と軒を並べてゐる溫泉場の、石置屋根には落付いて日影の差すこともなく、彼方の峯も、此方の溪にもいつも霧がかゝつてゐる。夜になれば管笛の音色悲しく按摩が杖をついて通る。

夜になると湯殿には暗い行燈が點つてゐて、効能書の額の、湯氣に樣の漆の剝たのが兩側に懸つてゐて、ちよろ〳〵と自然に湧き出る湯が竹筒から落ち込んでゐる。——身軀を湯に浸して窓の格子を洩れて射し込む星影を見詰てゐると、何だか便りないやうな感じがせられる。……

どうかして、彼女を連て、あの山蔭の湖水の畔へ行

くてとは出來まいか。て、私の一曲を彈じて聞かすことを得しめたなら……

決して空想てないと私は信じてゐる。あの、默々たる山の、死せるやうな靜かに漣を打つてゐる水面に冴えたる琵琶の音色が響いたならば、默々たる山は愁ひ、水は戰ひ、行く雲の歩みをとゞめたてあらう。そればかりてなく、私の傍に立つて其を聞いてゐる彼女は、きつと首垂れて私の前に佇んでしく／＼と泣くを禁じ得ないてあらう。

彼女は私よりも二日前に溫泉場を立去つた。私の戀は敢果ないものとなつてしまつた。私は山路を下り、麓の廣々とした裾野に出た。星は隈なく閃めき、初秋の風の吹き、冷氣衣に滿つる。繁る草の葉末には露が下りて、虫の泣聲が不毛の高原に何處から何處へ吹くとしもない風に亂れては秋の更け行くまゝに衰へて行くのか、獨り鈴虫、轡虫の泣聲を聞くばかりて、荒涼たる秋の大空には、天の川がほの白う流れてゐる。

私に道端に轉つてゐる石の上に腰を下した。て、詩にあるやうな可憐な失戀の痛みに堪へかねて、私は琵琶を鳴らし始めた。風に縺れ合つて、私の彈ずる琵琶の音色は東へ、北へ、南へ、西へと私に暇乞を告げて――『きつと妾等は、あなたの思うてゐなさる娘さんの耳に入つて、あなたの心のうちを知らせますよ。しかし、もう妾等とあなたとはこれが今生のお別れです』と琵琶の、彈ずる音色は、影も、形もなく風に消えて行つてしまふ……

自分は頭を廻らして、夜の景色を眺めて考へた。其等の山や、川や、琵琶の音色や、溪川の流れや、草や、木立やすべては果して無情てあらうか……彼の少女一人のみが有情てあつて、他の自然界のすべてのものは果して情のないものてあらうか……

あゝ、自分は樂人だ！自分は藝術家だ！萬有を愛さなければならない。星は私の友達て、山や、川は私の住家てあるまいか。――別離は、人生の常態で遠く分るゝも、近く居るも、畢竟地球の上の處を異にするばかりて、同じく彼の星を仰いて、此の大空の下に住ん

てゐるのである。死するも生きるも畢竟下界と天界と處を異にするばかりで同じく永劫不變の宇宙の間に存在してゐるのである。さらば、彼の少女、我が彈ずる風に消え行く琵琶の音色、一たび去つて再び見ることがないとも、私は此の信仰の上に安立して、永遠に我が友であり、我が戀人であるといふことを疑はない。

私は、安心して更に一曲を樂しい思ひて彈じた。風は颯々として不毛の廣原を吹いてゐる。

作文その折々（前々號の續き）

高須梅溪

（四）自然人事の見方と感じ具合

叙事文にもせよ、叙情文にもせよ、其の内容を滿たすものは、自然人事の美、乃至、之に對する各自の觀想です。何れにしても自然人事を材料とせねばなりませぬ。

しかし乍ら此の眼の前にある自然、人事を材料として取扱ふのは、自ら一種の方法があります。即ち各自、此の自然に對して、如何なる感じを惹き起し、如何なる寫象を得るか又た人事に對して如何なる思ひを起し、如何なる寫象を得るかと言ふ一點です。

自然人事についての或寫象を得るには、或適當な見方を爲す必要があると比しく、其の感じを惹起す塲合にも、その折々の心持ちについて注意することが肝要です。先づ此方法を執る前に、申して置かねばならぬのは、新時代の吾等が昔の人とは、甚だしく自然、人事の見方と感じとを異にするに至つた事です。この變化を來した原因は、西歐文藝の潮流から汲み取つた餘りの雫に影響されたからです。

昔の人々は、新時代の吾々と違つて、其の自然を見る時にも、或特殊の寫象を得んとはせずに、春雨と言へば、糸のやうだと思ひ、秋の風と言へば、颯々と吹くものと見做し、月と言へば、何時迄も白銀の光りを

放つかのやうに、或一個の定つた鑄型に當て嵌めて、少しも其の特殊の寫象を得るに力めなかつた傾向が明白に見て取れます。

花に就て言へば、梅花は何時も雪のやう、躑躅は始終燃えるやうな色、萩は唯、嫋々とした姿と言ふ風に、各自、其の見た時と場合とを異にするに關らず、何時も同じ見方をして居るのは、如何言ふ譯でせう。

必竟するに、其の見方が精細でなく、適確でないために、かゝる結果に陷つたに違ひありませぬ。新時代の吾等は、見方に於て古人とは全く異なつて居るのです。

自然の風景でも、今迄は、日本三景とか何々八景とか、既に一定した名高い平凡な景色を除いては、別に稱するに足る丈の風景がないとまで思ひ込んで居たやうですが、今では、この點に就ても、矢張、別な見方をするやうに爲つたのです。

單にそれのみではなく、自然に對する感じも、今は、一變して居ます。秋の月は悲しいもの、落葉は淋しいもの、梅花を見ては鶴に跨る仙人を忍ひ、菊の花を見ては、隱逸の詩人を連想し、牡丹に對しては、富貴の家を想ふのが、從來の風であつたやうですが、今の新しい人々は、決してかゝる一定した鑄型に物を入れて、古臭い感じを繰返すことが出來ませぬ。

人事の方面に於ても、美人とさへ言へば、沈魚落雁と相場を定め、豪傑とさへ言へば、鬚髯威めしい、人物と取定めて、或特殊の見方を爲なかつたのが、今では、全く異なつた見方をするやうに一變したのです。

自然の見方と感じ方

今の新らしい見方を自然の上に應用するには、從來古人の見方とは、全く正反對に出ねばなりませぬ。風景に對しても、日本三景よりは、却つて武藏野の平原美を稱し、三保の松原よりも、相摸野の景を愛すると言ふ風に、餘程、異なつた傾向を生ずるやうになつたのです。春雨に對しても、秋の月に對しても、其の時其の場合の如何によつて、自ら別種の色相を呈すると言

ふ點に眼を着けるやうに爲つたのです。春雨の下界に濺ぐ形、其の色、其の聲に伴ふ或見逃しの出來ぬ特徴を捕へるのが、新しい秘訣でせう。秋の月を見ても、森林から見た時、山上から眺めた時、平原で見た時、夕暮と深更、若くは夜明け方の如何に依つて、同じ秋の月でも、其の時、其の場合に相應した特徴を呈するに相違ありませぬ。即ち此動かすべからざる特殊の點を見逃がさぬのが、新しい見方です。

此の見方は、近頃の若い文學者の手に爲つた作物の中に於て、如何に自然を見て居るか其の態度その傾向を見れば、明かです。

久らくして眼を覺して見ると、林の中には、一杯日が照つてゐて、何方を向いても、嬉しさうに騒ぐ木の葉を透して、蒼空が華やかに火花でも散らしたやうに爲つて見える。雲は狂ひ廻る風に吹拂はれて隱れて了ひ、空はからりと晴れて、空氣は爽然とした一種の涼味を含んで人の精神を爽かにする。

秋晴の特徴、殊に平原中の森中から見た秋の日の或特殊の匂ひが明白に筆の上に浮んで居ます。昔の人ならば、此樣な精緻な、適確な點を見得なかつたでせう。

更らに其の感じ方にても、秋の月は、悲しいものに取定められて居たのが、今は、或場合には、別に嬉しくも、悲しくもないもの、若くは樂觀すべきものとさへ思ふやうに爲つたのです。之も蘆花氏の『自然と人生』等を見れば、能く諒解せられるでせう。

人事の見方と感じ方

今の新しい見方を人事の上に應用するには、古人の見たやうに、美人はこれ〳〵の形、勇士はかく〳〵の姿と一定した規則、睨み方を打ち壞はして、全く各個人の容貌に現はれた一種の特徴を見て取ることが肝要です。多くの美人の寫眞を見ても、比しく艶麗とは言ひ乍ら、其の目鼻の格好から口元に至る迄、各自一定して居ないのが通則です、從つて其の見方も亦昔の如く漠然たるものではなく、今少し精確でなければ、或特殊の美人を思ひ浮べる事が出來ませぬ。此に於て今

の新らしい文學者は、何れも各個人に於ける見逃しの出來ぬ容貌、態度、癖を見逃さぬやうに覗ひを付けて居るのです。

葡萄酒の所爲か、仄り赤くなつた横貌が燈火の影に艷々と匂ひ零れて、濃い切髮の後毛が二筋三筋頰に被つた。口元に折々優しい微笑が浮んだり、冷たい嘲の色が動いたり、美しい眼は始終盤の上に輝く。

此一節を讀んでも、或特殊の美人に對して、見逃しの出來ぬ一大特色を捕へやうとする傾向のほの見ゆることを否定することが出來ませぬ。

唯に其の見方のみならず、之に對する感じも亦餘程、複雜て且つ變化し易くなつたやうです。

全體の主要點

之を引括めて言へば、或畫家が人物の肖像を畫く場合に、其の人の顏面に於て特に著しい特徵を極力寫し出す呼吸を、自然人事の見方に應用し、同時に從來、古人が花鳥風月に對して惹起した感じを全く取るに足らぬとして、其の時、其の場所に於ける特殊の複雜な感じを描き出すことが何よりも肝要でありませう。其の結果は、自然人事の特殊なる色と匂ひとの印象を最も明瞭に人の頭に刻み着けることが出來ます。これが敍事、敍情總べての上に於ける文章上の肝心な描法の根本です。

母の智慧

山崎紫紅

昔のまた昔と思へ、光明莊嚴國といふ國に、雲雷音宿王華智佛と申す佛がござつた、この國の王樣は名を妙莊嚴王と稱へまする、大層威勢のよい王樣で、我意に任かせては、隨分と人の困るやうな事を致します、后の宮は淨德夫人と申されて、淑德兼備せられた立派の御方でした、お子樣が二人ある、兄樣を淨藏と云ひ、弟樣を淨眼と云ひます、この二人は兼ねてより、佛道を修行しまして、諸種の神通力に達して居る、この時、前に申上げた佛樣は法華經といふ有難い法を說かれま

すので、兄弟の王子は、聽きたうてならぬ。しかし佛法を聽きに行くなど〻申しまするど、父の大王が立腹するので、阿母樣の所へ相談に參りまする、

『阿母樣、今、佛は法華經を說かれてです、私達も聞きに往きたいのですが、如何てせう。』

『さうだね、大王には兎角佛法がお嫌ひで、邪曲い法にばかり御執心なされてだから、容易お暇が出ることては有るまい、彼々お前達が習つた神通力を出して、御覽に入れたら、御機嫌に應つて御許しが出るかも知れぬ。』

それでは一番父の大王へ、佛樣から習つた神通力を御覽に入れませうと、御前に出て、

『父樣、私達の神通力を見せませう。』

『なんぢや神通力ぢや、己れなんどに何が出來よう、指を切つて血が出た位が神通力ぢやろ、よいよい今、父樣が見て遣らう。』

大王は嘲りの色を帶びて、庭先近くへ出られまする、兄弟はこ〻ぞ一生懸命の塲所ぢや、取外してはならぬと、氣を揃へて虛空に躍り上つた、多羅樹といふ木は、五十尺位が普通であります、それを七ッ加へた程の高さに座つたり、臥したり致しまする。

『子供達よ、やれ危い、落ちるぞと、大王は空を瞻仰て申しまするが、もとより大神通力を授かつて居る兄弟とて、或は走り、或は躍り、種々の遊戯を御覽に入れまする。

今は大王も我を折りまして、子供達は何時の間に、こんな事を習ひ居つたと感心して見物せられまする。

兄弟は益す虛空で秘術を顯はします、身の上から火を出しまするど、身の下からは水を出します、火は燃え上つて柱のやう、水は下つて瀧と散らばふ、瀧の先きに火が燃えた、烟は空に戻つて行く、見れば今度は身下から火が出るのだ、身上の火は水と變じた、噴水器のやうに吹き上つて居る。

やと聲を掛けると姿は消えた、消えたのではない、米粒のやうに縮まつて見えぬのだ、何處と見る間に、一天は二人の王子で塞がつた、大きな王子は虛空に列んで漲るやうだ、また小さくなる、蟻のやうだ、大きくなる山のやうだ、「昏い、冥い、空を掩ふたのは二人の影だ。

昏いぞと云ふと地に現はれた、大地に入るのは、水のやう、あれよと云ふ間に、池中に沒してしまつた。

と見ると、池の面、鶴は眠り、白鳥は足搔を休めた中

に浮かみ出す、水を履んでは陸地の如く、翔けり駆けつて縱橫自在。道がの王も愕きました、急いで兄弟を呼んで、どうして如是の神通力を得たぞと問ひました、二人の王子は跪づいて、これこそ雲雷音宿王華智佛から得たる神通力である、大王よ、かゝる目前の不思議は申すに足らぬ、いまかの佛は、法華經と申す三世過去未來に亘る摩訶不思議不可計の御法を說いて居られる、どうか我と共に聽問にお出て下さいと、お勸め申した所、大王は快く御得心なされて、さらばと云ふて家來を連れ、后の宮も三千人の采女をお供として、かの佛樣の所へ參り、阿耨多羅三藐三菩提といふ無上の道を授かつたと申しまする、これ單へに母淨德夫人の智惠に依れりと云ふ事に承知致しまする。

高原の秋

秋風

蕭條たる高原の秋は來た。

あゝ雲の色も、風の音も、今日は泌み〴〵と身に感ぜられる。露しげき千草の花、かれ〴〵な虫の聲、何と云ふ物悲しい景色であろう。疎な欅や樫の大樹が立つてゐる間を縫ふて、敷き詰めたやうな叢、其處には野馬の寒しそうに嘶く聲もする。雲は流れる、また流れる。風は吹いて行く、又吹いて行く。霧が罩めて來たと思ふと弱い日光が落ちて、明るく〳〵なつたと見れば、漾々とした煙が飛んで來る。裾野の果に遠く見える八講山に日が照つても、其傍に並んでゐる筑波山に白雨の降るのが見えたり、脚下の銀河のやうな那珂川が寂し相な日影に光つても、頭の上の茶臼山の頂上が夢の様に霞んだり……。斯うして寥々たる秋は訪れて來た。——一里の下に見える脚下の裾野から來たか、頭の上の山巓から、峰を越え谷を越えて來たか、それはわからぬ。併し、兎も角、此の那須山腹一帶の蕭條たる高原に秋は來たのである。

秋だ、と叫びながら、湯川の溪流の岸傳ひに上つたり、下つたりした。そして霧の多い旭橋の袂に立つた時は、美くしいソフィーを失つた若きノヴリスが心になつた。殺生石の上に登つた時は、風に向ひて長大息すれば、潜然として涙下ると云つた、魏の武帝が事などを思ひ出した。

更けて聞く窓前の溪流の響、雨の日ぐらしの湯瀧浴、湯坪の中に月光が射せば、麗人の肌が透いて、冷しい風が颯と過ぎれば、竹欄の手拭が飛ぶ。

ある朝、湯本の入り口に立つて、物思ひながら露草の花を摘んで居た。すると、だら〳〵下りの坂道の上の方から、馬の鈴の音が霧の中に聞え出したが、近付いて見ると、それは今朝此の湯本を出發つて歸つて行く浴客の群であつた。馬子はしだらない樣子をして、寢むそうな顏をしながら、馬の手綱を引いて來る。中には赤い細帶をした年若い女馬子もあつたが、何れも皆檜笠を脊中に脊負つて、裸足に鞋を穿いて居る。――女馬子の足の眞白なのが眼に止ると、鞋の紐が何だか痛相て、見る眼もいたはしかつた。――又馬の上には、白い浴衣を片肌拔いて、團扇で禿げた頭を叩きながら、うつら〳〵と坐睡をしてゐる氣輕相な老人もあつた。或は火燵櫓を馬の鞍に結び付けた中に、ちよこなんと入つて、後の馬で來る母の方を振り返り〳〵、乳が飮み度いと云ひたさうな顏をしてゐる少女もあつた。中には書生も交つて居たし、商家の小僧も交つてゐた。一隊は凡て九人、馬上にゆられ〳〵、朝霧の深い中にかくれて行く。それを凝然と見送つて、影がかくれて了つて彼方から、馬の嘶きに交つた鈴の音を聞いた時には、沙漠の中を往來する、東洋の隊商の群を思ひ出さゞるを得なかつた。そして、今吾が眼に見た通り、九人の一隊は別々の人と組とが偶然に逢つたものに違ひない。併し同じ日の同じ時に、同じく馬で同じ溫泉を下つて行くと云ふ間には、何等か深い因緣が無ければならぬやうに思はれた。今でこそ緣も何もない人々同士でも、前世は肉緣の者であつたとか、或は戀の仲であつたとか、何かそんなあるもので無ければならぬと信じられたのである。

その人々の樣に、自分も今はもう此の山を下りて行かねばならぬ。併しあの人達と同じに、馬に乘つて出發つて行くのは如何しても忍びない。馬に乘つたあの寥しい姿！あゝしてあの蕭條たる秋野の中を辿つて行く事は、臆病な自分の感情が許さない。なつかしい硫黃の香と別れて、自分を乘せた馬の物靜かな鈴の音を聞きながら、しめやかな秋草の眞盛りな中を通つて行かうものなら、私の小さな胸はもう取りどめもなく亂れて了うに違ひない………（其一節）

落葉林

河井醉茗

▲詩歌に最も愛されたのは草木の花である、木の實草の實は西洋の詩歌にあるが日本の歌に草の實は兎に角木の實すら歌はれない、近頃漸く木の實の詩を見るやうになつた、北海の林檎、南海のバナナ、木の實の色、形、味ひなど詩にうたへば趣味が深いやうに思ふ、葡萄は藤村の詩にもある、林檎のうたは曾て自分が西詩の意を取りて歌ふたことがある、けれども全躰に木の實の歌は少い。

▲茲には木の實の事でなく、木の葉のことを一寸言ひたい、花と實の外に木の葉もおもしろい、植物學の事は知らないが只見たばかりでも面白い木の葉は多い。

▲芭蕉の葉は支那の繪に多いので、漢詩を聯想させるけれど、あの大きな葉が秋になつて西風が吹くと、細く裂けるのは雄々しく傷ましい、赤く枯れて落ちないのは嫌だけれど、自然に裂けたのは好い。

▲紅葉は嬰兒の掌に喩えられるだけありて、可憐な形をして居るが、一葉一葉よりも紅葉の一枝と云へば風情がある、一枝よりも一本、一本よりも一つの林が眞紅、黄、樺などに染まつた秋の美觀は云ふ迄もない、紅葉ばかりは二月の花よりも紅なりとの本文通り、花でなく、實でなく、葉が詩歌の料として歴史を持つてゐる、だから紅葉の染まるのに眼に美くしいけれど、詩に古い、詩には所謂紅葉以外、凡ての落葉樹が秋に染まる時こそ新しい意味が言へさうだ、今までは紅葉に限つてあつたが、紅葉以外、凡て秋に染る葉、林、森、皆其美を讃嘆して好い、櫻落葉の黄なるも、銀杏葉の金色も、皆美くしい、獨り紅葉だけに限らない。

▲針葉樹にも濶葉樹にも趣がある、松の葉は落てから面白い、松の落葉、枯松葉など古くから言はれてゐる、松は日本に多いから詩歌の材としても古くから認められたのであらう、松に似て檜葉杉葉などの常磐木の葉にも強い力の籠つた處が見える、脆い葉を愛すると共に強い葉も愛すべしてある。

▲強い葉と云つても椿の葉などは餘り意味が無い。

▲蓮の葉は佛畫に特有のものとなつたけれど、彼の池や淵の水の面に浮いて、水を離れることを惜むかのやうに見えるのは面白い、水草では慈姑の葉や、澤潟の葉も似て、愛すべき葉だ、筍の根のやうな形をしてゐ

る、蓮の葉に似て芋の葉は滑稽を感ずる、金蓮花の葉も形はそれに似て若々しい。

▲花と葉とは色彩の配合上、美を示すものだが、紅芙蓉と、秋海棠の緑の葉は殊に艶麗に見える、紅の花瓣がパッと眼の醒めたやうに緑の葉の間から現れて居るのと、紅の花と蕊が媚るやうに緑の葉の上にしなえて居るのは、秋花の中でも双絶の美人と云つてよからう。

▲菫の葉はハートの形をしてゐるので、いよ／＼戀愛の象徴になつた、花も好いが、葉も愛すべき形に出來て居る。菫の美は花だけで獨立は出來難い。

▲銀杏の葉も形は好い、金色の扇に喩えた新派の歌人もある、秋幾百年、葉こと〴〵く金色に化し、一夜のうちに地に落る姿は誠に目覺しき壯觀である、銀杏は大陸でも最も古い植物だと云ふが、それが日本にあつて、何千年の壽を保つた古木もあれば、僅に若苗となつた許りのもある、落葉の代表者とも云ふべき公孫樹の葉は、まだ／＼新詩歌に入れたいものだ。

▲栗の葉に愛すべき處はないが、樫の葉、殊にあかゞしの葉は男らしい葉だ。

▲桂の葉と云ふもの、從來の日本歌人の間には殆んど歌はれなかつた、又日本には殆んど無かつた、一度西洋から月桂樹の冠が藝術上に尊むべき事を傳へて、其樹も紀念に植ゑられるやうになり、其葉も繪などには多く描かれる、これも追々詩歌になりさうだ。

▲德川家の紋所として、葵の葉は江戸人士に神聖視されたものだけれど、寧ろ葵の葉は加茂の祭の事を想ふと、平安朝の都のさまが眼に映る、葵の葉を御簾にかけて、女官達が祭の練物を見るなどは、何と云ふ優美な風俗であらう、祭すぎての葵の葉とは淸女が筆のすさびにも見えた。

▲萩は花よりも、葉の方が淸げに見える。

▲蔦の葉が幾十丈とも知れぬ高い樹にからまつてゐるのは美くしい、紅くなつても美くしい。

▲葉とも莖とも分らぬしやぼてんは其奇拔を愛づるべきであらう。

▲菊の葉は其花と共に、愛すべきやうで、愛すべくもないやうで、餘り心に止らぬ。

▲桐の葉の大きな葉がバサリと落つるのは、流石に昔の歌人の眼にも異様に映つたらしい、秋の一葉と云へば先づ桐の葉であつた、如何にも彼の大きな葉が何の響もなく地に落つるのはおもしろい。

本誌各欄の發展（投書家の注意）

我が『女子文壇』も來る明治四十一年より第四卷となり、益す體裁を完備し内容を淸新ならしめやうと、編輯一同思考を凝らして、先づ各欄の項目を左の通り改正しました、平素より本誌を愛讀し競ふて投稿を惜まざる諸孃は、更に改正の各欄に投稿を願ひます、諸孃が金玉の文字と、選者が懇切なる選評と、記者が時勢に後れざる編輯と相俟つて、ますく『女子文壇』の名聲を隆々たらしむることゝ信じます、幸に左の豫告を御覽下さい。

▲美　文　（編輯局選評）
これは從來の敍事文、抒情文を合せ、更にひろき意味に於て一般の文章を云ふ

▲お伽噺　（巖谷小波先生選評）
此度より初めてお伽噺を募ります、摸倣を避けて面白いお話を考へて下さい

▲短篇小說　（小栗風葉先生選評）
これは從來の如く、才情花の如き諸孃の新作を迎へます

▲日記文　（中村文學士選評）
文體は問はず、諸孃が平生書き給ふ日記其儘で澤山です

▲新論文　（編輯局選評）
論文と云ふとむづかしく聞えますが、美文以外、諸孃の理想や感懷を平易通俗な文字で現はして御覽なさい

▲實用文　（谷江風先生選評）
手紙や葉書に認めて日常の用事を足す文章です、飾り氣のない實際的の文字を歡迎します

▲新體詩　（横瀨夜雨先生選評）
如何にして此希望ある文壇に上進出來るでしやうか、筑波根詩人は好んで諸孃を詩神の前に導くでしやう

▲和　歌　（佐々木信綱先生選評）
紙上最も多くの諸孃に滿足を與へつゝある歌壇は、猶多くの頁を是に割かうと思ひます

▲新派和歌　（與謝野晶子先生選評）
新興の藝術たる新派の和歌を募ることも必ず諸孃の希望だらうと想ひます

▲俳　句　（内藤鳴雪先生選評）
俳壇の老將鳴雪氏は本誌の俳句を選評さるゝことになりました、振つて投句して下さい

▲新歌謠　（編輯局選評）
誰が聞いても分る歌とも云ふべき新歌謠に猶新しい聲を聞きましやう

▲短　文　（編輯局選評）
作るに易く、讀むに易く、而して最も趣味ある短文は愈よ多きを加へるでしやう

▲滑稽談　（編輯局選評）
一口噺の外に實際の滑稽談も入れたいとおもひます

▲文壇餘興　（編輯局考案）
文藝遊戲と同じ性質のもので、毎號珍奇斬新の方法を以て課題を出します

▲繪　畫　（山中古洞先生選評）
これも從來の通り大いに彩筆を振はれんことを願ひます

（備考）以上各欄に對する懸賞の區別と贈品は從來の通りです。











山中古洞先生選

懸賞當選圖畫（其十四）

(1) みのり（二等）
三重縣桑名町三の丸　加藤つたへ

(2) かみゆひ（三等）
豐橋市松葉町西仲　藤城のぶへ

(3) お買物（四等）
京都市西陣紋屋町　濱部郭公女

(4) 弟（五等）
伊勢國一身田　平松なを子

(5) 朝の雲（五等）
大阪市東區松屋町筋石町西南角竹田堂內　今西こゆき

叙事文

文學士沼波瓊音先生選評

二等

○月の夜舟

上總國市原郡鶴舞町 ひさ子

『左様なら』柳の垂枝から覗いて窓の伯母さんを見返つた。『お母さんによろしく』と御返しのあつた時は、妾も美いちやんも舟の人『ぢや健さんお氣をつけてね』と重ねてのお言葉『は、大丈夫です』と棹をとり上げた。お船頭さんは兄様。

月は中空に鏡のやう、夜の水は寂として響きもない。とんと突いた途端に舟はその儘するすると、何だか言ひ知らず胸がをどる様だ。暫くは見返つて居たが段々と優しい伯母様のお顔が見えなくなる、窓障子がうすれて來る、柳の木までが消えて了つた。『左様なら』と可なり高い聲で美いちやんが呼ぶと應へはなくて灯影がちらと搖いだ。まだ見送つて、下さるんだと見える。徐かな風が冷やりと頬をかすめた。

亂杭を過ぎると兩側は蘆生て、黒ずんだ葉影が墨繪のやうに水におちてる、流れるともない水の面には星の影が二三點、何とも言へず清々しい心持がする、振返ると既う灯影は見えない。妾は美いちやんが默つて居るので『寒くはなくつて』と聞いて見ると『否ゑ』と可愛いお下髮を搖つた。『もう譯はないよ』と兄様も力をつけた。なる程もう光明寺の森が見える、蘆の葉ごしに屹然たる鐘樓が、その半面が月に照られて朱塗の色さへ心のせいかして見えるやうだ、あの向ふをひと回りすればお家の前なんだもの『淋しくはないわね』と覗くやうにして言ふ。でも何だか淋しさうだ『美いちやん中洲が見えるよ、野菊を摘んで行かうか』と兄様が言たけれど默つてる、早く歸りたいのだろう。『止しませうねえ美いちやん、お家の前でつみませうねえ』といへば『一日お母さんを見なかつたらそんなに戀ひしいの』と兄様も笑ひながら言ふ。

中洲は直ぐ左に見えてきた、野菊の花は眞白に咲いて雪でも積つたやう、暫く見惚れて居ると何に驚いたか白鷺が二羽けたゝましう鳴立つて、野菊を向ふへすういと飛んだ。棹の

音は低う響いて、月はます〳〵冴えゆくばかり。

それから十分ばかりして舟を渡しにすてた。兄様が先きに立て妾は美いちやんの手をひいて、途々野菊の花をつみながらお家へ着くと、白が尾を振て飛んでくるお玄關の障子が開いて『御歸りかえ』と優しいお聲、『お母樣』と美いちやんは眞先に駈寄つた。

（評）情も美しく景も美し、美しき夢のやうなり。

四等　秋の夕

紀伊海草郡紀伊村　春園賤女

堤に植ゑつけし柳の影たけて、流れ行く水白く、蘆花風に亂れて、葭の葉のそよぐ聲そぞろ冷やかに、何にさ驚きけん、ばた〳〵と鴫たつ秋の夕ぐれ、さすがにさびしかりけり。

稻刈り終へし水田茫々として目を遮ぎるものなく、案山子の笠は風にや吹き飛ばされけむ、首なき其身躰は倒れんばかりに傾きて、手に携へし弓の力なくうなだれしに、夕鴉一羽低うとびて聲なく、榛の木一本立てるあたり、ほのめきし夕月の影淡く、折りしも入相告ぐる鐘の音、何處よりか遠く響き來りて、またいづくへか微かに消えゆきぬ。

辿り來りし畦道は、いつしかをぐらき木立のなかに入りぬ。梢を傳ふ露の音、さては疎らなる小枝に囁く風の聲淋しく身に泌むに、われはやゝ歩を早めつ。叢わけ行く己が袖に散りかゝる夜露のさてもつめたかりき。暮靄淡く罩めたるあなたより馬子唄の節聞ゆなるを、彼れは其日の勞働を終へて今や樂しき我家へかへり、喜びの卓に向ひて一家團欒の快を得んとすなる。幼き子を懐に抱きし其妻は夕餉の膳をば既にとゝのへ終り、門邊に夫を迎ふべく立ち出て、愛らしき男の子は、遙かなる父の小唄、ほのかなる其影を望み、小躍りしつ、嬉しき叫びを立てゝ走りゆきけんなど、種々の想像を胸に畫きし折柄、み空に長き尾を曳きて星一つ、黑き森のあなたにとびぬ。

月は既にかげ見えず、あたりは薄暗くなりて、山陰には今しも鳴きいでし梟の聲、靜かなる空氣にひゞきてもの凄く、畑つゞきの丘の上、藁屋二三軒、垣を洩るる燈火の影ほのかなり。

（評）叙景妙なり、但し「嬉しき叫びを立てゝ」など云ふ言づかひは止め給へ。

五等　○お里開き

赤坂　森英子

十疊八疊などの間をいくつか打通した廣間、連なる障子にうつる人影はいがくり頭が多く齒も二つ三つ其間

に見える、お酒が出て御馳走が並んでもう今は眞面目の方は一人もなく皆くつろいで飲めよつげよの大騷ぎお話しもたけなはで皆さんのお顏は紅くなつてきた、今に彈けよ歌へよの騷ぎに變るだらう、さうなると大へんとお銚子を母上と梅に賴んでそつと庭に出たのである、秋も最中である今宵月も圓くさやかに光り滿ちて池の水も靜かでまわりに咲く萩の花が一つ二つと散つて居るのもはつきりと見える、秋の冷やかな夜風は妾の熱した面をいくどか吹いて紅の色を持つて行く、障子に人の立つ影がうつる品のよい高髷であるあら姉樣だ何といふよいお姿であらう、あの裾摸樣の黒の重ねを召した美しい姉樣を今日はあく迄も見たいと樂しみにして居たの故行き度は山々だがあのお口輕の吉田樣が今にも一曲願ひませうと云はれさうだからうつかり行く事は出來ぬ、姉樣の影はひくゝなつたとたんに端の障子が開いた、女の方が椽に出るさだかには解らぬが母上らしい、きつと妾を探して居られるのだと急に頭を低くして萩の間を忙しく暗い畑の方へと逃る露が掛つたやうな氣がするのでそつと燈籠の光りを借ると大へん、新調の小袖の腰摸樣の七草にいらぬ露が澤山かゝつて草履の美しい緒もぬれて居るので引返さうとする時裏口の方へ行く人影がある、ぎよつとして見ると從兄の操さんなので急ぎ追つて行くと「氣分が惡いから歸るよ姉さんに宜敷」と云つたまゝ急ぎ足で突當りの低い垣根に上ると見る間に向へばたりと飛んだ音がする後を犬が群がつて吠える、如何したのだらう今兄さんがやう／＼伴れて來た計りだのに、先達から操さんの樣子が變だと呆れて居るとお座敷から面白い唄の聲が聞える合間にどつと起る笑聲女の聲が殘つて居るうちに又もどつと湧


奈良南圓堂

星野とみ子

て面白さう、行て見度と築山の影から覗くと人の頭が右往左往に動いて手洗鉢のわきの大八つ手がお出〳〵をして居る。

（評）お里開きの酒宴の賑合の間に一篠失望の操さんを點じたる意深し。

（秀逸）

○姉樣のお嫁入り

宮城縣　千葉きわ

目出度ナア〳〵の若松樣で長持はもう搖り出し始めた外では村の人達がわめく聲が一しきりア、姉樣に今夜限り良樣の所に嫁くのである明日からは兄樣と弟と三人切りに成るのだと思ふと悲しく成つてそつと姉樣を見ると只さへ美いのに今日を晴の其姿妹の私でさい遂うつとりするくらい結納にと送られた紫地に松竹梅を江戸褄にした振袖摸樣下着は白紋羽二重の二枚重を裾長に着黑地に舞鶴を織り出した帶を矢の字に結んだ恰好よさ之等は新に西京でこしらへた物だとか髮は品よい高髷に結はれさした花簪が一入寫りがよい美しいお顏は揚手ぬぐひて蔽はれて三日月形の優しい眉が少しあらはれて居る耻しいのか厚化粧したお顏の頰の邊りほんのりと衿足長い首を少しかしげ氣味の美しさやさしさ姉樣はお仲人や兄樣に取捲れて愈々門を出た

私もこつそり送らうと家は隣の伯母樣に賴んで後から行く村の衆もぞろ〳〵付いて來る弟などは萬歲ッて眞先に馳けて行くやがて良樣の家へ付くと餅をつく音や話聲やらで大混雜其所から姉樣は手をひかれて這入つて行つた垣から覗いてると急に家中が森となつて謠の聲嚴かに響渡つた今が式の最中だらう其れが終るとバチバチ末廣の音やら笑聲お膳がはこばれたらしい姉樣は今頃どんな心持だらう（さんさ時雨か萱野の雨か音もせで來てぬれ掛る生がいナー）と大な聲後から目出度いが連け樣夜は餘程更たのか後の山で梟が鳴いた。

（評）土地の風俗も見えて面白し。

○馬の臨終

東京　なてしこ

いづこの君のすさびにやピヤノの音は、降る小雨に傳へられて、最とかすかに、……曲は確に露營の夢？……おゝそれよ、父君の愛馬の死せる日も斯る小雨そぼふる日なりしよ、數ふれば早や幾歲？時は恰も日淸戰爭にて未だ山口に住める頃なりき。

日は覺えねど或る日曜の朝「今日は雨天なれば近き湯田の里迄ひと責して來ばや」とて父君は乘馬にて出で立たせ給ひつ。やがて歸りませしは十時過ぎならんか。軍馬の慣は直ぐに鞍をば取らずさるにても父君軍服を脫ぎも終へ給はぬに、けたゝましきいなゝきと崩折るゝが如き物音は、馬屋の方に起りつあなやと云ふ

閒も有らせず旦那樣々々々!!!と聲もしどろなる馬丁の叫!あゝ又しても馬が荒れ出せしかと幼心にいと怖しかりしがそれも暫し直ちに病氣の由を聞けり。俚諺に「怖い者見たし」と云ふ事あり我も人々の間よりそとすかし見るに、あなあはれ黒く艶ある彼の鉢驪は今や横樣に、圓らなる目も今は細うして吐く息いと荒し。馳け付け給へる獸醫の君は腦充血との仰せにて、腹部には如何に鍼し給ふもあはれ一滴の出血だになく、唯頭部に充血せるを見るのみ、三聲かすかにいと悲しげにいなゝけるよと見る間に息は絶え果てぬ。時正に十一時を過ぐる十五分。「あゝ此の落命今少し早かりせば一大事の起るべかりしを……心有りてかよくも無事に主人を送り歸りしよ」との母君の仰せに人々は袖をしぼり、果ては猛き馬丁迄も涙含める樣子なるに我も共に悲しかりき。

あゝ今はいづこに其靈や漂へる。

……ピアノの曲はいつしか代りて在校時、否卒業せる今も尚我クラスの十八番なる、コチロンのマーチ!!!忽ち今迄の思ひ出はどこへやら、なつかしさに机たゝきて口拍子合せるも最とおかし。

(評)情深い哉。

○偶感

名古屋　志良世倭文子

「容貌のお正さ氣質のお瀧さ、どちら望みやる猪太郎さん」

窓の下ふと起つた唄。それが何となく由緒ありげて、普通一般の俗謠とも思へぬので、折からは入つていらつしやつたお祖母樣にお尋ねするとお祖母樣は「オ、よくお尋ねなさつた」若い者には聞かせて置きたい昔話てある」と、次の樣に話して下さいました。

何ても此唄はお祖母樣の子供の時分にあつた事て。つい隣村の一二を爭ふ財產家に、二人の娘がありました。姉は村一番の美人て、此娘が通るといへば鋤持つ手を止めて眺めた位てありましたが、妹は反對の不器量て、誰一人見かへる者も沒い位てありましたが、誠に氣質のよい優しい娘でありました。處が庄屋の一人息子がお嫁を娶る事になりました、それは美しい姉娘ではない、不容貌な妹娘であつたとの事て、唄の中の猪太郎とは、庄屋の子息の名てあると、語り終つてお祖母樣は「その頃は私も未だ子供てあつたがね」と、今を昔と懷しさう云はれました。

もとよりありふれた物語てはありますが、それが自分の隣村て、しかも目擊したてふお祖母樣のお口から親しく承るのてすから、妙に心の奥へしみ入るやうにおぼえて、時々受けの言葉を洩らすのみてありましたが其夕べ浴みを終へて鏡に向つた私は、今迄の樣に不器量を悲しまぬ計りか、却つて其醜い顏の何處やらに、

希望の色が立迷ふかの様、うれしく楽しく感ずるのでありました。あゝ私はお祖母様のお話に、慰藉を得たのでありませう。

（評）　容貌よりは氣質が大事。

○悲しき一夜

上総　關　芳枝

これを楽しみにかく文と見給ふな。妾は去る水無月十一日最愛の妹に溺死せられしなり、さりながら文作る道にくらき身の悲しさや、慘憺たる光景を眼にし居りながらその十分の一をも寫すを得ず、乞ふ哀れなる子の胸を察したまはれや＝＝生前學と云ひ佛名をば蓮香童女と付けられたり。今年漸く四歳、みめいとよかりき。

凡そ世の中にいきとしいける人々の身の上には、いと悲しき事のかず〳〵があるてあらう。あゝさうてある、妾にも甚だしき悲みが降りかゝつたのだ、それは、天にも地にも一人きりてあつた妹の死んだことてある。

げに悲慘なわけてはありませんか、花の如な罪のない玆年四歳の子が、靑々と水の湛へて居る池に、落ちて死んだと云ふのてすもの……。

口や鼻よりは一杯に白泡を、吹き出して居りました。けれども妾等には愛らしい妹が、死んだものとは思へなく、只だ今にもやさしい眼して紅さうびの様な口で姉さんと呼ぶてあらうと思ふて居りました。しかし小さい魂はぬけ出てゝしまつたのてあらう、遂に息吹き反へさなかつたのてある。

かくしてその夜、母さんと妾は小さき形骸を、朝まで見守つたのてあります。

まあ〳〵如何んなに苦るしんだてしよう、壺の中は水を吐かせ、醫師が人工呼吸を行つたりなどしたゝめかペコペコに腹が成つて居りましたが、夜の十一時頃になつたら、ふくれ初めて張り切れるようになり、お尻の方から眞紅の血が出て、口や鼻からは水がふき出しさまで反らなかつた脣や顔が、淡黑く反じて生前の姿は消え、只だ〳〵恐ろしいやうになつて仕舞つたのです。おゝ思ふと手がわなゝいて文字が書けぬ。さぞや苦しかつたてあらう。落ちたその時、母よ姉よと呼んだてあらう、叫けんだてあらうに……あゝ。

二人は終夜泣きつゞけたのです。

明方になりランプの光が淡くなりました時、母は尙ほ更、如何して棺に入れてやられようか、此の愛らしい子を、たつた一人の妹を——、せめてはもう一日なりと膝下に置きたいと泣き出したのです妾は……。

如何に悲しいとてこんな悲しい事はないのてあらう。未だかゝる運命に遭はない人は、さは感ぜぬだらうが實に此の夜の悲みは、筆紙の及ぶ所てないのです。

（評）　筆の調はぬ所あれど其の情はよく讀者をして感ぜしむあゝ技工は第二なる哉。

○殘月

麹町　滓の花

いづこよりともなき鐘の音に、曉方の夢さめて、唯何とはなき思ひに淺茅が原をたどりつ。あしたの霧を拂ふ秋風の、袖につめたく、こぼるゝ露を、涙にかりてか、そこはかと、鳴く蟲の聲も、いと細りて、うら悲しきになほもわけ入れば、朝ゆく鹿や過ぎぬらん。ひとむら萩の露もみだれて、しだ折れまさる苅萱の、しどろに見ゆるも、心ありげなり。風のまに/\もつれくる萩の一枝を手折れば、うすき光の花にやどるに、明けの明星がしばし、姿をうつすかと見れば、細き流れに添へる森かげにかすかに月の殘るなりけり。

あはれ、麗しきも、清きも、同じ月ながら、雲なきみ空に、澄める夜半の月は、歌思ふよすがともなり、小琴かきならす友ともなるものを。有明の靜けき月にむかひて、誰か物を思ふ。めづらん人もなくて、さびしく消えゆくあはれさ。やう/\に、うするゝ影も、いつしか、はかなく、雲にかくれぬ。と、見れば、東の空もしらみて、小萩が原の曉寒う。

（評）靜寂の極。

橋の上　南多摩　中島謙子



○兄上

兵庫　酒井壽美

あはれなつかしの兄君は今宵の月を兵營内にていかにながめ給ふらむ快活なるおんさがなれどくまなき月に向ひ給ひてはそゞろ過去の事共しのび出てゝやおわすらむ兄君我家に居ませし時は實に樂しかりき笑を含みて語りたまふを聞けばいかなる憂苦も打忘れて共に談笑し愉快に時を過ですが常なりきされど又恐ろしかりしは事々物々氣づかぬやうに談笑しつゝよく何事にも注意し給へる事なり妾に一度過失あらむか兄君はいにし何日何時頃斯かる事をなせり又斯かる事をもなせしが彼れはよろしからぬ事なりなど妾は心づかてすぎしかず/\の事をならべたまへり是れを聞く間はいと恐ろしき兄君なれど語り終れば例の兄上口元に笑を浮べつゝいや時に妹君御意に叶はぬ事を云つてお氣の毒だつたハゝゝマア氣をつけ給へとそれよりくさぐさのおもしろき事語りいてゝ我心をなぐさめ給はりきあゝ兄君に別れてよりかぞふればはや一年はすぎにけりその

間のいかに淋しかりしかまだのこる二年の長の月日いかにしてすごさまし思にうなだれし頭を上げて空をのぞめば五日の月ははや西の山の端にかゝれり草葉になく虫は妾をなほ種々の思に耽らしめんとするもの〻如しおぞましや我いかに戀ふともなつかしむともせんなきをよしなき事を思ひ惜しき時間をついやしけるよ兄上家を出で給ふ時妾に何といひ給しかいざや學ばむ文よまむと机によればかたへにかけし兄上のしやしんランプの光にてらされてゑみたゞよわせたまふやうに見へぬ

（評）兄さんの性質よく現はれたり。

○朝顔の花　　本郷　秋

父上は此頃お暇な身となられたので鉢や垣根やと朝顔を植ゑられて、只さへ狹くて洗濯物を乾かすに、母の小言が出るのを尚更狹くされて、一寸でも他を向いてたなら袖などさはりますから、こちらでも餘計な心配が入るし父上もその通り。然し毎日襦袢一枚で古帽子に日を除けて、世話をなさつた其丹精の効あつて、今朝初めて白の丸咲と紫のやさしいのや、紅、絞りなどが咲きましたが、去年より少し艶がないといふので、夕方油粕の腐らしたのをいつもより多くをやる事になりました。處でこれはまた變な香がするので、今しも行水あがりに浴衣の筒袖もかひがひしく、外に出てゆきましたのが、團扇か何か取りに來た妹の鼻を、いきなり其香が襲ふたと見え、椽側に立つたまゝ「あゝ臭いこと、まあ嫌なお父樣」と、わざと鼻つまらして逃げる樣にして出て行きました。全く嫌なお父樣かも知れませぬ。内のことは我慢もしますがいつも恰度夕飯時分にこんないやな香をさせて、御近處では嘸御迷惑だらうと思つてゐますが、でもかうした後は艶もよくなりませうから、明日の朝は一番早く起きて開くのを見やうと、今から樂しんで待つて居るのですが、さてなかなか待遠いこと。

（評）お父さんのお骨折りさぞ美しい花が咲きましたでせう。

○秋の夜　　茨城縣　仲田百合子

窓の障子に鳴くみの虫の、今宵はわけて物憂う聞えて、そゞろ都にましませるふみ子の君のしのばれて、懷しさに堪へず、窓の戸押し彼方の空を眺むれば、折りしも十五夜の月は、西に傾かんとして柳の梢にかかり颯と吹きくる風に葉末の露ほろほろとこぼれぬ。

○田舍みち　　小石川　小笹涙紅

坊や良い子よ寢んねんよ……さても眞晝の暑きさかりなるを歌聲床しき子守兒は十三か四の色褪せたる單衣を着繪日傘斜にして小田の徑路を行くのであつた、脊の子はあかね色の花染かたびらにつゝまれて安らかに眠つてゐる、蜻蛉一つ繪日傘の上にとまつた。彼方より走り來る里の子色あくまで黑く此の暑きに帽子もなく、もち竿持つて蜻蛉追つゝ「芳ちやん蜻蛉取つてあげるからおまちよ」「えゝ取つて頂戴な」子守兒はうれしそうに答へた、「芳ちやん鎭守樣へ行かうよ深

山ゐるよそしてあすこは寂しいよ」「え行かう」二人は四つかどの草深い所に立ち給ふ地藏尊の所をまがり鎭守の森についた、「芳ちやんお前此石の所にまつてお出で己あ取つてきてやるから」「え」男の子は得々として取りにいつた、やがて鬼の首取つた様な勢でかへつてきた「芳ちやん十取つたよそれからればほら野菊の花だよ」とやさしく〻野菊の花一束取つてきた「ありがたうよそんなにいらないわ」「澤山もつてお出てよ」男の子はせつせと花のいゝのを撰んで居る、颯と吹き來る涼風は森の木の葉をがさがさ鳴して今まで昼つかつたのがだんだん涼しくなつて來た、芳ちやんは最早沈まんとしてゐる夕陽に向つて立つた「おゝ美しいこと」東れた其髮は金色に光つて、千町田の稻も鎭守の森も野川の水もひとしく夕陽の光を浴びて皆燃えたる様だ「もう歸りませうれ」「あゝ」と二人は手に手を取つて『うれしや今日は空はれて』謡ひながら歸るのである、賤が家々から夕げの烟がすうと立上つてゐる、

○愛情と　上總　さ

もとより田舍少女の容姿美しとにはあられど木綿ながらも母が心づくしの晴衣新しく顔には白き粉など塗り飾りたてたるが齢は十三ばかりいかなる嬉しさの胸に溢れるにや喜色面にあらはれてちよこ〳〵走りに道を急ぎ行く後より六十路の坂を越えたりとは頭の霜にもそれと知らるゝ老爺一人幾たびか水に入りけむ糊こはき袷の尻端折り草履も穿かで徒跣のまゝ賤々しき身に泥ながらの葱一荷擔ひてこれも嬉しげなるさまにて從ひ行くなり二人は町の入口に御休處と障子にしるされたる茶店の前迄來かゝりし時家の内より親しげなる聲にて、

「お花ちやん奇麗に飾りたてゝ何處へ行きなさるやあ祖父様も御一諸にかまあちよつと寄つて行かんせ」と呼びかくるに老父は擔ぎし荷を地におろして腰にはさみし手拭にて額の汗をぬぐひつゝ、

「今日はこの町の稻荷様の祭といふのでお花にも是非遊びに來るやう學校のお友達からわざ〳〵の御案内それてわしが送つて行くところぢや」茶店の媼は澁茶を汲みながら、

「それはまあお花ちやん嬉しからうゆつくりと遊んでごんせまうして其葱は何處へ持つて行かしやる」

老爺は獨りうち笑みて「これかはゝゝこれはの片荷はお花がお友達の家へお土産のしるしに片荷はまたわしが懇意な八百屋へ持つて行つてお花が小使錢をこさへてやらうと思うて」

媼もともにうち笑みつゝ、

「やつぱり孫は可愛いものと見えるのう」

○そゞろごと　鎌倉　しづ子

一、朝のあはれ

汽笛細長う響き野に響きて今し汽車は鮎見川の鐵橋を渡れり、漸く東の空、紫紅となり、淡紅となり、やがて太陽は天神山の頂に上るらし。さるに蟲と云ふ蟲はなき弱りたるが、こほろぎの朝日まちわびて、花かげにしのび音残すは心の底迄沁み透るなり。

二、寺

朝霧つたひて木魚の聲かすかに響く、森のあなたは寺なるべし、苔滑かなる一筋の道、南無阿彌陀佛としるせる石ぶみの立てる是れも浮世ぞ。茶を乞はむとして庵をたゝけば、落花庭にみちて、僧いまだこたへず。

三、おぼろ夜

月影朧なり、琴の音ほのかに聞こゆるは誰が家ならん。薄墨して書きたる花の影は欄干に落ちたり、あはれ面白き世の様かな、三五にも足らざる少女が眼を忍びて屋をかぞへしもかゝる折にやありけん。

○秋の月　德島縣　若槻淑子

晝かと見紛ふ計りの煌々しい十五夜の月にあくがれて、庭下駄輕く苔をふみつゝ枝折戸をしあけて、行くともなしに門前へてゝゆけば、空は一點の曇りもなく、茫々たる下界を照らして家外の月は又格別てある、蠡にないてゐる虫の聲は、何事か頻りに月に訴へてゐるやうて、其哀音の切なるに心ない身にも腸を斷つ思ひがする、どこからともなく微かに響いてくる砧の音も、何となく身に沁む様てある、それに反して隣りの農家からはギイ〳〵と軋する音にまじつて、樂しさうに笑ひさゞめく聲、鄙歌うたふ乙女の聲などが燈火と共に小窓から洩れてくる、黃金色の稻が重さうに穗先きを垂れてゐるのは、丁度神々しい月を拜むでゐる様て

ある、瓦屋根は白銀の板をのべた樣にキラ〳〵と美しい光りを放つてゐる、稻や草の上に宿つてゐる白露も月の光りを受けて寶玉をちりばめた樣に輝いてゐる、まあ今宵の月の麗はしさと、うつとりとして空を眺めてゐる處へ、一群の雁が羽音高く列をも亂さず飛んできて、忽ちどこかへ過ぎ去つた、月は愈冴々渡つてゐる。月下の雁一幅の好畫題である、何かの原稿を綴るにはいゝ材料である、あゝかくも好き材料を得ながら才なき身には何事も思ふに任せぬ嗚呼はかなきものではある、と獨り言してゐると「霜滿軍營秋氣淸數行過雁月三更越山倂得能州景遮莫家鄕憶遠征」と朗かに詩を吟ずる靑年の聲が靜かな空に響いた、いづこの君が此麗はしい月を友としてどこを彷徨うていらつしやるのであらうと、四方を見廻してゐると、やがて二十間程隔りたる向ふの街道に、ゑがけるやうに黑い人影が顯はれて、又もや、りう〳〵と妙なる笛の音が響いてきた、折柄暗い田の面に黃金の波を漂はしつゝ吹いてくる靜かな風に、我が庭の老松は彼の妙なる笛の音に調べあはすかのやう、自然の樂を彈じ初めた。

○雨の町　　水戸貞子

何といふ淋しい雨の夕であらう、丁度五月雨のやう小歇み無く降しきつて、時々思ひ出したやうに激しく降て來る、書見にもうんだ徒然さに窓に倚て往來を見ると、雨の夕はさすがに淋しう、黃昏の色は町をこめて、賑かな家並は雜に包まれたやう、朧然と雨の中に浮て見える。何處の人か、赤蛇目の美しい後姿が、つと橫町にそれてから行く人も無い、ふと可愛い下駄の音がして小さな傘の急ぐやうに行のは、大方、柳屋の玉ちやんだらう、玉ちやん！と呼て見ると嫣然と二階を仰いて、首かたげて行すぎる、まあ可愛い子と貝の口にしめた緋の帶の映える後姿を見送る中何時か、雨の中に消てしまつた。

黃昏の色は愈々せまつて、最早夜の領にも入たらう、軒毎の灯のきらめきがぬかりみの道に映つて、きら〳〵と光をといて流したやう、ま、奇麗なとぢつと見て居ると急に大粒のが、ざつと降て來て影がゆら〳〵ゆれた、とたん、にはかに下駄の音、話聲がや〳〵と入亂れて、洋傘や雨傘が五つ六つかたまつて來る、いやだから、つと中に入つて居ると、大方學生連だらう、「オイ君、今夜は例の本屋に長々と御輿を据られては困るぜ、雨が降るんだからね」と一際高い聲が響く、暫くして、又首を出すと、早、彼方の方に傘がみだれて幽かになつた下駄の音が、靜かな夜の町にひゞく、闇の色は愈々濃くなつて、今なつたのは八時か、暫しは行く人も絕へて、雨はまだ晴れぬ。

何と淋しい晩だらうと不思つぶやいて、又一わたり町を見渡した時、向ふの綿屋でピン〳〵綿打つ音が聞え出した。

○芝居見物　　上野　小暮雲雀子

村の鎭守樣に芝居があると言ふので、妹に强いらるゝまゝ家を出たのは丁度午後七時が五分過て居た。

杉の木がこんもりとして居つて、晝間でも薄暗い鎭守の森が今夜は、人で山をなして居て長い大門通の兩側には、アンパン屋が出て居れば、菓子屋も、飴屋も、餠屋も、種々雜多の店がズウーと列をなして居る。其の燈火て、天が焦げやすまいかと思はれるやうだ、棧敷の處へくると、一幕終つたと見へて出るやら入るやら大混雜、中には面白半分に押す人惡も居る、「雪ちやん妾の手をシッカリ持つて居な、はぐれるといけないから」と言ひ乍ら、彼方此方と人波を押し分けて前の方へ行かうとすると棧敷で靜てはないかと言ふ聲が聞へたから、振り向いて見たら、叔父さんが松子さんと、此方を向いてニコ〳〵笑つて居ました。

松子さんが「靜子さん此處へ」と手招きをする、叔父さんが「靜や此處へ上りな」と言ふから「雪ちやんよ叔父さんが呼んで居るから、手をはなしてはいかないよ」「叔父さんは何處」「アレあの棧敷よ」と言ふとのび上つて見ようとしたが、小さいものですから、群集が影になつて見へない樣子。多くの見物人の間を潛り、危なさうな梯を上り、叔父さんの處へ來ますと、松子さんが「あれまあ雪ちやんも、よくれ」と言ふと叔父さんが「何に雪が來た」と振り向いて「よく來たな此處へ」と前の方へ出してくれる「どうも濟みません」と其處へ座はつた、松子さんに聞いたら二幕終つたとの事、其中にカチ〳〵ひようしぎが鳴つて幕が開いた。姿は何だか知らないが叔父さんに聞いて見たら、鎌倉三代記とか言ひました、多くの見物人が「巧い〳〵」「千兩」口の惡るい人は「無類をしよ

つて行け」とほめ呶鳴る聲と共に幕がしまる、すると下ては又出るやら入るやら大混雜。雪ちやんがそろ〳〵居眠りし始める「何だい雪ちやん笑はれますよ居眠りなんかして」と言ふと「ハイ大丈夫て」と夢中とうとう叔父さんによりかゝつて寢てしまう。姿氣の毒てなりませんから、叔父さんや松子さんの止めるもきかず、雪ちやんをつれて歸つてしまひました。

○草ずれ

松山市　越智君子

『待つておくれ、姉さんてせう。』右からも左からも桔梗や女郎花や野菊藤袴など、宛ら零した繪具のやうに徑を埋めて亂れ咲いた露の中、夕月の淡い光をたど〳〵と歩みゆくお秋は、かうよびとめられて振りかへつた。秋草の園を幾めぐり、ばた〳〵と走りよつた弟の清はなつかしげにお秋の顏を、月の明りにすかしみながら、『おゝやつぱり姉さんだ。』『清さんかい。』とばかり粹と抱きしめて熱い涙をはら〳〵と零した。

草むらには蟲の聲が降るやうに、大きい花が夜目にも白く二輪ゆらぐ。あゝあはれな笞の下になやむ弟を後にして、いかに默しがたき姿父母の仰せとは申せ出京することが出來やうか。ちらちらとあはれな花實の姿が眼に見えもして、人知れず涙を流すこともあつた。せめて自分だけても、いくらか世に立つことができたなら、又弟に盡してやることもてきやうからと、はや明朝は立つと云ふものを『あゝせめてお母さんが。』と『姉さん何故泣くの。』何も知らぬ弟、あゝどうしてこれが堪えられやう。あゝ泣かぬ心はまた更てある。お母さんにそつくりのあの眼眉唇、紫苑の花がはらはらと風に散つて夜氣水の如くおきまさる露。あれほどかたく心をきめて來ても、どうして之が明されやう。と、けたゝましく清を呼ぶ繼母のするどき聲。もうこれで別れればならぬことか。あゝ此の手がどうして離されやうぞ。あゝ何も知らずに『さよなら。』と草かげに隱れゆくあはれな後姿。身に泌むやうな草ずれの音の淋しい寂しい中に冷めたい月の光をあびて露にしつとり濡れた袖に顏を掩ふて、見送りながらいつまでも、あゝいつまでもお秋は立つてゐた。



水車小屋の朝　美濃　紫子

○弟のいたづら日記

佐賀　東原たま

姉さん開戰開戰〓又五月蠅日曜だとほんとに困つてしまふ。だまつて聞へぬ振をしてゐると、パタパタと走つて來る音がする又いたづらに來てるのだらうオヤヤんだこちらには來なかつたと見へる。どれ袷を付け樣と云ひつゝ座りなほそうとするとトタン大な蜘蛛が膝の上に落ちかかつた。アレッと叫び樣立うとすると後てクヽと弟の笑ひ聲、弟の仕業とは思はなかつた。驚とくやしさとて胸はダクダク叱らんとしてもとみに聲は出ず胸にあてた手はぶるぶる振へて足はよろよろ遂に支へきれずに座敷の中程でペッタリ倒れた！あゝ私は聲を忍んで泣いた。かくまていたづらな弟を持ちし事のくやしくて彼の蜘蛛の恐しくて〓其時の心は唯もう恐しさくやしさ一ぱいて何と書てよいやら術を知らない。少しは動悸も止んだので思ふ存分叱つてやらうと起き上つて見れば弟の影はない。

多分逃げたのだらうと茶の間の方へ行つて見ると母の聲てそんなひどい事するものがありますか〓弟を叱つてゐらつしやるのだ。弟はどうしてゐるだらうとそとのぞけばすまぬと言ふ風な顏をしてだまつて聞いてゐるので可愛想に成つて叱る勇氣は脫けた。

僕さんひどい事したのネと笑つて言へば姉さん御免ネ僕本にほんとに惡かつたもうしないからと一度のことわりも云つた事のない弟がかう云ふので一入可愛想に成つて是からおしてないよとたゞ是丈云つた。

弟は姉さんもあんまり弱虫だたつた蜘蛛一匹で色は眞青になるんだものあんなに驚きはしまひと思つて僕はしたんだものと、今迄辨解らしう獨言の様にかく云つた。實際私は虫の內で一番恐いものは蜘蛛なんです。

こんな騷動で盆の御飯をすました時は一時であつた。

○我將來を考へて　呉門みさを子

仰げば尊とし我師の恩教の庭にも早や十年も積りぬれば扱學び屋には月も日もなきものか只夢の間に立ち去りぬ。

つらつら我來し方を思ひ廻らせば物の理人の道いろはの文字さへ知らぬ身を朝に夕に手を取りて敎へ導き給はりて漸々斯くは生立ちぬ今日しも如何なる緣しにや三十幾人の友垣と共に卒業のしるし文給はるゝは實に嬉しともいと嬉し、されど又考ふれば此年月過ぎ師の君の御手にのみ誘はれて樂しき園に敎へ慈みてし者の餘に離れて世の波風にもまれん事のいと心苦しくて父上の許し給はゞ今一年專攻科へものしたし等あくがれぬれど何時迄斯くて有るべきにもあらねば御敎の數々心に秘めて故里に入り將ふ捨て袖を細め年老ひませる父母にかしづき參らせんこそ我務なればあきんじて幼き妹を喚び導き傍ら學理の應用につとめて怠らず彌々發達進歩を計りてあらゆる女の道にたづさはり心を修養して世の如何に事繁く煩はしきかを味ひ覺えぬればしかと心を定めて似つかはしき緣あらば嫁ぎてお双方の御心安じ參らすべし一度選び定めては兩夫に見えず如何にも身を盡して義理ある父母に從ひ幾多の艱難と戰ひ又傍ら然るべき職を操りて勤め勵み節儉して餘財をえ夫を扶けて專ら家の爲め世の爲めに働きわきて親戚友人とは及ばん限り樂しく面白く交らひて眞心を盡し又幸に子女等まうけなば益々身を省て育兒の任に當り世に所謂良妻賢母と仰がれし人々に傚ひ眞似びて劣らず一生を過さなん凡そ人の一生の苦多きと少きとは只己が心のよさ惡さによるのみなればいかで諸まてや有べき　わきて妾は兄姉も無く自ら模範を示すべき身にしあれば其任は一層重し如何なる事に遇ふとも志を撓げず後の日の成功を全うせんは獨我身の爲のみならずはらからへの務ともはた山より高く海よりもいや深き父恩師恩の幾分かを報ひ奉るしるしともなりぬべしあなかしこしや。

○三羽の蝶　下總　藤崎美奈子

今年十六の大きい妹のまつちやんは、四大須賀の仕立屋へ裁縫の稽古に行つてしまつたし、小さい妹のてるちやんは、遠山小學校へ行つてしまつたし、何だか淋しいので、椽の柱に寄りかゝつて、庭の面をジッと、眺めて居ると、呉人草の花へ鍋蝶が一羽お隣のなをちやんの家の方から飛んで來た。續いて一羽、又一羽。

花の露を暫らくあさつて居たが、一羽へ一羽がもつれかゝると、他の一羽もそれにジヤレて、花の上高く飛び上つた。

組んづほぐれつ、上へ横へ。欄の木の陰に成つたり、柿の木の上へ出たり、終には三羽共軒端に遮られて、妾の所から見えなく成つた。

三羽の蝶！姉妹だらうか？睦じい姉妹共！

妾の妹等二人、もう行きついたらうか、何だか今日も曇つて來た、妹等の歸る迄雨が降らなければ善いが。

○劍ケ峰　名古屋市　橋多賀子

賽の河原を杖で亂した罪の滅苦も、銀明水の冷たさに忘られて、淺間の神に布施參らせた後、十三と數へた絡子の末を岩に捨てゝ、唐鍋の馬も立つ駒ケ嶽の頂へ辿ると、白煙昨々と渦卷き昇る大噴火孔の斷壁に沿ふた、蜘蛛の糸のやうな徑の末に、雲を凌いで一萬二千四百尺の絶頂は、赤黝した大鐵塊を積んだかのやう風雨三千年、不斷の磨に鍛えた山骨屹然と無涯際の大空に峙立つて居る。

眉を壓して宛ら天に飛ばんとする巨岩ふ前に仰いだ徑は爪先上り、磊々たる熔岩の異形の姿は人に迫つて、路を埋めた角礫はするどく草鞋に喰付いて來る。鐵を含んだ山骨朱泥のやうに赭ければ、岩も赤く、礫も赤く、生命を兒せてつく杖に、突き碎たれた石塊の諾い一つは、憂々と響りながら、忽岩角に聲を上げて、一萬尺を飛び下りて行く。

六根清淨――所禱の詞を伏目に上げて、岩と岩との間を縫ふ細道の險しいに息をはづませたが、袂に流れた白雲を六尺の金剛杖に拂つて、颯然

と巓の岩を蹙んだ時、眠る日尚近く、下界は遠く、身は天地を結んだ鎖の中間に兇つたかのやう、そゞろに風に和す天の羽衣も望しうなる・て天地の氣を一息に吸ひつくしで眼を見張つた、前は千年の雪を封じて雲に閉ぢた噴火孔の、入片の峯の中に沈んで聲もなく、岩を穀つた雫の音は風闇の谷に滴る靈特の響を聞くかのやう、頭跨つた後は目も眩む絕崖の大崩壞、底は白雲の深さに埋まつて、漲り渡る入月の光に北信州の野は夢かの様。千仞の斷壁路を絕えて、崩れた岩塊は纜を生命に求めるため、猿もよじず鹿も通はず、信州は永遠に富士を仰ぎながら、山路を甲斐に求め得ないのだらうと思はれる。

巨岩の腹に野中氏の故居を尋ねて暫と佇む耳へ涼しい搖鈴の響、聲は不知視の難所を犯す白衣の人の袖に起つた、老も若きも揃の一文字笠に信州草鞋の厚きを重ねた富士行者の一群は、懸崖ヶ横に匍匐ふ如く傳つて行く。

黃昏吉田に下つて富士を顧みると、暗灰色ににじむ空を突いて白雲を液いだ劍ヶ峯の一角は、人なつかしう聳えて居る。

蕉園女史　根岸小葉子



○今宵

臺南　小川たち子

蒼七月十四日の月は暮初の宵空に鏡の如く清く輝いた恐しき鬼ならぬ鬼の住むてう生蕃地の過り開けば此處等は過る比まで庭前の河一面なる旗尾のあたりまで折々土匪が首取りに出て居たそうな輝る日の本の威光はさすがに遠つたもの今は影さへ留めず一家團欒の土に安じ得るのである今日しも土人等は宇頁盆で豚殺に何やら喧ましく騷ぎ立て家毎に油煮の嗅氣煙と共に盛に立ち登り內庭には變な赤い掛物をかけ燈火線香を山のごとく立て並べ出來上つた家では豚鍋のまる煮さては怪しき料理の樣々構所せましと出し並べ早發樂が初まつて居る笛月琴の樣な音鼓弓に似た音合奏てあらう曲面白く實に優しい調べてすぐ人をして思はず古國の憐な起さしめ果ては樂中の人まで忍ゐゝ土人形の樣な小供等は手に〱むろ持ち群をなして豚追ふもあり發樂の前に押し寄するもありなか〱に賑かな夜の光景てあるお隣りの友ちやんまで子供の中で影法師追ふて離せ廻つては母樣に叱られて居るがいつの間にか懷の中で遊んれ〱云つて居る今しも眞丸にきら〱して爽い極光て居る月を意地の惡い群雲が旗尾山から湧出て用捨もなく包み去り友ちやんの懷の中を眞暗にした爲て不思議な顏して上を見て居たが母樣御月樣も廢んれしたよと云つゝ自分も眠つた暫して土人の群も三々五々散じ去りさらぬだに人足繁からぬ片田舍世間は見る〱靜りかへつて獨り旗尾の川音我世と云ぬ斗り一層調高めた古郷迯りなら初秋の例もあるがさすが熱帶地まだ晝中は日光に目も眩む斗りけども〱天地は實に公平夜風の何處となく冷氣を帶び前の廣野では四五夜前から蟲の聲々戒め顏に泣き出た輝る月鳴く蟲は何地も變りはないあゝ友ちやんはもうよく寢入て御月樣と遊ぶ夢でも見てるだらう。

○薄

土浦ひさし

薄!! 薮にあらず、荻にあらず、蘆にあらず、行く秋の朝、白つゆを葉末に宿して夜の名殘の虫のれを宿らすもの、岡の邊のわたりを埋めて秋姫の御すそにふれてさわ〱とそよぐもの、即ち薄なり。古戰場のすゝきは寒く、山陰のすゝきは淋し、殺又蜜の秋の夕に兜虫寄らす薄原はをく知れず、されど薄はなべて床しきものなり。

新體詩
河井醉茗先生選評

二等

○魂の恐

信濃下諏訪　山田くにえ子

あゝ我魂昨日までは、
胸の巢ごもり美しう、
希望に滿ちて住ひしが、
何の祟ぞ今日見れば、
胸の家は──
香木の柱朽りてかぐはしき、
かをりは永劫に世の陰に、
消も入りつゝ、醜蟲は、
するどき牙に蝕の穴、
呪ひ針せし後ぞとも、
すきまもあらずくひ入りつ
金泥の──
天井あれて再びは、
世に美しき光輝ず、
壁に彫刻にし御裸形の、
女神が愛翼は破れおち、
又宿るべき陰もなう、
妖の汚氣まざ〳〵と、
生命を陰府に沉淪さんの、
一向にのみ迫りくる──
あゝ魂は──
近き沉淪を前に見て、
わなゝきやまず、苦しさに、
眞神のまくやを遠く見て、
翅んとすれど──勞れ翼の、
疑惑の帳只一重、
破る力のなえはてゝ、
死の香を嗅つ涙して、
今も籠るよ朽ちにし家に──

若き苦痛は苦痛に居ても美くしい、想像し、憧憬し、嘆嗟し、而して歎ひ出づる響の高さ、誠や詩に生れたる者は詩の光明に生きるばかりてす(醉茗)

三等

○雨あがり

福井縣遠敷郡鳥羽村無悪　野田繁子

自ら地球より宇宙の海をゆく、
かけ橋高く美ら華ざぶりの、
七彩の虹、色濃し花沼の、
萍の精ぬけや出し、圓橋や。
夕映えぬ、紅、淡紅の彩の色、
鷁首の船の形して雲の車は、
今ゆきぬ天の中道虹ふみて、
天の宮にか永劫の夜のやみ國。
かくて夜は來にけり彩消えて、
久遠の靈香、水色の衣かけます、
雨姬は歸りましけり空遠く、
雲のみ車軋らする音もかすめて。
陽炎の瓦に燃ゆる眞ひる時、
しづる、汗に罪業の汚血を煮らるゝ、
萬象ぞ清め受ぬと聖母より、
使女なりき其かたち艶にして。
今はあゝ疾風の軍に宿業の、
征矢は握られて、雲のみぞ周章しうて、
契りつれ一宵ぎりの下界の色、

なつかしみ、振りかへりがち踊るかな。

天象の活動ほど壮んなる美はなく、是を歌つた詩は皆花やかです、茲に又雨あがりの拭はれたやうな鮮やかな詩が現れました、其美くしさを虹と讃ふ（酔茗）

四等

○山にて

土佐　石川一菫女

露こそ閉ざせ幽暗の木下陰
冷えよどむ氣はひしひしと
膚に迫りて雨の脇下戰き沾ひ
奇異しにほひに胸いたみ
幾世經ぬる落葉かさみて
ほろほろと巫子が呪に
朽ちほろびたる深山地の土に
恐怖にふるう足形印して
足惱み行けば毒草のいや生へる
濕り地、胸惡ろき苔の岩角
「滅亡」のひそめる幽谷、眼にこそ
映らざれ、狂ふあやかしのくせもの。
仰げども濃黑き葉ぞ
かさみ掩ひ光り見ず
「心」は太きものにひしと壓されて
わなわなと慄き恐れ
さそふべき手力うせてひよろひよろと
たじろぎぬ後へに。
（ふと眼にうかぶ岩陰に
石楠花の花ぞ開けり、胸の底
「慰藉」と強く叫びぬ）

意味もあり、技巧もあり、これならば先づ公にしてもはづかしくない作であるが、なほ意味の方に一層深き冥想を要す、あなたの傾向は、深く深く自分の考を辿つてゆけば、必ず何ものか見出すに違ひないのです。（酔茗）



秋の夜　長崎　片手露子

五等

○雲居る夜

四谷區傳馬町二丁目　河野槇子

波たゝす風の冷たさに
燦爛と照る星の影
丹塗り床しくゑがきたる
下髪漂ふ蚊帳の裾、
夢さわがしう眸ひらけば、
さやかにうつる小枕や、
三羽の小禽愛しき。
されど馴れねば寂心地の、覺束なくも思はるれ。

入形抱きてまどかなる、
くゝり枕の紅の鈴、
乳房なぶりし母様は、
かたみにゆめの通はざる。
露を包みて降る夜に
知りぬ、ひとりの淋しさを。

幼きゆめを賑せし
さゝなりの音ぞ懐しき。
我側にゐたまへど
うす雲空の彼方より
はじめて高き枕して

底に激烈なる情火あり、包むに柔かなる詩のことばを以てするもの、其詩に生の美を歎へる如く、其人も活きて居る、人と詩との一轉機、危うき方に逸れないやうに（酔茗）

秀逸

○水葬

牛込　秦治子

船に泌む夜潮ぞ醒めて、
青き燈は不安の光、
食まんとて浪は呼吸しぬ。
恐怖はた、かなしみ溢れ、
二つなるわれらが影は、
われ殘しいつか失せけり。
太洋の水は冷たし、
白玉の胸は砕けむ、
（呼べど魂あはれ還らじ、
眞珠の宮珊瑚の廊を、

ひとり鳴る海の愁か
額たれて死せし我子を
心奪ひ迫ると我に
羽搏ける死に消ゆ、ひとつ
沈みなば岩に觸れなむ
華やげる頬は凍らむ――
むしろ我擁きて共に
迴らむか朽つるまで）。

投げ入れむ時は來れり、
月光にほの照らされて、
涙流れ今ひと度を、
冥府の扉に觸るゝ心地、
かたく閉じ還らぬみ靈、
海禽は帆綱かすめて、

船長の赤ら顔なる
甲板に夜の氣重りぬ。
石と冷えし骸抱けば
永久に小さき眼
底宮に眠れと祈れば
灯を追ひつ翔るよ凄き。

語法にわざとらしい無理なするのはいけません「船に泌む夜潮ぞ醒めて」でも分らない事もないが、少し無理でせう（酔茗）

○珍花

[illegible]島　淺田知枝子

胸の野に美くしき、
「よろこび」と「うれしさ」の、
美くしき花さきぬ――。
色もなく香もなくて、
われ知らぬ花なれど、
咲きたりし花になむ、
己れにもまさりたる、
「珍花」はあれ咲きぬ――。

花咲きぬ。言ひ得ざる、
權化とも思はるゝ、
形相のありなしも、
春といふ時をえて、
わがむねの野の面に、
「愛」の日を照りあびて、

象徵派の傾きを會得して作ったものらしいです（酔茗）

○朝雨

麴町　里子

薄折き扉開くれば、
軟風のしめり香ゆかし、

朝の鐘鳴りひゞくかな
空の方いたみのこゝろ

仰ぎ見ぬ音もなく降る。
消えぬべき秋は悲しき、
心もて泣かんはうとき、
朝雨のまひるに逢はゞ
頃と云ふむかしの人の
吾身かな

何處ともなくにほひあり（酔茗）

○鞭の痛

四谷　田中久子

大夏のまひるの市は
白臘のごと溶けんとす。
夏陽炎は燃えのぼり
甍の大路はさながらに
赫灼と照る爛陽に
連らなる家根の甍より
熱砂の潮漲ぎらふ
炎府の宮の巷かな

かゝるときあな惨しや
重荷を運び喘ぎ〳〵
大路を焼けし小砂利道
荷馬車ぞ來たるあゝ宿命。
宿世如何なる罪の果の
瘦馬やゝに悶えつゝ
惡熱の床に吐息あげ

強き日光にめくるめき、
無惨や馬子の痛鞭に
悲しげ濕む眼より
哀婉こもり腸熱す。
足なゆみ氣惱うたゆたふを
瘦馬きゝと嘶きて
熱き淚のほろ〳〵と

打据られし瘦馬は、
裸肉は破れ血は滲み

今はた力絕えぬらし、
いきづき荒らく太腹に
地の面にがばと倒れ伏し
苦悶の嵐脈うちぬ。

力はほろび脈搏の、
生慾はわなゝきぬ、
こは闘爭の血の水脈か、
口より青き泡吹きて、
あな瘦馬のゆきだふれ。
營み呼息は絕えしから
わなゝきつゝも生と死の
命の澱はふつふつと
破壞の束の間生を呼ぶ

材料は誰しも悲惨に感ずるもので、別に是を摑んだ功は作者にないけれど、技巧の進歩は確かに作者の功に歸してよろしい殊に終りの一節、力こもる（酔茗）

○藻艸

和泉　辰井花泉女

浪にぬれたる汀邊に殘る藻草を踏みゆけば
まだ覺めやらぬ龍宮の夢の匂ぞこもるめれ。
海底深かき巖影に眞珠清く育つ日を
虛榮なればと鯛姫のおとなうそれも否みしが。——
さあれ藻草に滿潮のやがてうら〳〵滿ち來なば
ゆらぎあえかにおもひ出の吐息に紅の花咲かめ。

色彩の美くしい作です、中心の思想も無いことはありませんが、今少し空想以外の感興に觸れたかつたものです（酔茗）

○おもかげ　四谷　小山那香子

あこがれの　その玉ゆらを面影は
めにまざ／＼見ゆれども　もとよりそれは幻影の
思ひのかげの君なれば　わが唇をおんぼゝに
憫れんとすればあゝはかな　思ひばかりに消えうせぬ
したはしき　君を置きても只一人
古里遠くさかり來て　都の秋をさちかうの
薄むらさきの靜寂しらに　涙おとしてたゞずめば
空洞となりしわが胸の　底に愛ひのかげは宿りぬ

詩語の聯絡もとゝのひ、姿に奔る弊もなく、一わたり習ひ即えた作、慾を言へば今一息引しめた力の欲しい事です（辭者）

○日の座　名古屋　櫻　盆子

渾沌扉深き冥暗を蹴りて　火の玉現れます紫殿の御座
偉なりや活動、靈かの姿　惠みぞ深なる自然の善美。
詩の子よ魔の業よ悲しむるば、　瑞光めぐれる神坐居伏して
甘露落ふる天華に醉ひね、　胸底久遠の靈香に燃ゆれ。
今こそ森羅萬象雄神に抱かれ、　仰げば目もはる天路の遠きに
微妙の幽韻は何の天籟か、　若き子ほころん期てそ來つれ

絢爛榮ある紅蓮の冠　錦襴眞向きの袖上げまして
永劫守らず天地の極み、　おのづとこぼるゝ瑞喜の涙

濃艶好きの人には欣んで讀まれるでせう、詩の眞髓は是等の作よりは何うしても得られません（辭者）

○美人草　芝區　眞崎花枝

月もなき夜に美人草、　紅燃ゆる戀衣、
さやかの風に靡きては、　薄化粧なる白き露、
百千碎けてきらゝしく、　星とも見えて地に落つれ。
銀鈴絃つ揺らゝと、　人も醉ふらめ樂の音、
千人の舞妓紅や、　青、紫の舞衣に、
舞ふ時空に美しき、　虹の色とも目は眩め。
凉しき夜なり蔦生ふる、　小さき別屋に二人の、
若き人達戀語、　よき御聲なり月光、
すかして見れば舞衣、　髮には良き香美人草。

きら／＼しき色彩的文字が多すぎるやうですけれど、餘り無意味には使ってないやうです（辭者）

○まぼろし日記　周防　内山夢二

一日。晴、さまよひぬ、　椎茂る杜の中をば――。

ふと邂逅ふ、かの人に、我胸の焼けよと許り。
抱きあひにしかの人に、あゝまぼろしよ。
二日、晴、さまよひぬ、昨日の杜、同じところに
ふと見出づ、かの人を、戀に乾ける唇に。
潤むまで口づけあいし、あゝまぼろしに。

おもひつき(酔茗)



嶽小路半込　華子

○歡樂

北總　あや子女史

埋もれし去歳の樹の實の、
その種子のせまき夢にも
いかならむ呼息はかよひて、
ふれやすき思ひにさむる
さめよ種子うるほひは充つ、
さやかなる音をばきかずや
流れよる命の小河、涓滴のみなもといでぬ
夢みしはなにのあやゝみ、身は浮ぶ光の涯か
ゆくすゑの樹杪ぞかなふ、琴の音の闕の禁か
うづもれし殻にはあれど、なが胸の底にしもまた
歡樂を慕ひつくすと、あくがるゝあゆみ響くや
萠えいでゝさらば一月、菫花こそ君が伴侶なれ
生ひたちてやがては夜、眞白百合に添はまし

第一、二聯は容易に得難き名句でありましたが、第三聯以下に至りて、内觀的冥想の弱つたのは如何にも殘念です(酔茗)

○零餘子の實

麹町　淺井ゆき子

野菜ばたけの雨あがり
垣にまつはる蔓くさや
光りはにぶき錆色の
風姿おかしき零餘子の實。
鏝の形せるみどり葉の
蔭に生ひては幾何とも
わが眼にあまる茂りかな。
鈴を張りたる狀なして
三つまさりの姉君は
細きみゆびに拂ひつゝ
青き雨よりいく度も
わが手せましと渡されぬ。

零餘子と云ふ珍しい實を歌つたのが此作の特長です(酔茗)

○秋雨

上總　矢代秋代

秋雨や古りたる街の終日を
しと〳〵と降りそゝぐ――ものうげに――
竝みつゞく魚屋や八百屋竝くらき
空氣傳はり「廢滅」の氣など襲ひ來れ

ふと見やるかの交番の人だかり
罵り騒ぐ小僧はた下女
手帳把りものきゝたゞす巡査と知るや
戀人の名を高叫ぶ――赤き蹴出の
黑髮もしどろもどろに――あはれ狂女

ふと見やる白衣の人の一列は
なき人の柩おくると笙の音、悲哀かすかに
しづ〳〵とうなだれ勝ちに歩をはこぶ
吹くや風榊の七五三に――死は淋し――

我はふとかゝる夕を病む母が藥取るべく
隣村に使ぞしける故郷のをさなき頃を
思ひ出ぬ――絕望の身にしあれど
青春の血はときめきぬ――そが一時よ

戀と死と追懷と、錯綜して生氣ある刹那の感の湧く處、今一度考へ直すと好い作になつたてせう(酔茗)

○おもひぐさ　かげろふ

心つよくもいひましぬ、
さりとては弱き女に
「愛の花さゝぐ」と
なほ斯くて悩したまふや
よはき心いつまで
虛僞なりしとすぐに
「我心誤解りしや」と
いひましゝ御うらみ
「緒はながく絕えせじ」と
なやめたまふさらば
たちたまへ我が思ひ草

松にからまる藤かつらと云ふ趣(酔茗)

○暗の間　神戸　大谷百枝

薄月夜輝り反えされて、白蠟ゆらぐ宵の暗
亦啼きて伏す床の間の、カーテン白くゆすれては
かすかにさしぬ新月や、眞白き頰にくれなゐの
血汐みなぎる眼のあやの、くしくも光る暗の床

さすがに詩作の手加減は分つてあるやうですが、中心の思想がまとまつてゐない爲め、讀んで得る處が少いのです(酔茗)

○畫室　丹波　大下繁子

秋は淋しき雨の日を、ひとり畫室にこもり居て
綾羅かづく若人が、羊追ひ行く畫は成れど
さて徒々の詮なさに、倦みし畫筆を投げすてゝ
口て馴れたる美き人の、美き名教えぬ籠の鸚鵡に。

此れても一寸感興を惹きます(酔茗)

○紅の花（初子を產みける古里の友に）

麹町　船津康子

小さき蕾に息吹きて
幾日を露の惠みゐて
くれなゐ深ふ匂はんに
只をとなしふしなやかに
名知らぬ草のまだかたき
只紅なれと祈りしを
此の朝、花は紅に咲きぬ
紅に咲きぬ、此の美き朝を
花より待ちし君が子も
眉しなやかに美くしき
女子とききにし、よろこびや
澄子てふ名も嬉しくて
千重の白雲隔たれば
產聲きけず笑み深き
花の其頰も見はせれど
只しとやかに美くしき
君に似しとは夢に知る
朱房くけたる小枕や
夢安らかにれむる子の
小さき息吹の乳の香に
醉はされ心地あかず見る
若き母振り見るさまや
名なし小草は永久を
君よ澄子も花なれば
女ちしふは育て給へよ

○眞夜中

信濃　園子

眞夜中よ夜を守る、
仄明う寂寞に入りぬ。
怪し鳥の羽音もせじな、
杜の影、五濁にそまぬ
折しもあれや裂帛の、
美し女の瓔珞ゆれて
常靜の太古のわが世、
にぶ色の大島浮きぬ、
古精舍をつゝみて觀る、
血にか啼く鳥の聲、
——かすかにも人叫ぶ——
死せし世に波立ちて、
おのゝきぬ夜の大氣、
髮はおどろ背醒めて
宙なとぶ足もとは、
しどろもどろ暗にまぎれぬ。



秋の野路　名古屋　淺井こう子

○夢

在清國　柳川紅蘭女

嬉し我が夢君が夢、
五月の日光あたゝかき
花苑にひらくひなげしや
紅き白きを摘むと見て
さめし我が夢君が夢、
秋寒むけき夕野路に
思ひ亂れてさまよひの、
相抱いては泣きくづる
覺めては一人寂寞の、
何とも知れぬ耳端に、
あゝ我が夢と君が夢
戀ぞや何ぞや君と我れ
只むづがゆき胸の內
戀よと低ふ囁きぬ
夢こそげにもなつかしき
夢路通ひて逢へばたらなん

○知らぬ思ひ

埼玉　船津千代子

乙女十六若き血に
去年は可笑しと聞き捨てしも
昨日添乳のひな唄に
人なき所習ひて
胸に覺えし此力
日毎夜毎の胸の惱みに
煩悶てふ事知らざりし
十五の去年ぞ偲ばるゝ
胸のなやみは何なるぞ
小き胸のさゆらぎや
今我胸にひしと應ふ
聞きしも今日は己が身と
涙ふく身となりにけり
袖か寬かはた何物
枕はぬれて朽ちもせめ
なやみてふ事知らざりし
さるにも今年覺えにし

○秋海棠

羽前　湯村靜枝

砂地の水の清きにこぼれ、
百日紅(さるすべり)の花木畢の花、
朝にし栢榴の紅深く、
葉ごとの雫見るも寒けし、
小やみし雨は又もや細く、
鳴るか遠鐘響きにくれて、
軒の玉水溢え溢れて、
ふるきに小瓶の秋海棠の、
うすき衣の襟かき合はし、
里のうなゐに取り殘されて、
うら枯れそめし蚊屋釣草に、
夕の風のおとづれ見えて、
靜かに動く雨雲の影、
澄みたる水に波紋つくる、
迫るやいつか薄闇の色、
細く流るゝゆるきが中に、
ひと花摘みてなげつけやりて、
何くか鐘のあなた見送る。

○白萩

靜岡縣　藤本靜江

例へば天つ月姫の
姿にも似し白萩や
水晶の榮えと生れ出し
彩の小袖をかざしたる
朝、夕の色きよく
粧ひたかし笑しゝ
曉、星の影あはく
渡るか野邊のうす霧は
花精靈の玉をなす
夕べ軟風そよめけば
葉ずれに起るさゝめ歌
歌ひは急にゆるやかに
夜神白衣の襲ひきて
今、山の端に消ゆきて
露に映えたる白萩や。
ゆられて白き花の色
節はみだれぬ調ひぬ
無絃の琴のひゞきして

○花占

福井縣　新保勝子

光、らうたき丸窓の、
衣桁に架ゆる彩衣の、
打つや小鼓音も高う、
青簾透して月影の、
雪の小腕そと止めし、
誰に見よとの口臙脂(ゑんじ)、
京染浴衣清(すゞ)しきに、
金の小扇、頬に當てゝ、
戀にときめく胸押へ、
其花、帖に摺りつけて、
遠音の笛に聞き惚れて、
掻き上げ乍ら眺れば、
灯影にそむく姉姫や、
ときめきの匂ひ優しさに、
更けたる夜の興そゞろ、
黑髮を辿るに靡きて、
二八乙女の湯化粧は、
笑まひ溢るゝ眼尻(まなじり)や、
しごく淡灰色、絹ちゞみ、
窓に倚りたる嬌態や、
君に葵の花を見る、
今宵の占(うら)を氣遣ひつ、
風に縺るゝ後れ毛を、
土佐繪めきたる東山。

○牡丹

名古屋市　敏子

花田の牡丹ゑみたれば、
乞ひぬるあくぼ愛らしに、
知るによしなき恨みかな。
しばしが程に二十日草、
今となりてはなかなかに、
白きと黑き覆ひしてと
夕べ消え行く露としも
など散るべきと思ひしも
長き恨みとなりはてゝ

我にえたへぬつらさかな。
花よりもろき七とせや
廿日草にも先だちて、
いかゞなりけむ妹よ。
よべの嵐に二十日草、
妹はいづこにながむらむ、
妹の後慕ふにか。

○彗　星

但馬　中山加代子

頃しも葉月の中の頃
彗星てふ星の神
天の東に現はると
告げてぞ來る新聞の
郡の端に落るとき
人は何にか驚けど
見逃し給ふな姉君と
寐むき眼をこすりつゝ
床起き出てゝ大空を
眸も直う眺むれば
明けの明星影消く
ルリの蒼空銀の砂
圓き女神は西の方
二人が眼、同じ空
あな見出しぬ彗星

○曙の光

瑠璃の息吹は今とけて、

夢と咲き出てゝとちる
花のしづくを受くる身と
花散りみだるその夕べ
花も二十日の命なく

夕やけ

げに、さやかなる夏の夜や
ふと瞬きの其中に
思はず高き聲あげぬ

堺市　中川から子

紅と現ずる東や、

光は白き幻の
あゝ曙の美しさ、
太虚に築く宮殿の、
市のどよみに幸よばず、

○詩　人

麹町　浅井ゆき子



山々は迷宮めきつ、
羊見し牧場にいそぐ、
つとつみつ夢の草花、
謎の香を解かんの微笑か、

○面　影

霧吹く野に日もすがら、

紅に靈の香をのせて、
紫の糸、銀の糸、
清き扉に織しけり。

駿河　永井登美恵

み空に彩の夢を追ひ
愛の甘きを慕ひては、
そが常若き唇にこそ
絶せぬ榮は吸はれたれ
うつゝときめく平和や
無心の雲に與をよび、
名なし小草に遺る涙
もの皆活ける私語に
うれしき笑ぞ浮き來たる

○謎の香

和歌山市　さき子

野胡桃樹の水立まばらに、
木賊色うすき朝月、
淡やかに夢とかゝりて
香あるもやのこめたる、
ミレーが水繪にさもにたり。
亂れ髪眉にほふ子の、
白蠟の額にかざして、
片頬ぬらしてさぎり流るゝ。

八王子　白露

清き聲音に歌ひつゝ、

一つの露につみためし、若草わかき身なりせば、
夕ぐれ寒き秋の野の、枯れし小草をひとりふみ、
西にうするゝゆふ雲に、ふかき思もなからんに、
白きうなじを手にまきて、やさしき君とよりそひつ、
つみなき願ひ囁きし、むかしのゆめにかへりなば、
夕さびしき秋風の、終のさだめを告ぐること、
つめたく痩せしこの胸に、かくもつらくは浸まざらん。

○日は暮れぬ　　茨城縣　柳澤こう子

日は暮れぬ湖の上　深の夕露を
しきはへて海士の火は　蘆の間に仄なり
ひた〳〵と花殘打つ　女夫波に乗りて來ぬ
美しの歌乃と　ぬれ色の夕月と

○校庭に立ちて　　龜井戸　鵜澤白蓮

穹窿高く金砂を撒らし　春初無限のしゞまの夜を
獨り校舎の庭に立てば　風はそよ〳〵霧をはらひぬ。
劫初この方渾沌として　永久に破れざる霧の海に
巍として立てる巨人の如く　闇に講堂天を摩しぬ。
あゝこの庭の櫻の頭を　秀才幾百群をなして
こゝより自由の聲は起り、　こゝより平和の花は咲きぬ

○詩人の家　　小草女

六つぼの庭に草花は、　瀟所せまがほにはびこりて
白き紫くれなゐの、　か弱き花は盛りなり
竹ゑんめぐる八ぢようの、　机によりて筆はこぶ
主人のほゝを吹く風に、　胡蝶三つ四つまひ入りぬ
外は巷につらなれど、　内は靜かに溫かく
あした夕べを詩思ふ、　若き詩人に姉はとつぎぬ。

○夜　　下野　鈴木雪子

若やぎの光り溢るゝ　天地に闇は迫りて
暗黒の影は羽のして　自然なる色は褪せぬる
暗黒裡に沈める杜は　刻々に冷えゆく氣配
寬の神の死せし骸か　雨みに走る山脈
天日の光りに倦みし　萬象は皆し安すけく
夜の湖の大氣を吸ひて　闇の裡啜しさまよふ
ほのかなる月はあがりて　只黒き骸照らしぬ

○雲の戯れ　　大分　やま川

秋風樂の曲につれ　雲の羽袖を飜へし
唄ひつゝあまた天人の　戯る姿りの面白や
やさし手ぶりも虹の舞。
群れては離り〳〵ては　亦一所群れつどふ
八百に別れて又よりて　見よ、上ゆくよ下ゆくよ
雲の羽袖のかろやかに。
墨染衣、むくつけき　戯れし法師の睦言
まことゝ受けれど白雲の　遊し――かくる富士の背を
尚も迫行く黒き雲。

○生るゝ花　　丹後　賤の子

夜の宮居のうたげとや　うす雲もるゝ新屋の
眉目も若しと木の精が天　なる戀に憧憬れて
彩衣かつぎ舞ひ出てし　おもひを人は花とよぶ

短篇小說

廣津柳浪先生選評

三等

○お京

東京市本郷區弓町一丁目
廿五番地竹内伊四郎方
中村法子

田は刈り採られて、案山子は詫しげに秋風に吹かれ、小雀もかへりみない頃である、お京はうち變つて痩だした。

恰も物に魅かれた如く、毎日、孤鳥の聲に誘はれて、色褪せし帶に片手を挾み乍ら、寂しい薄原に悄然と、……打ち戰ぐ枯薄に絡まれて、動もすれば倒れそう、淋しい、哀れつぽい、姿である。

向ふの麓に落葉燒くのか、病む人の息の樣に煙がす――つと立ち登つては、消えるともなく、夢の樣に消えて居る。お京は懷しげに目を据えて、それを凝乎と、煙が夢の樣に消えて居る間眺て居る。

薔薇の花を織り込めた樣な頰は削けて、愁の水で練り上げた樣なその眼、恰も薄靄の立迷ふ枯野に、一本の女郎花のやう。

盆に唄ふた自慢の聲も、悲嘆を喞つ音とかはつて「五年も十年も二十年も、死でももう遇はれまいか」

誰に語るともなくほろ〳〵と、涙を流しては、切ない溜息を吐く。悲愁の谷を埋めし、落葉雫を潜つて漏れる樣、一吐息毎に、お京は細りゆく。

可哀そうだ眞實に可哀そう！

野は枯れた匂ひが充ち〳〵て、遠い國で囀く樣な頃となつた。

さら〳〵と風の渡る毎に、枯れた薄が折れ朽ちて、恰もお京の身の上を語る樣に、絶えず寂寞の天地に、悲調を刻て居る。

薄黑く鳥の影が、すつと走る、それを追ふて眼をあげると、向ふに男女の法界屋が、定め

なき旅の氣樂そうに、急きもせずぶら〳〵と行くお京の眼は急に輝いて、妬ましい悲しい涙が寂しく落ちた、兩人の歌が、恰も泥路に下駄の食ひ入つた如く、お京の胸に刻まれて――痛い〳〵、思ひやられる。

倚り添へる兩人の、後ろ姿を見送つて、村の方へ消えると、もうもう耐えられなくなつて、涙果てなく泣き出した。

「なぜあの時別れたのだらう、腕が千切れても縋つて、縋つてゆかなかつたのだらう。」

その日を思ふて悔恨しい、悔恨しくて歯がキリヽと鳴る。

「お京さん、もう遇ふまい」只の一言。

只の一言であつた。お京は夢の樣に別れた、そうして別れたと覺てから、俄かに悶え出したが、男はもう居ない、呼べども〳〵、顧みずしてゆく夏の、風と共に何處へか去て終つた、餘り果敢ない別れ樣である。



逝ける日、行ける人は呼べども歸らねど、ゆける事のみは暗きに葬り難く、小さき胸に火花を發す、その度に瘦せた胸に龜裂が這入つて、筋目々々に悲い涙が沁み込む。つらからう、如何なに辛苦からう。

蕭條と雨の降る夜である、仄暗い灯影に臼を挽いて居る――赤い襷も最早引き立たない――石の軌り合ふ音が重々しく、ごろう――ごろ――。

臼の廻るにつれて、次第々々氣が沈て、魅られたやうに遠くなる。

「お京！」突然、鋭く響いた。

はつと我れにかへると、何時か臼の手の止つて忙然と、夢の底へ潜つて居たのであつた、爺は恐い顔して睨む。赤挽きだすと、今度は腕が

擾るくて、悲慘な音が身を壓する樣に響く。親にさへ話せない胸の、苦悶に蠢めく蠶が、血の糸を吐て巢に絡みて、悶え悶ゆるそれの如く、拭へども拭へども絕えぬ淚の、亦しても密かに咽ぶのである。思ふ樣に泣く事さへ出來ぬとは、何の因果かさても哀れである、鹿が泣く虫が泣く、泣くものゝみの此の世!!わけて優しき乙女なれば。

月が冴えし夜、削けた片頰に光りを浴び乍ら「もうもう遇れまいか。」

お京の生命は既に、この一語に縮て終つた。里程標が枯薄の上へ横つて、寒ふ照り返つて、恰も骨のみの旅人が、死際の水一杯すら與えられずして去た樣！右と左の分れ道迄來ると、一寸立ち止つて例日と反對に曲つた。寺に行く道てある。

和尙は占が上手との噂は聞けど、はて何と言ふだらう。

筋の立たない、情の偏した、妙な作物てあるが、只一つの取りえは清新の氣の溢れてゐる處、文章に詩趣の深い處、生意氣なことを書くと叱るべき作てあるけれど、若い感情の激する頃てなければ、又斯んなものは畫けない、强ち老成した眼を以てのみ判斷すべきてなからう(選者評)

四等

○胸の緒琴

たけ

お雪は歌はない、折々梭の手を止めてほつと長い息を吐く。窓から眺めると、野は一面ぼうと芒が風に戰いて、其の上を白い雲が忙しさうに飛んて居る。淋しい！眞に淋しい！お雪の眼はいつか曇つて熱い淚が頰を傳ふのである。――其の頰の、まあ瘦せたこと、紅芙蓉の花のやうだつたのが、純白の百合の樣になつて居る、極めて快活で其口元に始終美くしい笑を湛へて居たけれど、今は、小さい胸がたえぬ愁に裂ける樣、三日月の眉の顰みが痛々しい。

牧場の笛が悲しげに響く頃は、お雪は蛇度野の一筋路を悄然と辿つて居る、ぼうと芒が囁き合ふ間に、野菊の枯れたの、龍膽の褪せたの、裾引きとめる棘の實が夕日影に轉々とほのかな紅を散らす、露に咽むでは、悲しげに果敢なげにこほろぎが、お雪の胸の思を泣くのだ。

野守の家を右手に見て路は小川に沿ふて二町計、小川の岸にお雪の泣く處はある。枯草の間に眞白な墓石が一基、紫の香の烟が枯れた樒にまつはつて細々と立

ち上る末に、早や輝きそめた星影の――、さう、其の星が丁度お母樣の優しいまなざしにそつくり、けれど、最早お母樣は此の世にお在てなさらない、お母樣は、世に一人の私を捨てゝ、遠い御國に行つて了はれた!!

お雪は石にすがりついて泣くのである。

夕暮の色に仄めく白い頰、傳ふ涙の雫に一つ〳〵星が宿つて居る、星は憐む樣に瞬けど、噫、私を可愛がつたお母樣は、もう世にいらしやらないのだわ!

私は、私はもう一人法師なのよ!

涙果てなく泣くのである。

鳥だつても矢張り母が戀しくなつたのだらう、三羽の駒鳥が家に歸ろと鳴き連れて、紅の腹を入日に翳して紫紺色の遠山にと飛び去つた夕からは、山々は白くなる、野は霜にけぶる日の光寒く、萬象皆冬ざれのわびしうなつて、明けても暮れても芒の風、狐の飛脚も通るであらう。

お雪は泣いてばつかり、生きていたつて詰らないもの、私は寧そ死んで了はうか知らんなど思つて。

斯て春になつた。春は溶けます白雪も。山々の雪が融になつて、富士はうす紫の戀衣着た。野には菫や蒲公英がかざして頂戴と微笑み初める、黄なの白いの、何處からともなく蝶が翩々と羽袖輕げに舞うて來る、南國の歌唄ひながら、燕が飛んで來る、さうしておち髮を編んで巣を造るに甲斐々々しい。

けれどもお雪は浮きたゝない。

誰に云ふともなく「淋びしいわね――」と涙絶ず流れてうつら病むばかり、弱きは人の身、わけて優しい乙女の身なれば。

ある夕暮である、お雪が例の樣にお墓に泣きに行かうとする時、「雪ちやん!」と呼び掛けた人がある。

『誰?』と顧ると、夫は憲であつた。憲は羊飼の少年だ。溫和しい羊等は睦じう遊んで居る、車前草を食むのもある、寢轉んで七彩麗はしい夕榮を眺めて居るらしいのもある、何事をか語合ふ如く頸を垂れてさまよつて居る一群もある。憲は草の上に身を横たへて、片手には笛、片手を膝の邊にうづくまる一匹の頸に置いて夢見る樣な眼をあげてお雪を見たが、莞爾、片頰に笑を浮べる。

お母樣のお墓へ」

『そうなの』と、淋しう笑む。

『私も一人法師、雪ちやんも一人、淋しからう」

「あゝ私眞に淋しいの、憲ちやんも淋しい？」
憲は默つてうなづいた。お雪は何とはなしに顔が熱くなつて染まつて來て、云ひしらず懐かしいやうな、曾て覺えぬおもひの、胸が異樣に躍るのである、袖を啣んで頂垂るゝ片頰を暖かな夕風が花の香を含んですうと撫てる、と、黒髮が襟に肩にさゆらいだ。
「雪ちやん、餘り力をお落してない、野に出て御遊び、野は眞に樂しいよ」
矢張り頰を紅めて斯う云ひ捨てゝ憲は立ち上つた。羊を後に從へて節面白い繩拍子、小さい聲で歌うて行く、憲は一寸振り返つて莞爾とお雪を見たが、軈てうす紫の霞の彼方に分け行つた。羊の群は曉空にたゞよう白雲のやう。
お雪は深い恍惚におちて了つた。
ふと我に返ると、さら〳〵と小川の音が、――春の女神が斷れた緒を繋いだのかしら、二十五絃を掻きならす樣、麗はしい音に流れるのである。
お雪は胸の小琴も鳴り染めたのであつた。此平和な野の懐に包まれて、秋が來ても冬が來ても此緒の斷れることなしに、お雪は再び笑と歌と、榮永久の子となり得るてあろう。

女學生



三河　道江女史

五等

詩に見るやうな美しい句が澤山つながつて、誠に聯珠のやうだ。美文としては、新式の上乘なものであらう、けれども小說と云ふには少し人間が描き足りないから、惜い哉上乘の作とは言へない、小說を書かうと云ふなら、今少し人間を親切に見ることだ。此筆を持つてゐるのだもの、屹度勝れた好いものが出來るてあらう（選者評）

○隣室

駿河國清水町松永策吉方　松永しげ子

久しくあいて居た隣の二號室へ、今朝入院した人がある。患者は二十七八の身長の高い、見るから病人らしい痩せて顔色の惡い男の方、附添の方は奥樣てせう、二十一二のふつくりとした丸顔の際立つて美しい。

看護婦が午後の體溫と脈搏を見て行つた後で、私はお湯に行きながら言葉をかけた。

「奥さんお湯に被行いませんか。」

枕許で新聞を讀んで被居た奥さんは、鳥渡此方を見て輕く會釋をなすつて。

「は、有難う厶います。」と云つて何か小聲で病人と二言三言話して居たが、直に手拭と石鹼を携げて出て來る。

鳥渡考へると今朝逢つたばかりの人に言葉をかけるのは、如何にも馴々しいやうであるが、塲所が塲所だけに誰しも其樣な事は思はないと見える。

「御病氣は何で厶いますの。」と湯槽の中から私が訊くと、奥さんは顏を洗つて居た手を止めて、

「あの脚氣なんですが、時々痙攣が來ましてねえ困りますんですよ。」

「それぢや中々重いんですね。」

「でもね、靜まつて居ります時は、もう壯健の方と同なんですが、起りますと筋がつるのですから、足を縮めたり身體を曲げたりしまして、ほんとに大騷を致しますんで……」と寂しく笑つた。

「それは御心配ですねえ。」

「左樣です脚氣も恐い病氣で御座いますからねえ。」

恐い病氣と云つた奥樣の聲が、私の胸へ妙に響いたので、そつと奥樣の方を見た。

看病疲の所爲か眼がいたくくぼんで、顏の中にも手にも胸にも、若い血の動くのが見えない、心の曇はありありと見られる「お氣の毒な」と不知口へ出た。

「は、」と奥樣は聞とがめた。

「いゝえ何でも御座いませんの」

「あら左樣で御座いましたか、ほ……。」

それなり二人共默り込で了つた、廊下をばた〱と草履の音がしたが、だん〱遠くなつてそれもばたりと何處かの部屋で止つて了ふと、急に寂となる。

雨催ひの肌寒い風の吹いた此日は夜に入つてから雨になつた。

私は父母や妹の事を考へ乍ら所在なさに庭の植込に目をやつて居た。芭蕉の横に亂れ咲いた萩が薄りと白く見えて、つい其處の椽の下で蟀が啼いて居る。

其聲を聞いて居ると、秋の哀がしみ〱と身に泌みるやうで、何とも云はれぬ心細さが湧いて來る、此細い雨を聞乍ら、厭な藥の匂を嗅いで居る、誰しも淋しいと云ふ事を感じたてあらう。

ふと隣の事を思ひ出した、奥樣も此寂しい秋に泣いて居られやう、病人は眠つて居るのだらう、話聲もしない、がた〳〵と廊下の硝子戸が小さく動いて。ひやゝかな秋の風が身に迫つて來る。

隣の部屋へ行つて見た。

女學雜誌を見て被居た奥樣は、火鉢の前へ蒲團を敷いて呉れる。

「寒い風が吹きますね。」と私が云ふと。

「最早秋ですね。」

「如何です、お寢つて被居るやうですね。」

「へい、眠つて居りますが猶且安心が出來ませんてね、こんな時に來る痙攣は、隨分ひどう御座いますから。」

奥樣の厚い情に守られて居る病人は、どんな夢を見るのでせう、其夢も結ばせまいとてか雨は今物すごい程强くなつた。

隣りの病室を描いたゞけだが、其何の意味もないやうな裡に、妙に人をひく力がある、筆さきの才ばかりではないらしい、此作者は小說を書くべき能力を具へて居ると言つてよからう（選者評）

秀逸

○其船返せ

丹波　難波早緑子

薄い月がぼんやり沈んで了つた、藤見山を夜霧が白う流れて、舊曆は文月星祭の前宵のことである、形ばかりの小さい停車塲の待合室には、人の影もなく、今し十時を點つ時計の音が眠げに響いて、上り列車が來るらしい、遠雷に交つて、かすかに聞える。折からバタバタと草履の音がして、十五六歳の娘が一人、淋然と這入つて來た。

「何驛迄ですか？」と賣札口から覗いた驛夫の大聲に一寸顔を上げて、「豐岡まで…ハイ三等の…」震さえ帶た小聲で恁云つて、隈ない燈火に面をかくす樣にして、二重にも三重にも帶に卷き込めた毛糸製の袋から、銅貨をごちや〳〵と、並べ立てる。

聽て大切さうに赤切符を握つて、兩腕に抱えた縞の五布風呂敷に、吻と息ついて、やをら改札口に立たうとした時、「竹ちやん…一寸々々」聲もあはたゞしく、髮さへ亂して馳け込んだ娘…「大變だよ。彼のお夏の意地惡奴が遂々告げたんだよ、ぐず〳〵してると、…今に追て來る故…さあ此方へお出よ。私迄が大事になるんだもの。…さあ疾う〳〵。…」おろ〳〵するお竹を引ぱつて、「今に上車て來ますよ。」と注意する驛夫の言葉に耳も呉ず、まろぶが如に室を出て行た。

十斗り秒刻んだ時計が、一分に廻つた時に、ついつ

と這入て來た二十五六の、職人扮裝の男、ぎら／＼底光りのする双眼で一瞥改札口の内外を睨め廻したが、何だか拍子拔の態て、そこの驛夫をじろ／＼と瞶めて居る。

「お乘車ですか、」と氣が付いた驛夫が手を差し出すと

「いゝえつ」と鋭く云ひ放して、「畜生、彼方かもしれない。……」

呟やき乍らふいと出て行つた。外は星小暗、野路遠く只一點の渡し場の灯火のみ遙にまたゝいて居る。

＊　＊　＊　＊　＊

「では隨分お大事にねえ。……何有お錢の事なんかいつても宜しいから……それよりか彼の亦茲だと氣が付いて追かけられるかも知れないから疾う……お翁さん賴ますよ。お母さんのご容態もすぐ彼の家迄知らせて下さいよ。」砂の上に彳たまゝ息急乍らも、さすがに名殘は盡きず。

「は…お梅さん……有難う。あなたの御親切は私死んでも忘れませんから………。」

「よいとこしよつ……」と、大呑込の切親老翁が手練の一突――船はつるりと夢心地のお竹を乘せて、見ん事岸を離れた。

「そしてね…そして竹ちやん、……彼岸からは下澤の驛へいらつしやいよ、未だ／＼汽車は大丈夫ですから…それではさやうなら、」…お梅は猶聲を掛ける。

「あーい、さやうなら……、」…お竹の聲は早や遠ざかつた。

折しも後にバタ／＼と人の氣配、お梅は狼狽て小屋の裏へ忍んだ。

「おういつ…」…の聲の主は正しく先程の男である。

「お翁さん。…其船戻してつ……」

けれど、船は早や向うの岸に付いたらしい。

「今すぐだ……一寸待たつしやい。……」と何食はぬげの老翁の聲さへ、微に遠い。

彼岸には、客待ちの馬車の笛が喧ましく、一寸止んだと思ふと、客が增えたのだらう。

「ぴゆう／＼ぴゆう／＼／＼。」と南へ走り去る。

そを追ふ樣に星が一つ長う流れた。

停車場と云ひ、渡し場と云ひ、讀者にわく／＼させる程、際どい處を上手に書いてあるが、かんじんの趣向に缺點があつて、例へば此女は何者で、何の爲に逃出して來たか、又男は何の爲に此の女に追ひすがるか、其わけが少しも無いので、未だ物足りない、不用意と言はれねばならぬ(選者評)

○花嫁花婿

陸奥野ゆり

上

一日〳〵と日増に涼しさに向ふので、私は今日も朝から日あたりで張りものして居りましたに、母が秋や一寸來なとの事、そこ〳〵にたらひかたづけて庭へまわり、椽のはしへ腰かけると、父がにこにこ笑ひながら、秋姫様がいよいよ御婿様貰らつたよ、えほんとうと云ふと、母が今朝の東京新聞を私の前にひろげて、此れうそなもんか姫様のと御婿様の寫眞が出てるだとおつしやるので、一寸と私の室へ持つてきて三面をひろげると、花嫁花婿と題して「子爵花園隆重令孃須惠子此度男爵草野正義次男正名氏と去る五日目出度結婚の式をあげたり」とあつて御二人の寫眞ものせてあります。つく〴〵姫様を見れば、私が御奉公申して居つた頃の面影はどこへやら、をかしがたい立派な御姿に御なりなすつた事！御婿様も威儀のある御方、此のやうな御方を御秘藏の姫様の御婿君となすつて、子爵も夫人もどんなにか御よろこびの事だらうと、新聞をたゝみ、そつと破戸を押すと、初秋の空が心地好う張りものがもうかはいて居る。

お化粧



麻布　松崎みどり

下

ねられぬまゝに起き出てゝ、小さな支那かばん開いて、七年前御やしきに居た頃、家への手紙や友達などへ出した手紙の下書きした手帳を取り出して、そこ〳〵とくりひろげて見ると、ふと江の島に遊ぶとの一節が目についたので、讀で行くと「六月二十五日、此の日夫人姫様に御供して、夫人つきの美根さん花さんと私と五人、江の島へ參りました、別邸でしばらく御休みなさると、姫様が秋貝拾ひに行うとの御言葉、さつそく小さい籠を持つて御供して海邊へ出ると、美麗な小貝が澤山落ちて居ます、姫様は秋になんかまけやしないよと、せつせと御拾ひ

遊ばす、私一生けんめいて拾つたので、籠からあふれさう、姫様にもうかへりましやうとうながすと、いやいやと云ふ、やう〳〵なだめて籠からあふるゝ程拾つた貝を大切にかゝへて歸へつた。」此の頃は丁度今から七年前で、私は十六姫様は十三でした、あゝ！月日の立つの程早いものはない、あの時の姫様がもう御夫人に御なりなすつたのですもの。

書き慣れてゐないのは勿論であるが、烏渡思ひつきも氣が利いて居るし、それに控えめに書いてあるから餘韻がある、そろ〳〵小説を作つて御覧なさい（選者評）

○哀音

京都　松岡綾子

芳子が姉の病氣を見舞ふて今三條の大橋へ來掛つた時は丁度八時過ぎた頃で有た。小冷てい風は上の方から吹いて來る、萩の小枝を態とらしく肩に捧げた二三人の若い男、是等は多分中京邊の手代方で有らう。流行歌らしいのを各自に歌ふて、どよめきながら行き過ぎる。

空には二つ三つ幽な星さへ見えて細い月は今東山の嶺を放れた、とピューッと細い力の有る按摩の笛は寂しう二條の橋の上を縫ふて聞える電氣は少し暗うなつて又パッと明るうなる。

何處やらで夢の様に三味の音が聞える、小首傾けつゝ渡る程に橋の袂の大きな柳の木の下に大勢人が集つて居る。芳子もソッとのぞいた、顔は、ハッキリと見えないが年齢はもう七十の上を越したらしいどてやら物ごし哀れな老夫婦！、薄穢ない單衣に上に半纏の破れ勝ちなのを着て三味を彈き、老婆は黒い單衣の上に名ばかりの帶をして三味を彈き〳〵歌ふて居る。頭には申譯許りの白髪の小さいまげを載せ、縁の破れた疊ござの上に座つて、多く頭垂れ勝に歌ふので有る。

七十の坂を越した彼等老夫婦。群集の人の前で涙聲でサモ悲しさうに恥しさうに顔もえ上ず歌ふのである、嗚呼彼等は歌はずば世を過されぬのであらふ、血を吐く思ひとはコウいふ時を云ふので有らうか。

芳子は我知らず涙がさしぐまるゝ、嗚呼。彼等に老を養ふ子は無いのであらうか。又孫も……。

又一しきり風は吹いた柳の木は小さき音を立てゝ靡き、うどんやは、鈴を振て通る。

老婆は歌ふた聞く人は又耳を聳てる。

……貧苦に迫れど何んのその、一旦殿御の澤市様。

假令火の中、水の底……………。

聲は細く長く、絶えんとしては續き。續いては絶えん

とし、薄絹を引き裂く樣な何とも云へぬ哀れっぽい節廻し夢心地に聞く人の心は歌の心て。腹て泣いて涙交りに語る人の心は其歌の心のそれてある。聞く人は息を呑み語る人は涙を呑む。柳の枝にぶら下つた提燈は風に動いて、山城屋の文字今や消えか、る。やがて一曲を終れば、一錢二錢と我知ず惠む人の間を腕さし延べて幾錢かを芳子も惠んだ。

西に東に見返りつゝ底語きつゝ歸り行く人の影。

月は柳の枝に宿つた。又一しきり風が吹く。

又人は柳の木の邊に集つた、芳子も今は柳の邊を放れた。嗚呼七十餘の老人、元は何處の誰て有らう山城屋とは彼が全盛の昔の家號では有まいか？。老夫婦に、三味線。山城屋。噫、芳子は何を感じたのて有らう。ゾッと身を振はして衿を正した。

小說と云ふ程のものでないが、柳の陰の義太夫語りは好かつた、こんなら或る長い小說中の一回と見ても面白い（選者評）

朝の踏切



青森　村林矢須子

○盆踊

豐前　植田文江

一

「梅と櫻を兩手にもつて、梅と櫻はどちらが薫る……」夜の空氣に波動を起した若い美しい聲の主、それは葉茶屋の娘お蓮といふのだ「お蓮さんだよ、美音のう」白い手拭を姉樣冠りにして十七許の娘が恍然と耳を傾げた、すると編笠に面を包んだ小意氣な若者も一寸歩を停めて、「眞實によ。だが孃樣の方が餘程上手ぜ」「村長樣のか、いやに肩持つね」とんと一つ三太の肩を打つ「先うお前何するだ、諧謔だねえよだが近年は一寸も踊らないな」淋しいお顏をなすつてさ、始終「この大事な盆によ、涙含んで許り居なさるでねえか、先にや活潑な方だつたが、それも是も病氣の故だらうと俺あお可憐いとお賤は流石に涙含んだ「あの優しい旦那樣や、奧樣の御心を察しりやのうお賤、……各自に身躰を大事にすることだよ」「左樣だとも」と云ひつゝ行手を透し見て「話

に身が入つて足が遅れた、三さん急がうよ」夕靄ひくう野末をこめて、露は玉と耀いて、虫の聲滋き夕野路を二人は踊り場さして小走に急ぐ。

二

一本の梧桐月に冴えて、太古の様にもの寂びた瑞巌寺の境内は、今や樂園と變じた。百五十餘の踊り子は二手に分れて、老も、若きも、男も、女も、打ち雑り、入り亂れて、今を眞盛と踊に耽つて居る。口説き手が美しい娘だと云ふので、群衆は颯と色めき渡つた、見物人は二重三重に二つの輪を取り圍んで居る「一昨年までは私も一所に踊つたが」静枝はほつと吐息を吐いて、漫ろに樂しかつた過去の夢を今更のやうに繰返した。袂の長い大柄の白がすりの浴衣に、淡紅色モスリンの襦袢を重ねて、跣足に紅緒の麻裏を穿いて居る。伏見の花と謳はれたその美しい姿と、香はしい容とは村の若者が青春の血汐を躍らしめ、涼しい聲と、巧な踊振りとは村人の心を酔はしめた昔と云つても僅か二年前の、歡樂を思へば夢のやう、有り餘る資産家の獨り子に生れ、限りない慈愛の懐に幸福な十四の春を迎へたのが一昨年て有つたが、月に叢雲花に風今や美しい夢は跡なく醒めて仕舞た。優等で去年の春村の小學校を卒へた萩野静枝は、尚進んで都の女學校に其秀才を伸す可き志望てあつたが、ふと脊柱に病を得て、見るも痛ましい傴僂となつた、あゝ若い女の、而も村一番の美容と呼ばれたゞけ、其悲痛も一入深く、暗き紅閨に人知れず薄命を嘆いたが、今宵しも寂寥にえ堪へて、綿々たる哀愁を抱いて、父母にも告げず只一人、月の光に誘はれて計らず逍遥ひ出たのがこの瑞巌寺の境内であつた。

三

「あゝ」と計り胸中の淋しさを秘むとやうに、美しい瞳に乾と踊場を見遣つたが、果敢ない感想がむら〳〵と湧くのてつと面を伏せて、吻と吐息をつくと滂沱と紅涙が溢れた、と人の氣はひがしたので何氣なく涙の眼に顧れば、白髯の老爺が佇立て居る「おゝ静枝、無言て家を飛出すもんだからどんなに心配したか知れないぞ、夜風に觸れてまた病返りでもしたら大變だ、阿母も案じて御座るから俺と一所に歸宅らうよ」「はい」と優しう答へたものゝ、餘りに悄悴た老父の面影の、是もこの軀故と、云はれぬ感想を心に泣く「ちや」、と優しい父の腕に助けられて、痩せし影を地に長う曳けば、背柱の何所やらに微かな苦痛を覺えて、思はず美しい

眉を集める、「痛むか」「いゝえ」と淋しい唇に幽けき微笑を見せて、「お父さま私踊りたいの、何時踊れるてせう」「……」「もう一度踊つてから死ぬのよ」父は無言のまゝ、涙かくして靜枝の手を取つた、一脈の青嵐さつと青葉に搖いて、さら〳〵と溢るゝ露の音、油氣のない束髮の亂れが蒼白い頰にハラリとかゝる。口說手が男の聲と變つた、唄節は靜枝が得意の鈴木主水。過ぎし日は無意識に聞きもし、唄ひもしたが、今は泌々と身につまされて、靜枝は露けき眼に幾度か顧見つた。

花やかて哀しい盆踊に一致したやうな女の身を中心にしてあるから、此作は存外讀み答へがする、陳腐らしくても、筆力さへあればよめる（選者評）

○心のはれま

神奈川縣　角田秀子

私は不幸だ親にも不孝だらうか。どちらに仕ても此いまはしい名が私の身を離れないで付まとうて居る身分の力で之が拂へるか！定まつて居る事だ物！。只慰めて居る計に過ぎない、然れど〳〵慰めるつても現に悲しい事は矢張悲しい。歸省の前日土産の何や彼や求めんと忙しい中にも、つと胸衝くは母上の事、歸つても心苦しい想をせねば成らないとは知りながらも矢張歸りの行李を整へ、妹にと買ひしリボン簪を見れば直に其喜ぶ樣が忍ばれ續て新橋驛汽車の中、見渡す景色に旋て故郷の樣抔忽ち胸中には一の想像が起つて、頻に心動かし何と無く嬉しい、いざ實際に身は故郷に歸つた。今は先の想像も過ぎ去つた夢の樣なもの。然して心苦しい今！現に私は母上の前で裁縫の針を運んで居る。妹の單物！針の目、大らいと叱られはせぬか、雜な縫ひ方故早いと云はれはせぬか。抔心痛めつゝ縫つて居る。何故私は斯う邪推を廻すか！自然に母上から覺えて母上に對しては何時も斯うだ！繼母、私は世に恐ろしい者と聞て居た、然ど實際辛い。之も世間で謂ふ繼母に自然、母上もお覺えに成つて私に對する時丈なのだと思へば矢張自分の不運と思ふより外は無い。折柄傍の時計が打出した。一二三四五五時……三時頃母上が、例に無くお茶を點れたからとて最早五

姉妹



長野縣　清水てい子

六日後に見覺えの在る最中を紙に乘せて來て下すつて、此のお仕事を仰付けられた。「學校の早縫ひ競爭で三番と下らないつて、芳さんのお鼻が高かつたから此樣子供の單物抔は一寸の暇で出來る筈ね」と妙に有仰て其處に散つて居た新聞を御覽に成て被居た。私は、かしてまつて居た儘何時に無く足が痛んて、氣に爲る程猶堪へられ無い。我と我忍耐の試と闇雲勇氣を出して漸く縫ひ上た。後は肩揚げと腰揚げ計、之て一息……

「お母樣漸と出來ました、腰揚げや何か仕置きましやうか」母上は何時の間にか机の上に在つた小說を讀で被居たのを名殘惜し氣に置て「出來たの……エヽ腰揚げも皆仕て置て下さい割に早かつたね……あゝ貞ちやん今呼で來ましやう」と起ち上つて室を御出に成た。跡に私は何と無く嬉しい。例に無く優しい御言葉。小說にお氣を取られて被居た故か其れに仕ても無心に「出來たの、割に早かつたね」と繰返した。先の繼母、と思ふ念は消えて私は自由束縛の身にも我と我心の慰安を得て、憂きも辛きも皆我れからだと此時思はれた。彼方に駈け來る音、忽ち茲に露はれて「姉樣着物着て見ましやう」七つ八つ計の少女顏形今の母が幼き折も忍ばれて眉の邊そつくり色白く眼の睜けさ來た日の當らぬ螢花が人懷こい「お貞ちやん此、宜いてしやう改良袖、さあ被居い身丈幾ら」と鯨尺取りて一つ二つ二尺三寸に仕て置きましやうね」「エ、姉樣お仕事早い事ね、最早之れ着られるわ」と針箱の側へ座りて「まあ美麗ね此姉樣編んて、あら何人の寫眞」糸卷の下から出て居た端を見付けて、取り出すレース糸の寫眞掛に……芳子はハッと仕たが「他の叔母樣なのよ」

「然う宜のね此寫眞掛、何處かへ掛て置きましやうね」

「えゝ然ど寫眞丈他のと換へましやう「何故」「でも死んだ方だから」「然う此の方お死に成つたの何うして」眞に驚いた樣！。「能く二人てお花上げた、あのお墓よ」

「然う：涼しく成たら又行きませうよ、ね、姉樣」

「姉樣之も叔母樣のお墓へ上げましやうね」

と路邊にほゝ笑む女郎花手折つ。……「エヽと答ふる心の中腹異ふ姉とも知らてかく慕はるゝ身のいかてく最愛しからざらん。芳子が母の墓、野末に立てる古寺をさして……眠れる母に何とや告げん。入相の鐘、幽に聞えて持てる草花白き袂にかくれて寺の門に入りぬ

實際の處、繼母小說の多いのには、選者も閉口してゐる、是も危うく逃れる處てあつたが、然うわざ〳〵惡人らしくも書いてなく、弁に筆て難い興趣もあつて及第したのてある（選者評）

和歌

佐々木信綱先生選評

二等

ものいはず向ひ居る子のありげにも
　灯かげにほひぬ春の夜の家
　　熊本縣鹿本郡中富村　富野かず子

四等

秋の夜や翁ひとりの山の家に
　焼栗たうべ物語しぬ
　　下總　藤崎美奈子

五等

わが思君が思と相あはむ
　けはひにこむる野の霞かな
　　備中上房郡高梁町字石大矢町　しすい子

秀逸

◯戸によれば朝虹ひくき松林夢のゆくへを白帆流るゝ
　　上總　木内秀子

◯秋風や萩みだれ咲く野に立ちて白雲みれば人なつかしき
　　上毛　磯貝末子

◯物の怪を見し夢そゞろ胸に湧きて夕べ淋しき芒野の道
　　常陸　植田とし子

◯初夏の雲は朝の野に開く菖蒲の色に流れける哉
　　奈良縣　芳野浪子

◯すゝき野の夢のやうなる夕月にほの見し人の忘られがたき
　　たけ尾

◯つらかりしおそろしかりしうれしかりし夢ふと醒めてもやにまかれぬ
　　下總　長谷川しん子

◯山椿落ちて輪づくる青淵の巖が根小草花みな白き
　　千葉縣　安藤すみれ

◯青葉蔭庭の小川に二つ三つ家鴨浮べり日は午にして
　　熊本縣　黒肥地雪子

◯うなゐらの牛追ひつゝもかへりくる川沿ひ小道百合の花咲く
　　佐渡　谷川桂月子

◯なでしこに宵の月して君待つとよるに垣根のうつくしきかな
　　津　川村なみ子

◯乞食等がやどれる堂の軒朽ちて月もる床にこほろぎのなく
　　伊豆　杉山野菊女

◯秋の雲雑林つゞく湖添の丘に小だかき君が家かな
　　福井縣　野田しげ子

◯聖堂の夕鐘ひくう消ゆる野を額たれて行く人影淋し
　　宮城縣　野川ふじ子

◯
　　萍の花

◎別れにし友をしぞ思ふ夕まぐれ初秋風の袖につめたき　京都府　伊藤とめ

◎ふと思ふ澁柿おほき故郷の家なつかしや初秋の風　若狹　津田汐汀

◎風死せる眞夏の空に雲の峰崩れかさなる國境哉　福井　野清文

◎六月の鶯めづる朝ぼらけ湯槽にちりぬ遲さくら花　日本橋　杉山孝子

◎奈良の宿ざれよる鹿をなつかしみ物わかちやる夕月の窓　備前　しづゑ女史

◎かくしてのつひのわが身やいかならむ昨日の簪はやもふさはず　三重縣　なでしこ

◎わきかへる高き潮の香にゑひてしばしまどろむ砂の上かな　安房　岩崎つゆ子

◎夕鐘はかすみの中を流れきぬ花の寺より松たつ岡に　能登　菊地操

◎京を西へ松原三里日は暮れて見かへる月に杜鵑なく　大隅　池端愛子

◎きぬ洗ふ乙女が袖にこぼれけり川邊に咲ける白萩の花　茨城　榊はる子

◎繪のごとき森も小川も見えそめて風なつかしき故郷の道　高知市　川村すみれ子

◎藻の花のほのかに香ふ夕磯のまさご路白し十六夜の月　小草子

◎縈おひて野をいくめぐり雨へ百合咲く谷を見出てける哉　豐前　八千代

◎しだり穗の稻穗の露のそれならぬ衣手ぬれて秋の風ふく　淸藝狀　小川たち子

◎物すごき旗尾の川邊に乙女子がさしぐしがたに月ぞ出ぬる　日本橋　三森ゆき

◎無き夫がおとづれありし夢さめてそゞろに淋し曉の鐘　福岡市　白露

◎秋姬の裾の模樣にしたきかな枯野に目立つ七草の花　和泉　菱の葉

◎しら萩の花しづれたるあさあけを避けさみせぬ黑き蜻蛉　越中　つれ子

◎姬百合のむれ咲く岸ゆ從舟に古雛乘せて島に流しぬ　豐後　古庄敏子

◎夢ならちてまれに逢ふ夜のさよ衣かへさてれなん島はなくとも　長野縣　古澤あき子

◎先つ世の戀に破れし戀人のたまの叫びか草に啼くむし　下谷　渡邊もり子

◎若竹に月は昇りて日は西に小波すゞしき夕ぐれの池　下谷　橋本なみ子

◎學成て我が志遂ぐるにぞ世に亡き家嚴の忍るゝ哉　本所　田中久子

◎春さびしまろ寐の君に絹ぶさのみ枕まゐる夕雨にして　日本橋　中村白ばら

◎萩におく露の名殘ゝ忍ばれぬかへらぬ秋の忘れがたみに　豐後　鈴木幸子

さすらひの六年の島に夏痩の顔の色さめしかひな細りぬ

○ 遠江 森下富士子

藥硼にもたれ生れし故郷の空ぞ眺むる家ぞ戀しき

○ 長門 明星昇子

草深き賤が伏屋の垣高う這ひのぼりけり朝顔のつる

○ 紀伊 春園睦女

炭竈の烟しづかに日は暮れて薪とる子の今かへるなり

○ 本郷 岩永貞子

旅すがらかへるかりがねながめては故郷しのぶ遠方の里

○ 宮城縣 千葉みどり

香をたづねここまでたどりきたれどもいかて折られんこの百合の花

○ 信濃 世良田ゆふ子

夢さめて悲しさまさる汽車の窓夜風身にしむ秋の初旅

○ 宇都宮 喜久子

白露や秋の七草こきまぜて虫よ人よと綾羅ほころかな

○ 奈良縣 喜多尾白衣

こゝろなき人も哀と思ふらんかり鳴き渡る秋の夕ぐれ

○ 和歌山 池見俊子

美しき夜を百合の香戀ひて忍ばしう深山わけ行く夢らしの人

○ 加賀 あけぼの

友逝きし今宵の月に詩よめばこほろぎすゞろ興そへにけり

○ 千葉縣 八木美佐保

うらぶれの身を欄干にもたせつゝ流るゝ水に耳を傾く

○ 神奈川 たづ子

渡守　北海道 篠原靜枝



秋の夜や山端にてらす三日月の草むらかげに鈴虫の聲

○ 備後 影山妙子

月花を見捨てゝもゆく雁がねは露ふる里の如何に戀しき

○ 伊豆 杉山すぎ子

夏過ぎて秋は來にけり初月夜池のべ涼し白萩の花

○ 羽後 むらさめ女史

秋の夜のなく虫の音もたえ〴〵にきぬたの音もやみにけるかな

○ 磐城 露枝子

樵雨晴れや緑遠野の松が枝に匂ふが如き白雲の影

○ 本郷 秋の花

古里の六とせ前をば思ふかな秋茸狩りの愉快なる日を

○ 長門 花子

忍ばるゝ親しき友は墓地の下姉と呼びにし四年の昔

○ えつ子

せめてはとなつかし人の其御名を文のおもてに記し見るかな

○ 讃岐 檜畫

行きくれて深山の奥に宿かればたへまなきなり谷川の音

○ 下總 越川つゆ子

秋くれてけさの初霜に菊枯れて庭の小山や虫の音もなし

○ 津市 服部小枝子

母と二人灯影背にもの云はず情しめやぐ秋の雨の夜

○ 武藏 幾香

夕月夜母に負はれてうつゝなに門田の蛙きく心地かな

○ 相模 菊代子

鈴虫の鳴く音も清き月顔にまた宿りして鎌倉の秋

○ 下谷 櫻花子

空高く荒鷲北に飛ぶ見えてあらしをはらむ雲さわぐ也

○ 德島縣 吉田紫花

死と云ふは西へ行くやに思はれて亡き人戀ひては西に泣くわれ

○　日本橋　今井菊野
なりにけり聲もあはれにこほろぎのねつゝつく／＼きくぞ悲しき
○　足利　政子
月見草月を待つなる里川の堤さまよう初夏の宵
○　秩父　近藤登久子
秋ふかき片野の小野の月更けてうづら鳴くなり妻戀しらに
○　天四　菅井女史
ゆく雲に思ひみだるゝ野の夕君ます方に心ひかれて
○　千葉縣　小堅誠子
旅に痩せし若き御僧に我あひぬ木曾路の秋の夕暮にして
○　越後　なみだ
嫁ぐ友に幸多かれと祈る身の何かは知らず心とめきぬ
○　磐城　しうん女
秋の雨ありし昔をしのべとやゆふべ淋しく芭蕉葉にふる
○　石見　石網直子
夕月や素足して來し十八の見知る少女と逢ひぬ浪路
○　上毛　羽衣女
友にとてたゆたひつゝも筆とれば我歌ならず雨強うふる
○　日向　池畔寧音
二人ゐばかくさびしくもなきものをなどか戀しく夕月を見る
○　備中　大西好子
うつゝなに煩悶いだきてさまよひぬ千鳥なく夜の寂しき濱を
○　佐賀　山櫻
日盛りも涼しくそよぐ山風を袖に包みて家づとにせまし
○　越後　松山けん子
大空の人さそふごと心持して月あらぬ夜をたどらんとしぬ
○　福岡　よし子
白濱に砂ふみありく影二人月を賞して秋の夜更けぬ
○　釜北　たか子
賤が屋の夕げのけむり立見えて入江に高く千鳥啼く也
○　神奈川　宮之千鶴惠

雲らなく風靜かなる秋の夜にかたわれ月のほのかに照らす
○　佐世保　靜子
富士みえて松原見えて舟みえて虫の音淸き汽車の窓かな
○　神戸　小夜子
茂りあふ草葉にをける露ゝなく殘る暑さの堪へがたきかな
○　福岡縣　木村俊子
尾花かげ誰れか居るらん秋月夜聞くだにいやます虫の秋音に
○　下野　梅澤哲子
秋の夜半雨の足音の夢さむき枕をぬらすこほろぎの聲
○　伊豫　栗の花
まだき起きて前の小川の水くめば掬ふ間に／＼月光ゆらぐ
○　鳥取市　猶笑子
何となく今宵やかくも瘦せきよる柴垣も寬とおのゝきて
○　高知市　川村すみれ子
七色の彩虹染ゆる朝あけを谷間に咲きぬ白萩の花
○　高知縣　土貫谷子
織姫が赤き心に染めなして御旗香ぐはし大和撫子
○　福島縣　石田芳子
秋月夜笛吹く宿の歌主は切下髮のうら若き人
○　下野　てつ子
秋草の花のいろ／＼はえもなふ萎える葉かげにほそきむしの音
○　豐前　角鋼靜枝
亡き姉の寫眞取り出し眺むる夕鐘響き來て秋雨の降る
○　福岡縣　松永仲子
頭を打つアイヌの小村しめやかに時雨するなりたそがるゝ頃
○　淡路　案山子
あはれ誰がこゝろづくしの花なれやわが文机の萩のひともと
○　高知縣　福留千代美
荒鷲が翼もがれし遼土の綠大野は血の香にゆるゝ
○　上野　關口初子
扉に寄りて仰ぐみ空のみだれぐも簾の下ふく冷たき風や

○　豐後　布衣子

ゆふ餉たき馬に水かひ風呂も立てゝ歸る夫待つ夕が江の宿

○　羽前　登坂信子

行く秋の霜になやめる白菊の倘惜まるゝ姿なりけり

○　下野　栗原くに子

母の許に家路を急ぐ雨の夜の車中に聞きぬ初雁の聲

○　秋田　佐々木貞子

朝な夕な學びのゆききふみなれし磯野の道の萩さきにけり

○　米澤　樋口夏月

夕月の影ふむ道にきこゆなりけふもはつせの入相のかね

○　岩代　根本松江

亡き友と相見し夢のさめやらでうつゝ心に朝の鐘きく

○　長野縣　野中要子

雨晴れて灯す頃の京の町淡むらさきに人かすみゆく

○　信濃　野の花

朝戸出や白き萩咲く川添の小村に月のかたぶきそめて

○　京都　孤秋

白萩のこぼれし陰を宿りにて宵々毎に細る虫の音

○　千葉縣　川名かつ

暮れて行く夏の姿を濟よき水にうつしては吹く稲の花哉

○　津市　松尾はな子

たまさかの文得て泣きぬ旅路の近づくとしもおもふ秋の夜

○　因幡　三橋春子

君行きぬあが住む故郷を振りすてゝ旭日まばゆき樺太の島

○　神田　角田位公子

みぞれ降る夕を累の逝きましぬやせたる頬に笑を殘して

○　出雲　白菊子

思ふ事云はまほしくと君ゐますみ空仰げば星流れ行く

○　伊勢　三輪榮泰惠

河鹿なくや風うら冷えしたそがれの八十瀬川面月うかぶ時

○　丹後　あやめ

海山を隔てゝ見ればふる郷の親のめぐみを思ひしりぬる

○　嘉穂郡　はる子

秋の野に淋しく咲ける女郎花戀しき君を失へること

○　岐阜縣　白井茂子

ひた〳〵と汐よす磯をつたひけり散歩すまして小貝拾ひに

○　熊本　六花

雨晴れて拭へる如き大空にかけ渡したる虹の浮橋

○　越中　大倉よね子

我が戀は小川に散りし花瓣の二つに似たり逢ふよしも哉

○　高岡市　北本歌子

荒海や湖につゞきし果戀しそこに我らの故里あらむ

○　攝津　つゆ

嵯峨の奥清水あふるゝ庵寺の尼君若し白菊の花

○　京都　島田千代子

小ゆらぎの庭の風の唸りやみて桐の一葉に秋ぞ身に泌む

○　備後　林梅花

文月ときくだに戀し去年の今日秋わかちて君は都へ

○　靜岡　大賀笑子

ふみ分けて誰かはとはん軒の端のかたむく月にまつむしの鳴く

○　上毛　關口綠富子

懐かしき人さりこゝに秋六歳土地を求めて柿赤實る

○　兵庫縣　津田濱枝

人しれず君を思ひて十五夜や月明らかに琴の音かすか

○　大和　よしの

亡き友の御墓に明日はさゝげまし君こひしとて咲きし眞萩を

○　下野　和田あや子

なつかしき友に別れてたゞ一人萩咲く野邊に月を見るかな

○　大阪　服部浜子

晩鐘は四方にひゞきて暮れかゝる小川のつゝみ白萩の咲く

○　遠江　白ばら

朝露のきえぬ間庭に來て見れば我がふむ下は水晶の玉

○　大和　栗山英子
高殿の楓月の宴たけなはに能楽の謠さえてきこゆる
○　埼玉　ひなぎく
稲の穂にいなごとまれる秋の夕の空しづかなり水の如くに
○　千葉縣　田村政子
さかり時過ぎにし花の色あせて情なき風にしぼむ朝顔
○　伊賀　山村りやう
目とづれば我胸の火を團扇もてあふりつゝ居る君こそ見ゆれ
○　大阪　島田すゞ子
白萩に小雨そぼふる垣根道もの問ふ女はさ美はしき
○　和泉　さゝ舟
なき人の鉢のすさびに泣かれたり今日魂迎ふ醮の夕に
○　土佐　高橋白ばら
いつしかも野守が宿をとぢこめぬ外山流れこしあかつきのもや
○　神田　井上秋月
秋來る千種の草の茫々と畦の垣根にくつわ虫鳴く
○　群馬縣　たき子
朝夕にうつす鏡の曇りなく光りをものが心とはせん
○　千葉縣　竹澤ちか
あけがたの漂ら赤城の水の上にさかさにうつる花菖蒲かな
○　上總　ひさ子
破れ琴の切れず殘れるひと筋にうたて空鳴るゆく秋の風
○　千葉縣　天癸女
櫓に乘り君や歌はむ北の闘驅馳走しる大艦の日に
○　千葉縣　柳花女史
文讀みて過ぎし春ども思ひ見て操正しき人となれかし
○　廣島　志熊英子
いかにせん軒ばのをぎをおとづれてきかじと思へば四方の秋風
○　群馬縣　花之主人
花賣の小かごの花をえりわけて花の名とひぬ秋の祭日
○　千葉縣　安藤美津
足もとにひれふす千山五百つ山王者と立つや大和富士が峯
○　上毛　霞音子
霧ながら朝顔咲きぬいとせまき我が前栽に風な遊びそ
○　舞鶴　星子
筆やめて暮れ行く空を眺むれば微かに響く入相のかね
○　京都　樋口波間女
さゝなみに落し我かげあらひ行小川の末に白き寺見ゆ
○　兵庫　淑子
なつかしき友はいかにといねむれば友來りたる夢を見しかな
○　小樽　澤谷都音子
人こふる心そゞろや夕暮をましろき花の一つくづれて
○　鳥取縣　內田靜枝
よき人の薄霧がくれはなやぎて立てりやあらぬ白芙蓉のかげ
○　豐後　加納豐子
小雨する夕の庭にしら萩を手折る蛇の目の人の美し
○　山形縣　松山瑞枝
秋やあるめしひの宿の虫月夜夫待ち人は門口にして
○　大阪　さつき女史
乞食の乞ふ歌かなし夕暮の柿の葉の散る菜畑のそと
○　水戸　榊はる子
高殿に歌の人よる夕ぐれやおばしま寒う菊の香ゆらぐ
○　大坂　加藤琴子
涙のみつさらばの辭にかけ出し君は歸らず庭の花散る
○　麻布　ひさし
人まつ虫の聲々打まれく尾花のそでのなつかしきかな
○　磐城　紅葉女史
もろもろの星ほのめきて賤が家の軒端ゆかしき白粉の花
○　長崎　四の百合子
住の江のよしの葉末に出る月は船守る白鷺のやつす夜としれ
○　香川縣　津島幸子
吹く風に落ちたる桐の一葉にも故郷戀し秋の夕ぐれ

○君がすむそのふの松に千代かけてちぎり久しき友づるの聲　丹波 奥村千代子

○弟が心づくしの牽牛花に負けじと起くる朝のたのしき　東京府 川井槇子

○菩提樹の若葉そよ風はら／＼と銀の雨ふる尼寺の晝　越後 ひめ百合

○墜つたふ筧の水のしたゝりに萩の花ちる山かげの家　熊本縣 白鳥子

○日は仄に匂ひぬ蘆の中をゆく川のあくたに螢のぼるとき　備前 つゆ子

○妻戀ふて啼くなる鹿の音に誘れて秋恋うも紅葉ば散りぬ　小石川 米成女史

○ころもうつ音のみたかくきこえつゝさびしさましぬ秋の夕ぐれ　大阪 和田靜枝

○見返れば兵營の火のうすれ行きて深草あたり虫のこゑする　京都人 見絹子

○夕月夜草路來れば妻戀ひになくか伏家の鈴虫の聲　伊勢 常盤木花子

○霧はれて月の影すむ山澤に羽かく鴫の音のさやけさ　神戸 東川艶子

○おぼろ夜を夢の流れにさほさして君とわれ行く笹小舟かな　鳥取市 上山千重子

○舟人は何をしるべにたどるらむ霧たちこめし秋の海原　堺市 淡水女

○行く舟に如何なる人やおはすらん時雨の夜半に笛吹き止まず　上總 能城榮代子

書斎　遠江 越川松子



○はら／＼と散りくる紅葉身にあびて山奥辿る旅の僧かな　下野 井上竹子

○亡き祖母に似たる老媼と語りけり遠山時雨るゝ初秋の道　上野 香花女史

○若草や里の朝霧ふかければ乳母が萱家のまだ見えもせず　上野 松本きくの子

○ほそ／＼に枯野流るゝ水のごとしづかに淋し我がから　静岡縣 加藤だい

○ゆふ立はあらたにはれて峠路の松の葉越しに湖の見ゆ　天堀花

○逢坂の峠を君が越すといふ夕の山の雲立ちさわぐ　大阪 澤村園花

○色どらぬ常磐の山に住む鹿も己れ鳴きてや秋は知るらん　奈良縣 喜多尾愛子

○ゆふぐれや萩の花さく山寺を月にうかれて訪れしかな　奈良縣 清水雪子

○おそく共色づく山の紅葉ばゝおくれさきだつ露やそむらん　越前 藤元津代子

○土かひし翁はひげをなでつゝもきく見る人に笑みかたむけつ　大阪府 寺部君子

○筆とりて友は畫がきぬ深山路の瀧のしぶきを畫の具にときて　茨城縣 小堀みち子

○歌あらば詠みて送らん門いてをないて別るゝ時鳥かな　高知縣 鏡の月子

○
風吹けば濃青濃みどりうちゆれて眞夏のいぶき森の雄姿
奈良縣　深雪女史

○
夕見し垣の朝顔今朝見れば赤白共に名殘りなく咲けり
千葉縣　今井しげ子

○
薫る風姫が御袖をそとゆりてしのぶに高し風鈴の音
南玉郡　金子ふみ子

○
思ひあり灯火消せば松越に月やさすらん文机のうへ
東京　とき子

○
ゆくりなく友がおくつきそと訪へば淋しふ萩の花亂れ散る
麻布　伊東房枝

○
はかなげに今はた何をなげかむや枯れたる花を散へずもあれ
ゆふがほ

○
なすのかげ床しくもるゝ琴の音にきそひて歌ふ鶯の聲
横濱　篠々木伊都子

○
月きよく白萩かほる學び窓ふけ行夜半をこほろぎの鳴く
静岡縣　石原時子

○
いまゝ川さゝやく聲の淋しくて夜は靜かなり滿洲の原
山口縣　井坂韻子

○
雨の夕青葉若葉の湯の宿に故郷戀ひて一人かこちぬ
日本橋　相川富士子

○
露玉の夕日にかゞやき宿りしをゆすり吹き行く秋の初風
京都　千代

○
月高く金波銀波の漣をわけて漕ぎゆく花屋形船
宮崎町　垂水かをる子

○
暮れ迫る汨羅の水の寒けさに高鳴く雁の悲からずや
陸前　小梅子

○
うたゝねの枕ながらに月ふけて水鷄なくなり川ぞひの宿
麻布　牧野紫紅子

○
幸あわく逝きしおとゝのおくつきに白萩亂れ雨しとゞふる
東京　服部春子

○
逢坂は秋な掛けたる名威はや夏に知られぬ走井の水
越後　ふぢ子

○
針運ぶ手をふと止めて仰ぎ見ぬ稻妻秘める雲の紙色な
仙臺　三好まさる

○
うつら病む秋はや暮れて庭園の桐の朽葉にさびしの雨よ
横濱　吉川晉都子

○
はやりぎの一人都に來しゆふべそゞろさびしく故郷の母思ふ
京都　田島由野

○
ともすればそよ吹く風にはら〳〵と花散り落つる眞萩白萩
伊勢　山川つい子

○
十六夜の月見るたびにしのばるゝ君と語りし學びやの庭
ちづ子

○
慈愛厚き御母の御佛の萩の花散る秋風の家
美濃　加藤里子

○
谷間なる秋風の家に日はくれて壁にさゆらぐ姫萬の花
高知縣　横田紫子

○
飛火野に花かざし行く乙女子の袖の下よりもゆる早わらび
廣島　田津子

○
いつとなく蟲きえて月かげと共に入りくる風の涼しさ
横濱　安藤廣子

○
ありがたや心も清くなりにけりみ大師のまへに法のこゑきく
神戸　佛子

○
蜑の子が吹く白銀の笛の音によき朝あけぬ有明の海
佐賀　田中要子

○
青柳の葉末にぬける白露の玉と散り行く朝晴の風
はる子

○
つたもみぢ小田の山路をふみゆけばしかのねさびし木の葉散る也
常陸　國貝久子

○
きのふまで宿りしさくら花散りてたづね顔なる蝴蝶の一羽
紀伊　山西好子

○ 美作 性全みれ代
うつくしき雲あり空に光よき星あり我に歌よめといふ

○ 下谷 幸枝子
さえ渡るこよひの月もなにかせん憂ひの雲に閉さるゝ身は

○ 相樂郡 松田あや子
松嶺や波の音高かく舟かろくはなれ小島に白き鳥とぶ

○ 遠江 深谷岩子
夕暮の波靜かなる細江湖に白帆たなびく入舟の景

○ 花醉女史
ふせ庭に秋夜平家の琵琶きけば萩の小窓に露の玉散る

○ 尾張 横井玉椿
鎮守森百度詣りの火は消えてやつれ女に秋かぜ寒し

○ 筑後 一葵女
苔むせる岩に根がらむ老松も御代の光に縁ますのみ

○ 和歌山 妹背美代子
病む母の薬もらはむ道すがらわが袖近く秋の雨ふる

○ 大阪市 辻 麗子
あさつゆのはかなき身とは知りながらちりゆく花のをしまるゝかな

○ 豊前 中村直子
病みたまふ母は如何にと手をつけばゆらぎに瓶の萩の花ちる

○ 大分縣 帆足しのぶ
白蝶の慕ひし花と知りぬれば手折らぬものを姫百合の花

○ 芝 山本紅花
丹の頰してきよき御額の美き女を春の夕の樓に見しかな

○ 東京 とき子
されぱとてあはれ訪來る人もなし賤のまがきに咲きし糸萩



草刈 茨城縣 幸子

○ 郡津 入代美代子
强ひられて彈べし箏のさへぬとて秘めし憂をあやしまれぬる

○ 肥後 みつ枝
蝶々に薄衣裝ひ初秋の君が萩の歸今日訪はせ見む

○ 越後 白菊子
みどり野に鳥もなき居ぬ君ましぬ理想の國はあたたかうして

○ 下総 ため子
あれはてしあさぢが庭にすみれ草ひとりのこりて匂ふゆかしさ

○ 茨城縣 柴原政子
一と撞きは水に沈みて消え失せぬ京尼寺の明六つの鐘

○ 茨城 とし子
夏蟲の聲も涼しき草原に玉とくだくる夕月のかげ

○ 熊本縣 黒肥地雪子
美き笑の君が盃をそとつきて我も笑みたり春の灯の前

○ 飛彈 千代子
人間はたゞ夏やせよとぞ答へてん胸のもだへにやつれゆく身を

○ 下総 野々宮國子
少さなる心の中にさやかなる美くし人の常にさ迷ふ

○ はな子
ありし頃君と愛でにし花さきぬ何其折に名つけざりけむ

○ 下総 野々宮清子
春の日やもの思ふらしの少女子と詩の人共に花野にくれぬ

○ 岩代 時雨女
さらぬだに寐覺めがちなる老し人の夢おどろかす萩の上風

○ 近江 道子女史
夕立に野路小川の水ましてあふるゝ音も涼しかりけり

○　上總　四之宮りやう

雲の峰けはしき山に弓矢とりけもの追ひける夢の後かな

○　千葉　あさがほ

ささがにの糸にかゝりし蜩の聲も哀れの秋の夕暮

○　下谷　赤堀久子

女郎花すゝきまじりに咲く野邊の小徑たどりぬ白駒ひきて

○　京都　堀星村

指折りつ待ちし今宵の月を見んさだかに照す沖の小舟を

○　大阪　さつき女史

なき友の墓に詣でゝ經讀めば夕さびしく蟬なきしきる

○　大阪　靜枝

月なめて人まつ蟲のなくこゑにしらべあはするわが琴の音

○　豐多摩　小池春子

心なく夢に笑む兒の夢やなに笑めば天使と顔かゞやきぬ

○　日本橋　三ッ森鏧子

美しき姫は簾をかいまきて繪筆染めけり芙蓉の窓に

○　京都　なてし子

それとなく君すむほとりさまよひつ胸とどろかす梢のさゝやき

○　奈良縣　中富よしみ

馱馬のむれ麓をいそぐ山の端の彩雲よぎる雁の一つら

○　尾道市　安保强子

浪荒く沖出の舟は今日も見えて蚊帳の廣さに思ひみだるゝ

○　豐後　原たも子

病める妻偲びて立てる士官や月影揺らぐ浪の上にて

○　横濱　中村かす枝

野荊蘋の生ひ繁りたる其ひまに眞すぐに咲ける女郎花かな

○　信濃　橋本今江子

浪あれてふき發く風の物すごし闇のかなたに濱千鳥なく

○　岩手縣　高橋きよへ

君を得て月よき夜半の路ゆけば彩雲に入る思ひするなり

○　臺灣　志波梅子

月出てぬ鈴蟲なきぬ秋草のにほふ庭の面露ふかうして

○　北多摩　大加英

花なれば今こそ散らむ思ひ出神よたちてんしづが玉のを

○　茨城縣　柳澤こう子

七夕や星の逢ふ瀬をなつかしみ三年相見ぬ人ぞ戀しき

○　上總　新月女史

人心濁りがちなる世の中に清くも咲ける池の白蓮

○　府下　森田志滿子

兒な亡りし姉の笑顔を見る度に顔そむけゝり露のおばしま

○　香川縣　合田まがれ

亡き父の日記をけふもくりて見ん面影さへもしらぬ身なれば

○　佐渡　土屋きせ子

秋の夜は小窓にふけて物思ふ空にさびしきかたわれの月

○　栃木縣　くに子

夕べ見し空の三日月影ほそく秋もさだかに見え初めてけん

○　能登　南島翠浪女史

かたみにと共に植えてし梅の實の色づく頃を君は居まさず

○　佐渡　谷川桂月子

日は眞盛穗麥黄ばみし畑小道子守の絵傘見えつかくれつ

○　本郷　朝井千とせ

月の宴に召されて出づる舞姫が一枝手折りし桔梗花哉

○　備前　金廣千代の

飼ふ子等もかはるゝ牛も野の人もいそぎはしりぬ夕立くると

○　茨城縣　小野けい子

小夜更けてほのかに見ゆるかゞり火はやま陸見えて鵜船さすらん

○　下總　花村一枝

我心照らして見ばや曇りなくまことに清き秋夜の月に

○　下總　櫻井定月子

美しき君が唄誦すよもすがら月も流れて星冴えにける

○　長野縣　夏野花守子

よわき／＼秋の入日を背にうけてきくきる君の御手白きかな

○日あたりの脊戸や片戸に稲扱きて若き二人の睦まじげなる　豐後　溪の月

○夕月夜庭の芙蓉のさ搖らぎに露に匂ひし月の影ちる　青森　三浦若子

○入相の遠山寺の鐘の音に桐一葉ちる秋の夕暮　徳島縣　笠井壼子

○振袖に虫籠抱きて秋ぐさの中にほゝえむ人美しき　伊勢　帆山靜子

○なばしまの端近う出て月見れば御空に高う初雁の鳴く　駿河　香浦道江

○獄枯れの翁語りに更闌けて栗の實三つ暗に落ちけり　福岡縣　今村利子

○大阪市　武田とし子
荒れはてゝ見るも悲しき我が家の昔を語る秋の夜の月

○鹿兒島　柳子
常ならば露に宿かす朝がほの宿もと思ふけさの雨には

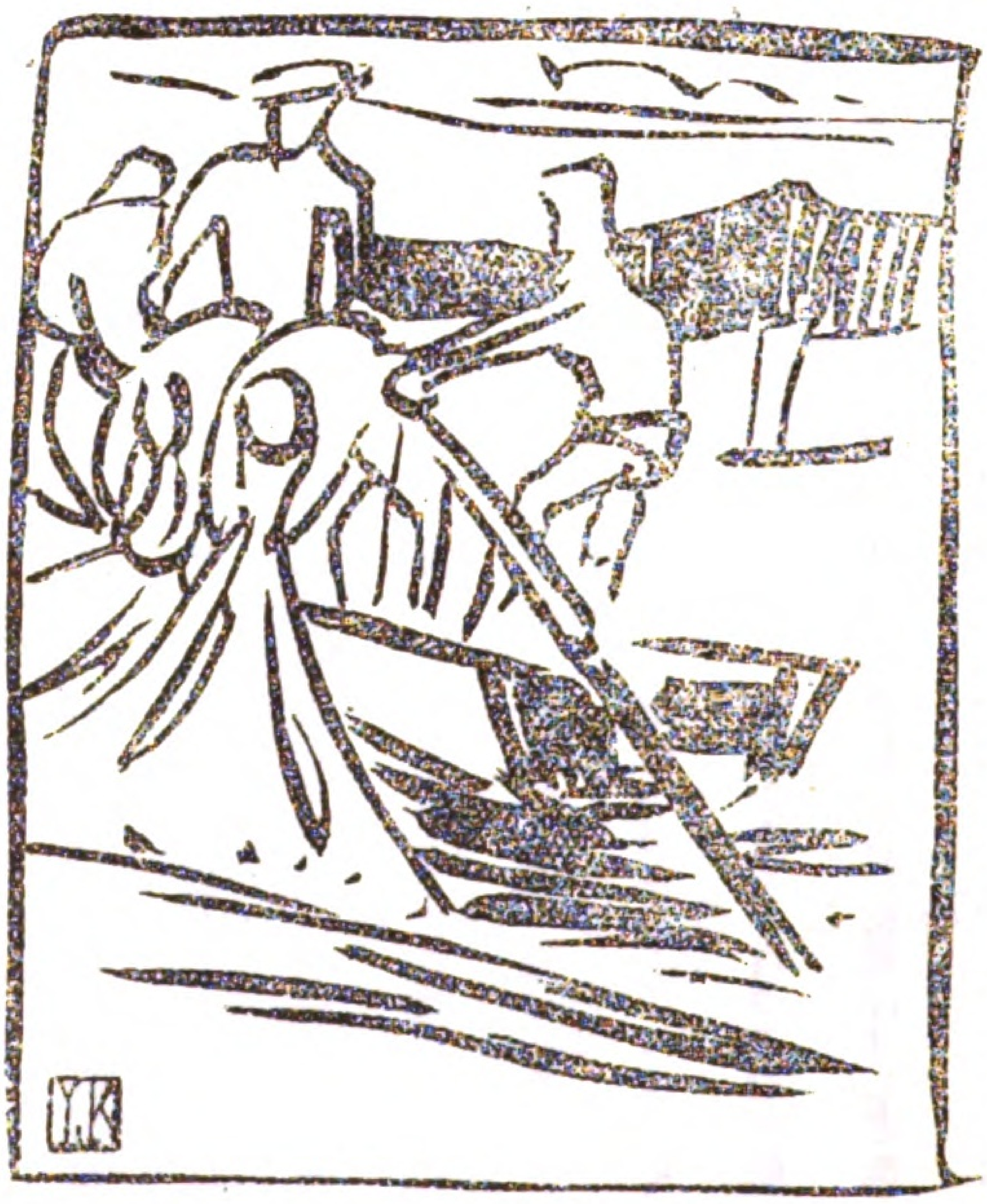
○京都市　山口愛華
京は西青葉茂れる嵯峨野路に琴の音ゆかし樒さく家

○下總　萩野花子
雲の峯に女神かくるゝ形して淋しさ勝る夕月夜かな

○和歌山　神保須磨子
ありと見し胸の記憶筆とれば消えて跡なきうたゝねの夢

○近江　道乃女史
國の爲身をばすてにしますらをはくもらぬ御代のかゞみなり鬼

地引網　豐橋　加藤芳子



○ましろなるたゝむきみせて麗はしき少女灯ともす紅萩の花　印旛郡　咲花

○尼住める霜の庵の秋曉や經聲低うおちばに消ゆる　諏訪　夏野花守子

○秋の空一人つくづくながめつゝ今しも姉はいづこにあらん　秋田縣　菅よし子

○打つけに物やかなしき木葉ちる秋の初を今日と思へば　香川縣　増田みのる

○月なめて人まつ虫の鳴くこゑにしらべあはするわが琴の音　大阪市　和田靜枝

○さしのぼる月にわがやを立出ておとづれかたるわらは友だち　靜岡　佐々木久子

○乳搾る少女を夢に見にしよりけし咲く野邊を戀しく思ひぬ　三重縣　長井漣月子

○白百合の風に吹かれて咲くとみしあまたの白帆海けしづかに　丹波　和田茂子

○召せ菊と花にうもれて呼び聲のうつくし少女門過ぎてゆく　藤枝　喜惠子

○父君が遺愛の菊はあざやかに笑むよ七年奥都城處　但馬　孤蘭

○奉納の手拭風にゆらぐなりあしたすゞしき辨天の祠　周防　春枝

○秋園や古家の秋を糸紡いてさびしうおはす母しのばるゝ　名古屋　たか子

○
白露とおきかはりけり昨日まで紅葉かざしゝ山のいたゞき　近江　西川勝子

○
浦々の苫屋々々を音づれてげに哀れなる秋風ぞ吹く　佐賀市　織田しのぶ子

○
小樣さき芭蕉葉がくれ富士見えてあさみどりなる初秋のそら　和歌山　さき子

○
海山をこへて學びの東空夢にもかよへ母の面影　名古屋　ちやう

○
きのふまで松のみたつと見し山にうれしや蔦の薄紅葉して　四谷　中山正子

○
六日なる月かげ淡きあづまやに物語るらん美しき人よ　沼津　入代美代子

○
亡き友の偲ばるゝかな共に見し花をことしはひとり眺めて　備後　中山ひさの

○
子らとゝもに尾花つまんと行く野辺にもの思はするひぐらしのこゑ　牛込　大野八重

○
尺八の音色かすかにもるゝかな逝きし兄思ふ秋の夕暮れ　和歌山　美代子

○
見る人もなきに深山のもみぢ葉はかざる錦を夜半もそめなん　王子村　岡田まさ子

○
色つかば共にといひし人はうせて山のもみぢは早散らんとす　羽前　幸女

○
朝霧や尾花のうれの玉の露見えて行くなり川下の家　岩代　巖谷子

○
水渡るはしき琵琶の音主は誰ぞ竹生が島の明方の月　伊豆　杉山野菊女

○
月に花に里もはるめくこのよひを小まどによりてものおもふ君　大阪　むらさき

○
黒を吐く森とて闇はたゞ人の目をゆるさじと氷遠にこめにけり　備中　菅森紫水子

○
かの空に我とひとしき性もちて泣く人あるや秋のむら雨　津市　森田賞子

○
夕山の落葉をわけて人知れずつめたき石にかく歌もがな　八王子　白露

○
夏の日も沖の小島に早やくれてかすかにきこゆ漁船のろの音　羽後　佐藤なつ子

○
菊の酒賜ふやかたの御簾もれて萬歳の聲小皷の音　日向　濱砂まさよ

○
山路を只一人行く旅僧の衣の袖に日はくれかゝる　下野　關町子

○
時鳥澄み渡りたる月の夜になく音寂しき夕立の後　福島縣　江花せん子

○
夜店にて買ひし撫子我庭の小さき園の眺めなりけり　若狹　やす子

○
聞きながら浮世はなるゝ心地して夢になりゆく鈴むしの聲　上總　紅葉女史

○
夏ふかき庭の露そふ糸はぎを手折らば月の數やみだれん　白ぎく

○
蟋蟀や詩をなかばに夜は更けて火桶の炭も灰となりつゝ　常陸　橋本啓子

○
淺茅生のすみれつみにし此野邊も君なき後は誰とつまなん　新潟　坂井たき

○
今日もまた雨風はげし古里のたらちねいかにおはしますらむ　安藝　不二子

○
空晴れて十六夜の月こよなしと京の御姉に文まゐらせむ　栃木縣　加藤もり子

○
學びやに通ふ少女の足元に咲きこぼれたるしら萩の花　羽後　伊藤さき子

○
若き僧がみこもり居ます北堂の森におちゆく明星のかげ　磐城　村岡花子

○
朝早くかなりや啼いて鶏鳴いて庭の垣根に朝顔の咲く　兵庫縣　川西久野子

○　小石川　山崎恩子
いく萬の稲穂熟ませて音もなう靜かにくだる秋の川みづ
○　富山　崎子
うさぎいづ野畑にたはむ秋草も今でこひしき秋はきにけり
○　日向　右松寧子
糸川の一もとやなぎ色づきて入日淋しく秋風の吹く
○　備中　みどり子
夏山の彼方に忍ぶ杜鵑物思ふ我に初音きかせよ
○　美濃　飯島みゆき
夕映えはやゝに消えうせ吾詩をきゝて笑みます星のさまかな
○　常陸　幸子
潮の香のゆるうたゆたふ磯の夕しろがね月はかがよひ出てぬ
○　長門　伊藤則枝
夜はふけて灯ゆらぐ四疊半に文讀む人の美しきかな
○　駿河　深尾けん子
しばらくをわれ月姫のみ子となりて下りし精は白露の玉
○　長門　中村あき子
日ぐらしの鳴きつるなべに日は暮れぬとおもふは山の蔭にぞありける
○　長野縣　加藤芳枝
名月のかげをふみつゝこゝかしこそゞろあるきに夜を更しけり
○　下野　猪口みい子
ふりかゝるつゆしげゝれば我そでのかはくひまなし秋の八千草
○　岩手　小枝子
月見草河原撫子を彩どりて夕月淡く川風涼し

京都　宮原みどり



○　陸前　榊原正子
天の川水まさるらし夏の夜はながるゝ月もよどむまもなし
○　越後　瀧澤硯都子
黄菊の花びらそれのかゞやきや榮華の路を女神行きかふ
○　越前　高村愛女
初秋や木々にかゝれる白玉の光輝を君と思ひ見る哉
○　下野　鈴木蕾子
百合咲けるさまして流る白雲の林にきれて閑古鳥鳴く
○　佐賀　西君子
姉君よさきくましませ永久に又も逢瀬を松の木蔭に
○　陸前　今泉八重子
なきしきる千草のもとの虫よりもしげき思を誰に語らん
○　筑前　朝霧
行く人の姿はかすみて見分かれど霞の中に歌のこゑする
○　大阪　平野ふて子
悟りきな黄金も珠も何せむといとしき乳子の逝く夕べにし
○　伊豆　浮露子
鈴虫のこゑも涼しき山里にまつの木末の月をめでけり
○　佐世保　淺田克子
もや深き垣根によりて夫おくるうつゝなの人うらわかくして
○　佐賀市　東山澄子
初秋の艶なる色に染めもせで眞白に咲ける夕顔の花
○　山口縣　鶴野麗子
湯上りを涼しや高の涼み臺着うちはあふぐ九夜の月

東京　小路登子

○糸車つむぐ苫屋に鷄なきて柿くれないの谷あひの村
周防　谷瑞子

○ふけばとて稲葉にそよぐ音もなし風よりしげき露のおもさに
横濱　清水千秋子

○濃き淡き谷の紅葉をながむれば妻呼ぶ雄鹿の聲もかすかに
遠江　鈴木三榮子

○夢かあらじ我身は開きぬ獄人やそれとは知らず泣くほとゝぎす
美濃　白井安子

○秋の夜の宴も果てゝ踊りくるこだまの森に雨降りしきる
長野縣　宮坂すみれ子

○眺むれば月もさやけき石山の木草にやどる露の白玉
京都府　伊藤とめ

○姉上よ播磨の國は朗空に地曳するかやわれそを思ふ
上野　荒木あい子

○涼風に花提灯の靜々とゆれてける散湯泉の宿
下谷　つゆ子

○松むしの聲さめ〳〵となきいたる小萩の露や涙なるらん
青森　村林矢須子

○つばくらのなびく柳に別告げてやがて雁鳴き渡るらむ
大阪　西端芳枝

○さらぬだに淋しき秋の小夜更けて語る友なき一つ我家
群馬縣　小森たつ子

○月光に細波輝く大洋に夢かの如く白帆浮き居る
萍の花

○誰にせむか歌にせむかのたゆたひにそとこぼれけり露のしら玉
陸奥　高木糸子

○湯浴する音靜なり麗人の月さす窓にこほろぎの啼く
紀伊　秀子

○おく露のしげき思ひをねにたてゝ蟲もうき世の秋をなくらむ
京都　靜子

○なく虫の聲のみいとゞさやかにてあたり靜けき秋の夜半哉
廣島縣　勝丸りよ

○小雨降る淋しき夕を古寺に訪ふ人も無く鵯の鳴き合ふ
京都府　大下紫子

○若緑森の女神の秘歌に夕べゆらぎぬ白百合の花
筑後　靜子

○虫の音もきれぎれなりて秋の夜は戀しき里の偲ばるゝかな
沼津　渡邊とよを

○草露に曉月淡き川添ひの牧場へ急ぐ乳しぼる人
三重縣　四山數子

○荳荷して高映き踏る秋の暮朽ちたる橋のあやぶまれけり
香川縣　茂留女

○我が庭は深山の奥の一つ家紅葉に明けて紅葉にくれぬ
山崎よし

○宵のまの嵐は松に靜まりてうきよともなくすめる月かな
伊賀　伏見つた子

○映るものほゝゑみすなる池の面にゆらり一ひら芙蓉散り浮く
松山　越智君子

○ゆく秋を歌にやせたるよき少女住む白萩の月の野の家
山口縣　山下富士子

○たちさりし思ひにこがれぬば玉のわが黑髪はちゞみけるかな
筑前　青葉女史

○月冴えて萬物淋し秋の夕城影淡く喇叭幽に
愛知　紫雲女

○なき母がかたみにうゑし秋萩になみだと見えて置ける露かな
呉市　齋藤美江子

○破れ寺のつく鐘の音も打たえて雨しづかなり秋の夕ぐれ
美濃　紫子

○月の宮御宴の玉酒溢れては結ぶなるらん萩の白露
有馬　光壽女

○秋風に咲きほこりたる女郎花おばなが招く小原野の里

文藝遊戯

灯火の影（課題）

説明 此「灯火の影」は古來の婦人が假に姿を秋の夜の灯火のかげに現はして、述懐や、不平や、見聞を物語ると云ふ趣向てありました、原稿は相應に參りましたけれど、飛はなれて奇抜な趣向に接し得なかつたのは殘念です、も少し皆さんは想像力をお養ひなさい（記者）

一等　紫式部

宮城縣仙臺市北一番丁三一　河原榮子

私は幼少の時から和歌の道が好で世間の事は夢にも存じませんてしたが、只今の身になつて夫に先立たれてからは、淋しく物思ふ身となりました、父が男であつたなら藤原家を繼がするといひました言葉を思ひ出して、あゝ男であつたらと思ふのです、おゝこんなつまらぬ身上噺を致しました、これからは歎かずに女子の趣味教育を致しませう。

二等　山内一豊の妻

青森市米町　村林矢須子

皆さん私は山内一豊の妻ですが以後御見知り置きを願ひます、さて私は貯蓄と云ふ事て感じた事を一つ御話致します、承りますと近頃の婦人方は、日用品は安物を買ひ、指輪等は千金もをしまぬさうですが、此れは間違つて居ないかと存じます、身のまはりのかざりをつゝましくしてこれを貯め、不時の用に備へてこそほんとうですが、なくてならない日用品は安物を用ひ、其くすねた金をためて、かざり品を求むるなどはほめた事てはないと思ひます、自分の事を示すもをこがましゆう御ざいますが、私がしたあの一事、皆さんも御承知だらうと思ひます。

三等　建禮門院

新潟縣北蒲原郡新發田町字三之丸　山内みさほ子

あれあれおそろしや、又も響く鬨の聲、源氏の白旗のみぞ勝り來て、赤旗の殘り少なになり行くぞうたてき安徳帝は何處におはするぞ、早う白の裝束召され候へ、妾も衣着更へてよき所へおつれ申さん、源氏のせまらぬ中にとくさせ給へ、とくさせ給へ、妾も此み劍捧げて行かん程に。あな淺まし、世が世なりせば物事わきまへめされぬ帝を、かくもせきたて冥途へは導き申さぬに、いでや我身も維盛どのや知盛卿のおあとをしたひ奉らん只々いたましきは幼き帝あれ〳〵又も迫り來る物の具の音、鬨の聲

四等　お經

下谷區二長町三　奥村富志子

妾が父の死と夫の死と同時に聞いて

「御父様は非業の死でも御年の上、勘平様は三十になるかならずに死ぬるとは嘸口惜しかろ」とふと口走つたを馬琴様初め其他の先生方から親不孝者、道知らぬ女と御叱りに成りましたが、餘りの事と御恨み申ます。總べて女は幼き時は親が戀しく、長じては夫が戀しく、老いては子が戀しいもので、若い女に夫と父と何方が戀しいと御尋ねは餘り人情に外れた事と存じます。さればとて親をよそにしたてはなく、常情の儘夫を先にした許りてす。お年の上といふのを親の死を悲しまぬと御取りは甚だ迷惑、只父と夫の死を同時に聞いて浮世の義理に思及ぶ餘裕がなく思はず夫を先にしたまでヽ御座います。

五等　清少納言　埼玉縣入間郡東吾野村　淺見波子

言痛きもの、海老茶の袴きて、清らなる襟重ねたる女學生の、高きカラーして髪長う分け、香水の薫よきハンカチーフに見よからぬ顔など撫てつヽ高慢氣の大學生と喃々と語りたる。滿員の電車の中に大兵肥滿の男の我見よがしに腰うちかけたる。いと若き紳士の婦人の中も顧ず大口開いて物食ひたる。燕尾服着たるやん事なき人の酒に醉ひて歌女どもと戯事したるなどいと言痛し。

○淡路　丹波　難波あいの

チリン／＼……

大塚の里より淡路に侍り、おん身は犬塚主にやさらば一言申上げてん。先の朝芽出度き門出の古河のみ舘へ志し給ひつるおん身に引きかへ、過世の仇かとわなみの願も、理には動かぬ嚴しき仰に是非もなく思ひ止まり侍れども、心一つを螢虫の、文よぶいとまに、戀ふ夫の、上氣逆つても時雨染むる紅葉に猶まさる思の種の鈍やいたつきと迄、晴れぬ苦熱の暇も侍らずかし。恩と義理の板ばさみに、盡きぬ命は、絶えやらぬ綠も深きおん身てふ正しき夫のあるわなみに、辭のおだ卷きかへす其日やいつと、堪へかてに迫れる㨿はわなみの爲親の心も察しれかしと、夜を日についてのさとし言。元より親の恩は深かけれど親子は一世夫婦は二世の契をなどて偽にやはせん。そこらの事には心置きなく、只願きは來ん世のみ。忘れ給ふなさらば。……

チリン／＼

○舞扇　西多摩　森田なか子

妾は源の義經公のおもひもの靜の前が白拍子たりし頃より愛をかうむり居たる舞扇に侍り、後ち義經公反逆の聞えありて、靜母子は鎌倉の手に擒はれし時、義經公の冥助を祈らん爲め八幡宮の回廊にて一曲を奉納する事とはなりぬ、此日賴朝公及び鎌倉の大小名、奥方姫君まで靜が天下無双の舞曲を見給はんと皆々左右廂のかげに居並び給ふ、かくて靜は身を裝ひ回廊に立ち出て袖を飜し歌をうたふ聲は麗しく、曲は美しく、實に貴賤群衆感嘆の外なかりし、此中靜は一心に義經公が無事を念じ仰ぎ願くは鎌倉殿の疑晴れて素の如く骨肉同胞の好身に復らせ給へと此時一首の和歌を吟ず「吉野山峯の白雪ふみ分けて入にし人の跡ぞ戀しき」と次にご兄弟御中睦まじからぬを歎きたふ曲を歌ひ後ち又一首の和歌「賤やしづ賤の苧環くりかへし昔を今になすよしもがな」と鎌倉の權門も恐れず其貞節を著しゝ事、舞扇の身に取りても古今に絶えたる名譽なりける。

○稻川の妻　陸中　山櫻花

あゝほんとうにどうしようういつそ身賣りをして夫を助けようかしら、それにしてもにくいのはあの鐵ヶ岳、二百兩借した金をかさにきて、今日殿様の御前ての角力にわれを勝たさばあの金をくれる、若し負かさば今日中に二百兩を返せ

とは……さても情けない、金目にかゝはらぬ名譽の今日の角力、夫に恥をかゝしてどうしてだまつて見て居られよう、夫は今頃あの土俵の上でどうしてるだろう、あゝ何も思ふまい、二百兩にわが身を賣つて夫の難を助けようあゝそうしよう。

○老女　久留米市　加納あやめ

さても興深き秋の灯火の影にて候よな、皆々うら若き姫達の何事をか樂しげに語らはせ給ふぞ此の老女が昔見し王朝の夢物語、しばしは否ませ給はじ。そもや妾はその昔、小町櫻の七重八重、衣通姫のそれかとも、色と才とに時めき候程は、天の下の男子、いづれも妾が足下に侍らぬは候はざりしが、思へば／＼こも一睡の夢、つきぬ恨みの種にて候ひし、流るゝ水の寄せきては、いつか數そふ白浪の秋の風さへ身にしみて、花うつろひの哀れさを、あゝ淺間敷は人情にて候哉、戀は仇とや、やう／＼かけし恨みのある時は、和歌草紙に入れし浮き草のうき恥づかしめをば和歌の浦和の藻鹽草波よせかけて洗ひ雪ぎし事も侍りしが、戀しさ積りては老の涙は迫きあへぬ關寺にしもこもりつゝ、古き思出の古衣うちも返していと深き恨止めし秋風のふくにつけてぞ穗芒の井手のわたりや淺間しき、是生滅法諸行無常、これぞ浮世の理にて候ひしぞや、あな時過ぎぬこれにてさらば。

○かぐや姫　讃岐　元女

お母さん私踊つて見ますと、又地球のお爺様が可憐そうに思ひますよ、併し仕方がないのね、五人の皇子に慕はれ、其上天皇陛下のお言葉さへあれば再びお母様には逢へないと思ひまして一寸お知らせ致して、迎をお願した次第ですからどう思つても仕方がありませんわねえしてまあ歸りの騒がしかつた事と云つたらね大變ですよ高い山迄、私をおつかけたのですよ、それは／＼澤山の武士でした併し幸に順風でしたから無事に着いたのですよ。

○淺羽の娘　長岡市　土田りた子

私は淺羽共常の娘であります。幼ない時から女子の學ぶべきことを深かく心に用ひました二十一の時德川の家來の小出大助と云ふ人に嫁しました。よく舅姑に仕へました。衣食住は云ふに及ばず儉約を守りまして家事をとゝのえました。夫は安心して公務に身をゆだねる事が出來ました。子どもの教育はすべて我身に引き受けて學問をはげませたりまた嚴寒の時になりますと子どもらを武術の寒稽古にやりました。其都度私が先に起きまして湯をわかしたり。御飯をしたりしました。私がかように心力を盡しましたゆゑみなひとかどの役に立ものとなりました。

埼玉縣　小林園子



○婉子　花子

私は米澤藩士某の女婉子と申ます、江戸新川で營業を始めてゐましたが、一夜妹と二人きり留守居せしに四人の賊門を破りて亂入しました、顫へる妹を戸棚にかくし、私は父が差添の名刀左文字を揮ふて二人を斃し、二人を傷けました、其時十六歳の曉でした、其筋から銀若干を賜はりました。つら／＼考へて見れば明治の諸嬢諸姉の中に私の半分の男氣があるでせうか。

○お染　大坂　清子

「ヒトツエー、廣い大坂にかくれなし瓦屋橋の角屋敷其の油屋の」と子供らの歌に迄歌ふ私はお染です「年は二八の色ざかり其の美くしさ」と云ふのですから拾六七のまだ眉揚も深きしんの箱入娘で店の久松の可愛らしいのに思ひ込んでゐますから山家屋へ嫁くのはいやで／＼たまりませんからとうとう久松といつしよに庫の内外で自害してしまひました。

○袈裟御前　遠江　武井白露

黄色い夕日をあびながら蝶が面白さうに舞てゐます。皆さんあの蝶はあくる朝、冷たい／＼霜のおくことを知らないのでしようか、まあ氣樂な蝶ではありませんか、しかし蝶のことばかりは笑はれません。人間もやはりあの通りでせうまして束縛多き女の身は蝶と少しもかはりはありません。いゝえそれよりひどいでせう、永いとたのむ大切な命でさえも、節操といふ名の許へは捧げて了はなければならないのですもの。こんな弱い女の身かとお悟りなすつたならば、心のみは暗い闇路へ迷はさず一すじに永久の慰安をおもとめなさい。

抒情文

文學士沼波瓊音先生選評

一等　○栗の香

本所區外手町六十一番地　田中久子

外は靜かな雨の宵です。

まろ寢の兄樣おかぜ召しては と戸棚から搔卷を出して、長くお延びの上へおかけ申すと爐の方へ延したおみ足をピクリと動かして寒さうに衿をお手繰りなさいました。かう爐を中に、母樣と三人が巴の形に座つた所は仄くらい燈になほ更寂しく見えてせう。母樣はまあるくこゞまつて長い火箸をお取りになると爐の中の灰をあつちこつちに搔廻して鳥渡此方をご覽に成てにつこりなさいます、と新栗の燒けるいゝ香……。手を延ばしてランプの心を少し明るくすると直又給縫ふ手をたどらせましたが……懷かしい栗の香はなつかしい思出の糸を手繰つて、つひ、針の手がにぶります。

長遠寺の萩がもう根元から切られて了つた頃でした、私の一番大きい姉樣がお嫁にいらしつたのは。

其時です、莊谷から私の祖母樣は牡丹色の風呂敷に大きな栗の實を一杯包んで、若やいだ笑をもらし乍ら遠路の草鞋の紐をお解きになると、やがて家の裏山へ其實をきれいに並べてお埋めなさいました。

夫から毎年背戸の柿が赤くなるとは赤坂からの若い姉樣のお車が門へ止ります。まだ新しい疊の香がする十二疊に桐胴の大きな火鉢を圍んで向ふ側が大きい姉樣とちい姉樣、こつちは今ゐる三人で、婚家（あちら）の話に身が入ると大姉樣はうしろの五分珠（かんざし）を取つて口をゆがめてし髮をお搔きになるのが癖でしたが小姉樣は例も夫を嬉しさうに見ていらつしやるのでした。其夜は秋でも灯がはえて、お次の間から夢のやうにかすかな栗の香がして來ます。小姉樣の小皺のお調がすむと黃と黑と鼈甲の斑の如に焦げた新栗が堆高くお皿に盛られて五づゝお行儀よく其夜は私も黑もじで食べましたつけ。お祖母樣が裏山へお蒔きなすつてか

らいゝ匂の花が咲きました迄が四年秋の一夜を樂しく栗の香をかいだのが三年もうおばあ様も被入らなければ小姉様の島田も土の中へ隠れて了ひました。大姉様は遠い空に、今頃は故里の栗の香を慕つて被入いませう。赤坂の兄様が山師だといふ事の分つた時はもう家の動產の半はなかつたのです。母様の大きなお眼鏡は例も私を覗き乍ら、もうお前は決してよそへなどやるまいよ、つちやお被仰います。まあこんな眞黑に、と急に大きな聲で、母様は紙へ乘せた栗をもみ乍らお笑ひなさいました。氣がついて又針の手を動すと、兄様も懷しい香にお目が覺めてかむく／＼とお起き上りなさいました。窓の南天の濡れ葉が白く灯にかゞやいて其下あたりにこほろぎがないて居ます。寂しい秋の夜はかうして更けて行くのでせう。

（評）纖なるうちに限無き涙あり斷るは女子にして始めて書き得らるゝ文なり。

様　先　茨城縣　柳澤眉子



【三等】

○わかれてのち

四谷　小山那香子

……友が私を思ふ情の、切なる事を知つてゐながら、自分ても何故かうかと、情なく思ふ程友の心を汲てやる事が、どうしても出來ませんでした。待つ人のある人もない人も、おなじやうにこゝろのときめく、春の宵でした。何の花のかをりか、ほのかに匂うてくる、垣根のもとにたゞずんてゐた私は、薄着の肩を友の手に抱かれて、片戀のくるしい事を、泣いてきかされたことがありました。その折十八の私は、それでも、なまめかしい心にはなれませんでした。

が、友は私の素氣ないそぶりを、別にうらみがましい風もなく、やつぱり優しく親切なので、私は、も、いつそ勿躰なくなつて、自分の心のかたくなゝのがうら

めしくて、散々に泣いた擧句、ふと私は、不具者ではないのかしら、と、こんな事を思ひ初めました。二人異なる悶に、其年も暮れて、お正月のかるた會の夜かほを見せたぎり、友は其後、ちよつとも來なくなりました。さあかうなると、さすがに戀しいなつかしい、待ちどほいやうな氣がして、夕ぐれなど、ひとりしよんぼりと、椽の柱にもたれて、見るともなしに遙くの空をながめてゐると、胸にはきざんでおかなかつた、友の面影がふつと浮んで、とび立つやうに逢ひたくなつて來るのです。それが度かさなるにつれて、いつか私は、空だのめな事を思ふやうになりました。お笑ひ下さいますな、私はやつぱり女でした、別れてのちの戀しさに、はじめて友の心を汲んだ私はいはうやうなき淋しさを、おぼえました。

（評）淺きやうにてさて深き趣あり。

五等

○鐘聲

紀伊海草郡紀伊村　春園賤女

人は都に如何なる秋や送るらむ、菊紅葉とあくがれなば、憂事知らぬ日もありぬべし。されど妾は病の床に臥して、日々にやつるゝ面影のいとしるく、落葉に騒ぐ風の音にも、行末遠く思ひやりて、濡るゝ枕の幾夜なりけむ。いかに定めなき世とはいへ、只獨り異郷にさすらはむとは、かけても思ひよらざりしを、果敢なさは我身の運命なる哉、寢られぬ夜半に砧うつ音寒う偏に故郷を戀ふるとも、花ならで又昔に香ふものなく親戚故舊皆頼り少きぞ更に心盡しの程なりけり。今宵もはや更けたりけん、四邊いと靜まれるに、折から闇に響く御寺の鐘の音、そゞろ身にしみわたり奇しき思に驅らるゝと共に、心俄に十とせの昔に歸りて、母君の臨終の樣、あり〳〵と浮び出てぬ。彼時はまだ幼かりしかば、母君の病さまでとは知らで、村の寺にて新しく買へる釣鐘を、男の子等と共に打ちて興ぜしが母君急なりとの下婢の知らせに、夢の如く我家にとび歸りしは、遲かりき母君は早や事きれ給ひて、慈の雫滴るが如き御眼、情の笑溢るゝ如き御口も、固く閉ぢ給ひ、只靜かに眠りませるがやうに、風もなき軒端の桐の葉ほろ〳〵と亂れて、夕闇の空雁の音いと悲しかりき、泣々御床の邊に通夜せし折、一時一時に聞ゆる鐘の、腸にしみて我身も共に滅入るべう覺え、あゝ徒に遊ばざりせば、せめて御臨終に一目あふとをえたらむものを、今はた思へば宿世果敢なき因縁にや、かの時何心なくつきし御寺の鐘は、やがて冥路に母君を送り參らする音ともなりしか、あゝ妾は終世この鐘の音を忘るゝ能はず、母君の戀しき思ひ出に伴ひて。

里にては人皆いねたりけむ、心も遠き田越の里に、友なし千鳥哀れに鳴き渡り、物淋しき空に加へて、雨の音はら〳〵と破戸をうちぬ。まどろむともなくうつらうつら、薄暗き火影に向へば、懐しや母君の御姿、嬉しと聲たつれば影はふと消えて、何處より來りけむ、羽もたわゝに行き迷へる蝶の、身の秋知らで重げに飛べるなりき、惡くや一場の夢なりしか、せめては覺めてあらましものを。折からゆるぎ出たる昔ながらの鐘の音、一つ二つ陰々と響きて、耳の底穿つやうに、聞かじとすればあや憎に音怪しく亂れて、惡魔の囁とも疑はれぬ。暫し小法師のつく手や休めし、次第に靜になり行く餘韻は、暗より暗に傳はりて、微に消え行く時のいかに淋しく凄き事よ。何處ともなく深き洞に引入らるゝ樣の心地ぞする。

いでや一杯の藥に暫しの眠結ばなむと、腕さし伸せば細々と壁に映れる我影物悽し、我ながら恐ろしと、あわてゝ夜具引き被がむとすれば、又もや耳元にて妾を誘ふ如き微けき鐘の音聞えぬ、あはれ母君の御聲にはあらざるか。

夜はいよ〳〵更けゆけど、折々響くうれたき鐘の聲、絕間にすさぶ木枯の風、流石に長き秋の夜も物思ふ枕邊に曉の色白くあゝ妾は遂に終宵眠りえざりき。

（評）敍らに凄からせむとはせずして自ら凄し、鐘の聲まことに聞ゆるやうなり。

秀　逸

○荒磯　　東京　土居優子

島も通はぬ玄海灘を……

　身過なりやこそ夜舟乘る……。

墨を流した樣な海の上を、冷めたい風がさつと行過ぎて、鶴島の影から漁火が一つ浮いた、勇しうて哀な節が、浪の音、艪の音にまじつてきれ〳〵に聞えて來る渚――と云うても荒いころ〳〵した小岩、其間を跣足て、冷めたい潮の寄せては返し〳〵、眞白い浪の立つ中を步んでゐた私は、何とも云い難いたとへ樣のない悲しさが、胸をついて溢れて來た、自分でもわけの分らぬ涙がほろりと出る、あゝあの歌、身にしみる樣な節、其人はどんな心持ちで唄つて居ることか、赤銅色した屈强な。鐵槌でたゝいて作り上げた樣なからだで包まれた心とても、涙もあらう、苦しみも感じ樣、それ相應の人生觀も持つて居よう、油煙の昇る小さな洋燈の下に、飾り氣なき妻と、無邪氣な小供とに、取かこまれて有合の海苔を肴の晩酌、それを樂みとして、幾日幾夜を浪の上、日にさらされ雨にうたれ、時には思はぬ暴風雨に逢うて、何十里の沖、友を失ふことも

ある、片破の月中天に懸つて、浪騷がしい夜對島は未だと聞いて、腥い烏賊の生ぼしの餌の中に、ごろりと横になり、うと／＼しつゝ、濟て別れし妻の顏小供の聲、思ひ出して案じる時、板一枚の底は地獄、去年の冬與助がまき込まれたも此海と、ふと胸に浮んでは無事て逢はれるやらと、果敢ない思をするてあらう、ああ彼ゝ同じ五十年の命、再びとは來られまじき浮世を半生は浪の間に漂うて、運わるく底の藻草の間に沈むとても、小さき浦の誰彼の口に上るのみにて、世に朽ちぬ名を殘すと云ふてもなきを、何の樂み何の望みに命まて懸けて働いて居ることやら、今迄に沈んだ人の魂、血潮が、此海邊を取まき、低い磯邊の中なる可憐の者を思うては、此樣に岸に押寄せて來るのではあるまいか、暗愁を帶びた海の色、思うて見れば寂しさにぞつとする、紆元過ぐる風に身振ひして氣が付くと、先の舟は戸の浦へでも廻つたのか見えない、松原まで一寸散歩にと云うて、家を出た私は、知らず／＼此處まで來た、母樣や弟がどんなに案じて居られ樣、もう歸らう、碎けて美しい小さな汀の波に、足を洗つて紅緒の草履を突掛けた、來る時に持つて居た團扇は何處へ行つたやら、三階山からのぞいた月の光を、脊に負うてとぼ／＼と、足は夕露のてんもりと立罩めた松原道へ、暗い鶴島邊の海を見返り勝に辿るのである。

（評）船唄に沈痛なる多し、よく人を愁ぜしむ。

○秋趣

三重縣　長井漣月子

○悲しみの秋は、深けれど、ほゝ笑みの黄菊白菊に、日はあたゝかう、秋の雲、白う動きつ。

○田守る翁の庭靜かに、黄菊咲きて、空は晴れぬ。再び輕き羽動して、胡蝶は花に止まりぬ、南椽に寐たる小猫の、つと起きて、蝶の影に戯る樣の、いとおかしう、煙草火ポンと、掌にはたきて、廣々と田を眺むる老翁が笑みの、長閑なる哉。

○波おだやかに、風ゆるう、晝の月中天に、白うかゝりて、布團干す大船の、あなたこなたに、浮びつ。砂濱に、子供等の寄り集ひて、一枚の貝を、爭ひ居れる樣の、なか／＼に、可愛ゆき哉。

○紅葉色濃き、小庭淋しう、南天の實赤う、色づきぬ眼鏡越しに、掛物見る老翁のひげ白くして、床には、香の烟り、紫にゆるう、立ち登る。

○庵の秋は、さても寂しき哉。

朱ぬりあせし、山門の扉には、相合傘の書かれて、と
うがらし蜻蛉の一つ止まりぬ、口に何言をか唱しつゝ
托鉢よりかへり來る、僧の、さても老いたる哉。
山門の秋は、靜かに、銀杏の葉、一つ落ちて、老僧の
肩かすむる樣のいと、淋しき哉。

○

葉びさし、いたう朽ちて、
庭に紫苑の花美しき、山家
の晝を、姉なる人の、妹の
髪結ひ居りぬ。
藪にさゝ鳴く、目白の聲面
白う、南椽に日は、さし入
りつ、鏡に向ひて、髪の出
來を、喜ぶ乙女の、繪に似
たるも、面白き哉。
（評）秋は細やかに美し。

○雨の霽れ間

小石川　奈美木翠

一頻りドット降ッた雨がバッタリ、忘れたやうに歇ん
で、月が東隣の境の樫の木を二三尺離れた所に雲から
ヒヨイと出た。葡萄棚の露がキラ／＼紫に光つてポタ
リ／＼と地に落ちると濕ッぽい夜氣が涼しすぎる程襟



人力車　豊橋　白井津奈子

元を吹いて漫ろに秋をしらしめる。
秋海棠の邊りから忙しくこほろぎが啼き出すと、漸う
咲きかゝッた萩の根方で之れも負けずに草ひばりが聲
を震はしてゐる。松の枝や葡萄棚やら幼い梅の木から
バラ／＼と露が翻れたと思ふとヒヤリと風が來て
風鈴を冷たく搖すッて過ぎ
た。バサリ音がしたので、薄
く差したお座敷からの明りに
透して見ると、重り合た蕗の
葉の下からでも出たのであら
う、蟇が捨て損なッた竹の皮
の上に泰然と構へてゐる、暫
く身動もしずジットしてゐた
が、虫でもとッたのかヒヨイ
と二三寸飛上ッて竹の皮を向
ふへずッた、又暫くの間濟し
込んでゐたが聽てノソリ／＼と地も見えない程はびこ
ッた茗荷の中に隱れて仕舞ッた。
と、垣根際の井戸端で若い男と女の聲がして「雨に逢
ッたてせう、如何なすッて？」「なアに少しッきゃ降
りアしない」「そう、此所は大層降ッたワ」聽て小刻み

に下駄の音がお長屋の軒下に遠ざかると、流て手拭を濯ぐ音がして汗を拭ふのであらう「ア、凉しい」と男の聲である。……ザブリ水を覆して之れも行ッて仕舞ふと、お長屋で強く灰吹を叩く音がして、ドッと笑聲が起ッたが、それ限り又森として仕舞う、こほろぎが方々から啼き出して風は絶えず風鈴に音ずれてゐる。仰ぐと月は物干の所に移つて雲がスーッと撫て行くのが面白い、星が一つ井戸の鳥居の上に遠くて光つて、垣根にスヰッチヨが啼いてゐる。

（評）描寫微に入り細に入る。

○おさらへ

大阪　滿壽美

今は菊江樣の茶音頭　曲は漸くすゝみて「ふくささばけぬ心から」のあたり美しき聲にて唄ひたまふ、この次は私の番、もうお化粧も濟みお着換も終りたれば氣を落ちつかせる爲に獨りてそつと脱けて來たこのお椽、柱にもたれて折柄のおぼろ夜風もなきにヒラ〳〵と散る櫻花を袖にうけとめつ。

どうぞ彼の合の手がうまく行けばよいが、コロリンッンテレ、ンの所は何時もお師匠樣が早いと仰すれば今日は思ひ切つてゆつくり彈かずばならじ、もし間違てもしたらば何とせむ自分では充分確かなつもりなれどこのやうな多勢の人の前では始めてなれば氣がのぼつて指が滑らぬとも限らじ、どうぞ能く彈けます樣お師匠樣はじめ皆樣に褒められますやうと、そつと手を合せて何所ともなく拜む眞似すれば後より、お孃樣もう間が御座りませぬお越し遊しませと小間使の里、言葉もなくついて行けば控室には母樣、さお湯をお呑み、と有仰つてお手づから錦手の湯呑みに白湯をたまはる、靜かに落ちつきて一口頂きサア。と私が立ち上れば、お待ち。と母樣のおこゑに心得て乳母やが眉はけ手にいざり寄つて顏をなほし口紅もさし添えて、さて、帶にも手を觸つて見袖を揃えて、よくお彈き遊せや。と、まるで戰場にてもやるやうに言ふを可笑しく、大丈夫よ。と微笑めば、急いではなりませんよ。と母樣迄仰す。

いざと乳母やに手を引かれ舞臺の方に行く、燃ゆるが如き緋の毛氈しきつめて後には金屏風立てめぐらされ銀燭の光りユラ〳〵と映えてまばゆきばかり、据えられしは私が秘藏の蒔繪の琴、梅のほり物の匂ひに入れしダイヤの今宵は殊に輝きて見ゆ、紅白の本飾り花やかに前には友仙ちりめんの座ぶとん置かれたり。

お師匠樣は早や黑のお召に白のゑりいくつも重ねて威儀を正して座につき居たまふ。

甲斐なくも胸の動悸はいたく烈しくなりて、何とは知

らず羞しさ恐ろしさに我をおぼえぬまで、思はずもたじろぎて乳母やによりかゝるを、しつかり遊さなければいけませんと勵まされ斯くてはとて漸うに琴の前、藤色ちりめんの振袖に赤地朱珍の帶立矢にむすび、稚兒髷にゆひし頭重うそと下ぐれば胸に挾みしはこせこの鎖、微に妙なる音して鳴る。傍に置きし錦の袋より爪取りいだし指にはめお師匠樣はと見返れば、早や尺八取り上げて見えたまはぬ目にも心せよとの御いろさやかに拜せらる。

聽衆は水を打ちたるごとく寂として人なきやう聊かの音をも聞きのがすまじと片唾を呑めるさまに、ふと私は誇りのいろの面に浮ぶを禁ぜられざりき。

いざ、と身を構ふればサラサラ〳〵と、前の御簾上りぬ。

彈き出すやそれ花爛漫の春の曲。

（評）御母さんや乳母さんの方が餘計氣をもんで居られる。



麻布　染田ちか子

○秋

信濃　花園守

秋は、未だ淺けれど、叢にすだく虫の聲々の皆とりどりにやさしう、物哀れなるに、折からの眺めもさこそとそゞろ心に偲ばれて、一人、小暗き四疊半にのみたれ籠めてあらんよりはと、そと、庭下駄突掛けて微風に浴衣の裾輕う弄らせつゝ、なよ〳〵と亂れかゝる柳のみぐし麗しき、瀬戸の小川の畔りにと憧がれ出でぬ。

チヨロ〳〵と流るゝ水の音！颯々と渡る風の松の梢に殘る呀き！相合しては、柩の前に肅然と威儀を正せる聖僧の、白き御衣に燈火ゆれて、導きの誦文かすかに斷—續—するかの如き、寂しく、嚴かなる、我が秋の讃美の賦を奏づるとしもぞ聞きなさるれ。月は出でぬ。

今宵十三夜の、隈無く磨き上げたる白金の玉は、今し

も彼の山の背より浮び出でぬ。

彼處に此處に、幾叢繁る白萩紅萩が縋る露に、首重しとうなだるれば、月は、そが露の白玉の一つ〳〵に宿かりて、さながら御空の星の此處にこぼれて頰笑むかとばかり、實に床かしうも懷かしと見ぬ。

長きを誇る柳の御髮を、いやが上にも飾る瓔珞の、折からの風に、ゆら〳〵と波打ちて、ほとりッ、と落つる一雫さい、名殘り惜しき光君、源氏螢のいづこよりかまぎれ來にけんと、限りなう哀れに覺へて、そと塵はらひて袂に受けつ！袂には秋の香滿ちぬ。

色濃き、御空の露の滴りて、此處に結べるぼうし花、しぼりて姉の浴衣染めたや、ゆかり色、おく露さい紫に匂ひて。

月の光りを無言の呼きときゝて、嫣然目醒めしまがきの瘠菊、くねりつゝも時を得顔に仄かに馨るしたり顔を、折からの風の送る香りに、それと知りてか、夕べの野路を、急ぐ馬子が手に摘まれて、しばしは接吻の暖かき、やさしの夢に耽けりしが——やがて、無慘、片々にちぎられて……哀れ逝く水の背にくづをれて泣くなりき。妾はあまりの哀れさに、あまりのいとしさに、そと手にむすべば、優しや、香りはなほわが手にもあふれて……。

虫の音を踏みて、露にぬれて、月をあびて、自然の樂に送られて、かくて歸る夕べの柴戸、ふとわれにかへれば、草叢には又も虫の音一しきり。ひるがへる袖や裳に纏きやすると、そゞろ心もとなくて立ちどまりぬ、あれ弟の笛の聲、小田には妻よぶ蛙の聲も。

（評）秋の美しさ殆ど盡く。

○お掃除

下谷　赤堀　久

臺處に出て見ると女中は最うブー〳〵火を吹いてゐる折角早起きしたのだからお手傳ひしようと寢まきの上に被布をはおつて草箒を持つたまゝ裏に出た。我家の槿垣と向きあつた御寺の生垣の樫の落葉がせまい道巾をすつかり埋づめてゐる。短かい箒の柄を右の手に、少し屈んで、枯れきつた落葉をがさ〳〵掃き始めたやつと一とところに積み上ると意地の惡い風が吹いて來てパッとまき散らしてしまふ。また掃きなほして塵箱にすてゝホッと腰をのす其時。お寺の中でゴッ〳〵と足音。思はずギョッとして箒を小だてにとつたが、見ると瘦た赤犬が何か啣へたまゝ腹ばつて垣を潜らうとあせつている。シッ〳〵と箒で地を叩きつけるとびつくりして一目散に逃げ出した。右側がお寺の生垣、左は丸茂病院の黑板塀の、細い一本道で谷中の通りまで見える赤犬は病院の邊へ行くと何を見たのか又急にかけ出した。と、その横手から逞しい黑犬がとび出してあとを追かける。むかうの曲り角のポストの所でどうと

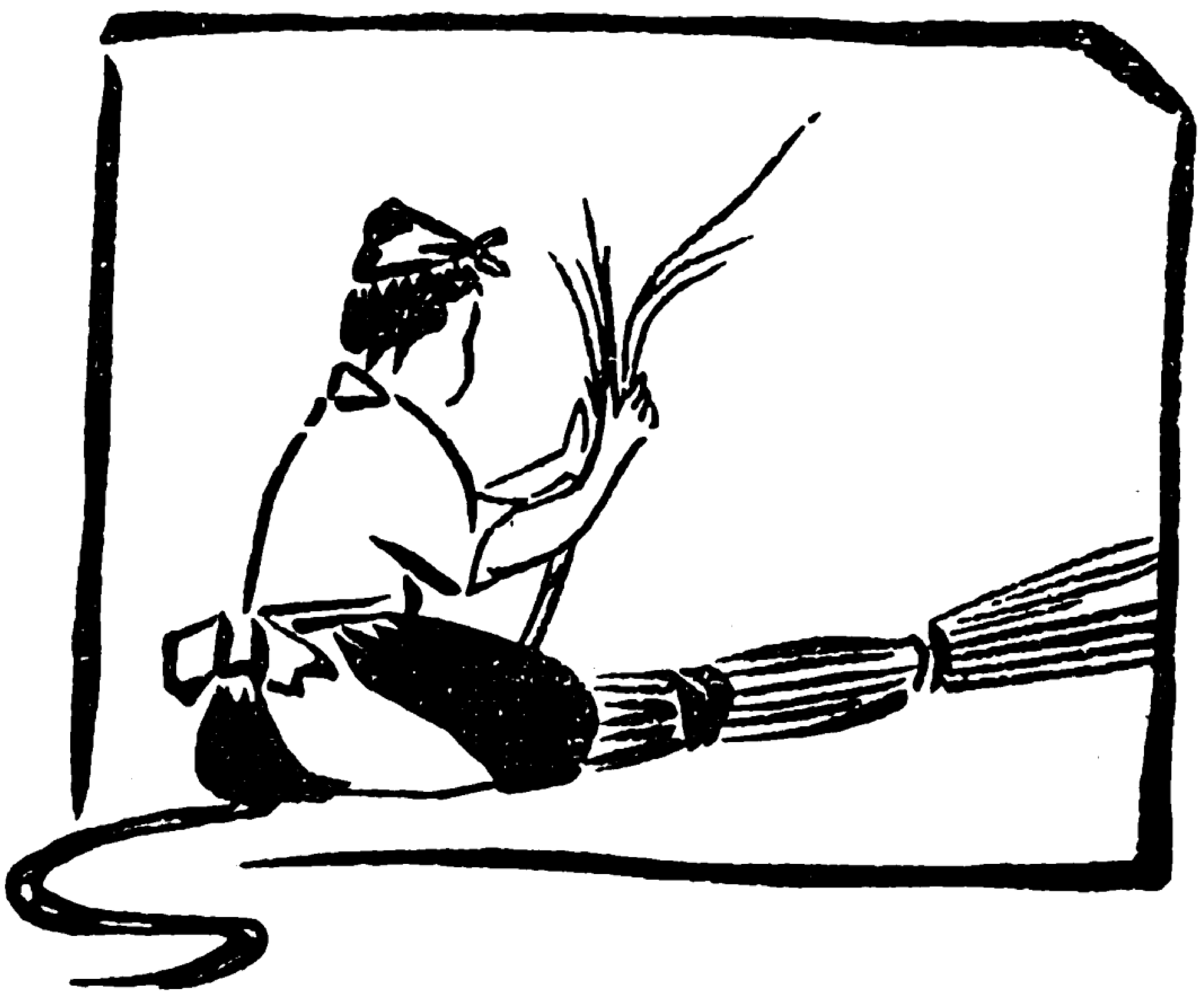
う追ついていきなりとびかゝつた。赤と黒と上になり下になり翻筋斗くんでいたが丁度そこに牛乳の兄いがひよつくり出て來て、コン畜生と云ふ風に足を蹴あげる。二疋とも面くらつて逃げてしまつた。

○にイの字を大きく染め拔いた其後姿がやゝ前のめりの早足でいつてしまふ。とひきちがひに黑の衣をきた坊さんが二人、まあるい頭をつるりつるりなでながら病院の角を曲つていつたそのあとからいつもの男の氣狂ひが髮をバラ〳〵にしてこの寒いのにドロ〳〵の、破ぶれたのをひつかけ、頻りにキヨロ〳〵見廻しながら轉びさうな足取りでやつて來る。こつちに來るのではないかしらとときづかつたがやつぱり病院の横町へはいつていつた。

通りの家はまだどこも雨戸が締つて其邊りの空には樺色の横雲が二條三條たなびいてゐる。

ぼんやり見つめてゐると頭の上にバサ〳〵と羽ばたきがしてあをう〳〵と啼く烏の聲。今掃いた許しのところにどんぐりの實がバラ〳〵落ちて來た。

（評）よくまはる筆なり。



縄なひ　山形縣　鈴木杉栄女

○雲

駿河　深尾けん子

四季折々、時の間に形變じ、色うつりゆく雲こそ奇しきものなれ。暁の金色の雲、しののめの空をかざれるさへあるに、やがてのぼる朝日に、かゞやきまさりたる、譬ふるものもなく貴し。

夕ばえ雲の、赤くあかく山の端にうつりたるも面白きに、紫に灰色にうつりゆき、次第に黒う、やがて四方と共に夜の幕に包まれをはるは、いとさびしきもの、果しなき冥想に耽けるは、かゝる時ぞ究竟なる。

高く澄みたる秋の空に、白き雲の一ひら浮かび出てたる、冬がれの淋しき色に、ちぎれ雲の、うすくはきたらん樣なるも面白けれ。さては、春の、紅おびてあたゝかき雲の色よ、希望に滿てる、若き子を慰はる佐保姫のあはきいぶきのこもるらんか！

夕立雲こそすさまじきものなれ。南の空の一隅におこ

ると見るまに、悪魔の如き黒き手は、忽ち四方八方にひろごりて、天に漲る暗鬼の巨躰！　あゝ恐ろしき雲の色や。げに、心地よく、たふとく、美しく、やさしく、淋しく、恐ろしく、奇しきは雲なりけり。

（評）　脈絡も雲を研究せり潮言か長語にありたり。

○柳下の夢　　あや子

夜はいとう更けぬらし、寂として犬の遠吼え幽かに四隣の靜を破り、月は書齋の椽を照して明かく、草間にすだく虫の音絶え〳〵なるなど、えも云はれぬ景色に心たゞならず、例の柳の元にそゞろありきせばやと立ち出でゝ裏の折戸をと開けて池の廻り、池水に掩ひ懸りたる、柳の元のベンチに、やをら腰を下しぬ、今しも月は皓々と一際澄み渡り、拭へる空は瑠璃の如く遠き彼方の山々迄、見透かれて、稲田に戦ぐ水の音さらさらと響も淋し、折ふし颯と吹く風の身に染みて、秋立つけふを今更の樣に覺えつ、見上ぐる柳の垂れ枝脊き腹を掛けし樣、透間洩る月影水に動くも面白し妾は復た　此の木の奇しき履歴を、くりかへし初めぬ此の柳はいと〳〵古き樹にして、維新の前此屋敷に住みなせし、武家ありしが、如何なる故にや、二八の花の乙女の世に優れて匂はしきを、その父手づから斬殺し其屍を此柳の元に埋めしとか、其頃夜な〳〵女の悲しき泣き聲此あたりに響きし由、村中の評判なりしも妾の父上は意に止め給はず、移り住み給ふ　頃日妾はふとした事より、しきりに其秘密知らま欲しく、そゞろありきの折々は立ち寄りて、思ひ起すなりけり。池は月を浮べて、靜かなり萬籟寂寞、かこち顔なる虫の音のみ冴え行く。嗚呼麗はしの乙女は、此地下に屍を埋めしか、此地上の妾と何かの因縁ならむ、忘れ難くも思ひ結ぼるゝ事よ而かも死の原因はいかにと、それからそれへと、思ひ巡らせば、果てしもなう、鬱蒼たる樹下陰々、いつしか妾の身体は痲痺せしが如く、動かさんとすれども、動かずなりぬ、暫して僅かに目を開きしに、あな不思議美しき少女は立てり、色くつきりと白く、露を含める愛らしの目、なんもりと高き鼻、緑の黒髪文金に結び鴇色の衣に、立て矢の字の帶、其姿の氣高さ、丹花の唇は徐ろに開きぬ、花の命の短かきを、かこつ世の人の定命、明日をも知らず、我が滿腔清き愛に、散りぬる花のなど惜しき事ある、とあたりに響く鈴の如き聲は妾の耳を貫きぬ、妾は唯恍惚、其の姿をのみ見入りつ、なまぬるき風の吹くよと、見ればあな無慘美しき少女の首筋より、だら〳〵と流るゝ血しほ、白き玉のかんばせ、麗はしき姿は見るが内に紅ひに染み渡りぬ、恐しと、をのゝく妾の首筋にも流れかゝりて、あつと驚くとたんに、目醒れば、之れなん柳下一睡の夢なりけり、醒めし後も、夢か現か定かならず、日頃抱ける疑問の糸口解け初めし樣、また一際の哀しき淵に沈みし樣、歩むも知らず、彷ひふけりて、妾の部屋に入りぬふと見上ぐればなほ高し秋の夜の月。

○火事　　大阪　さつき女史

曉告ぐる鐘の音かすかに耳に響く頃東天の曉霧漸く紅ならんとし仰げば蒼空一片の雲もなくあたら此の一刻を寢中に過さんも本意なくて隴畝の間草脊き小徑のわたりさまよへば玉をあざむく草葉に宿れる白露は日光を得て實に美はし日は早や東天に高くして圍める森の緑も深く賤が家より立ち上る炊烟をよそに見て歸途に就きぬ軈て屋並揃へる賤が家の一家屋より怪しの烟立ち上るやいざといふ間もあらせずまたゝくひまに『火事や……『火事や』の狂し氣の身を切る悲愴の聲物凄く遠近にをこり四方より走り集ふ者潮の如く何時もながらに淋しき寒村も俄かに變じて雜閙の巷と化し見る〳〵中に人は山の如く彼方此方より起る亂打の半鐘の音猛りに狂ふ焔は風を得て益々其勢を逞しくし空を焼かんずるばかりに黒烟朦々として空一面を蔽ひぬ集へる人々或はバケツに水を運ぶあり家根に登るあり渦卷く烟の中より道具を運ぶありて人々は右往左往に立ち働けども如何てか此の猛勢に勝ち得べき焔は益々はげしくして消ゆべくも見えざりしが一度爆然たる音の響くや遂に棟落ち屋根頽れ彼方此方よりは天地を劈く叫喚悲鳴起り數名の死傷者を出して此の茅屋も空しく灰塵と消え果てぬ集ひし人々も或は東に西に四分と散して今は唯見舞の人々の三々五々と歩むあるのみ日も早や暮れ果てぬ燒跡は其光景慘然として淡き光の星の二つ三つ空の彼方に閃くのみあはれ燒けにし家の人々は此宵を如何に過すならん。

俳句

巖谷小波先生選評

二等

月あかり瀬戸に米とぐ女哉　日本橋區濱町三ノ一八十七號平井方　三森ゆき

（評）床しき句なる哉。

三等

撞捨ての鐘にちりたる銀杏かな　越後國中頸城郡寺野村　藤原歌子

（評）我は好んで此銀杏を拾はん。

四等

鳴かて飛ぶ夕日の蟲や草紅葉　廣島市播磨屋町重見方　繁子

（評）必しも新しからねど秋趣見るが如く、三誦不飽。

五等

夕雁や野に鉦ならす小順禮　岐阜縣山縣郡谷合村　臼井茂子

（評）秋暮の好詩材、吟誦感增深し。

秀逸

石盤に石筆辷る夜寒かな　水戸市　榊いち子

雲うつる夜明の湖や時鳥　越中　大倉よね子

虫賣て虫なく家にもどりけり　上總　錦織かつ子

村芝居柿なんど食ふ桟敷哉　下總　酒井錦子

ぬばたまの霽雨細し虫の聲　磐城　佐藤まつ子

老松や頭に雪の綿帽子　下野　須藤翠蔭

日盛りや砂にこぼるゝ鳳仙花　伊豆　上原きよし

小春日やよき稚兒遊ぶ嵯峨の道　備前　香甫女史

朝寒の橋畔に友を送りけり　相摸　鍋田静子

人訪はぬ敦盛塚や萩の花　神戸　加藤不美子

掃きかけた箒の先や秋の風　茨城　村野静枝

妹の人形だいて晝寐かな　新潟縣　山田たか子

紫の葡萄の房に夕日哉　兵庫縣　中島入重子

松が枝を月は障子にゑがきけり　羽前　巻坂信子

十二橋柳動かぬ月夜かな　上總　ひさ子

御料理の文字細長し木槿垣　津市　葉山さき

藍の花與作が前の茶園畑　美濃　あけぼの女

朝寒に馴れて冷水摩擦かな　伊勢　常磐木花子

明月に遊子老いたる母思ふ　宮城縣　千葉みどり

水亭や風冷々と蓮かをる　福岡　よし子

病む母の看護の窓や秋の風　神田　鶴岡とく子

きりぎりす鳴くや嵯峨野の晝の月　磐城　村岡瑞津子

古塚のあたり淋しや虫の聲　能登　泉薫子

城跡の晝靜かなり蕎麥の花　美濃　碓井房枝

夜寒さや小猫啼き寄る膝の上　高知市　高橋龜壽

山越せば廣野なりけり草紅葉　徳島縣　吉田松陰

竹椽に響く夕立つ景色かな　大阪　鷲谷百谷子

行軍の馬いなゝくや秋高し　磐城　鈴木勝子

琵琶僧を御宴に召しぬ秋の月　津　川村なみ子

接待によき女あり秋の宴　美濃　早川けん子

葛の花散るや鳴子をひく人に　奈良縣　中富よしみ

虫干に六つの時の清書かな　千葉縣　川崎だい

秋雨や詩集繙く利久窓　常陸　白菊

稻妻や山の下なる一軒家　美濃　臼井安子
夕立はれて木魚近くに聞えけり　紀伊　室井白蓉子
御堂荒れて守る人なき芒かな　駿河　清水露江子
へちまさがる窓に月みる霧なか　上毛　磯貝末子
涼き／＼花野の末の御寺かな　千葉縣　酒井錦江女
鈴蟲やはしゐして聞く京美人　伊勢　桑津惠
夏帽や歩き初めたる隣の兒　新潟縣　早津春子
鐘や夕米搗く寺男　和泉　はな
ない袖を振つて見せたる尾花かな　茨城縣　杉山芳子
蚊遣火の杉垣もるゝ山家かな　澁谷村　吉田琴子
草の實や露に明けゆく一茶庵　水戸　島田君子
蝶となりゝ夢見てさめぬ春の宵　奈良縣　芳野浪子
國境を越えて他國の花野かな　高岡市　芳賀喜美代
白菊の中よりあける黄菊かな　安房　岩崎つゆ子
蟲の鳴く中に宵柴の野守かな　尾張　渡邊孝子
落る日に鳴きせまりけり秋の蟬　能登　南島翠浪
夕嵐葡萄の房をゆすりけり　三重縣　長井漣月子
鯉游ぐ水に散りけり萩の花　羽後　高橋柳子
玉川に秋を流すやこぼれ萩　靜岡縣　太田みつ子
朱雀路や牛車れり行く春の宵　駿河　深尾けん子
名月や田から田に引く水の音　福井縣　村霞季子
菊咲や椽に据え置く硯箱　石川縣　水原蓮舟
菊畑に霜よけするや古りの傘　茨城縣　石川久子
藻の花や沼寂として蝦はねる　山形縣　松山瑞枝
我家の見へて峠の夕立かな　紀伊　愛須蝶子
雲の峯櫻門高き宮居かな　羽後　布衣子
振袖な螢に引かるゝ汐干かな　千葉縣　鈴木梅子
山雀の囀にみとれし小春哉　神田　鶴岡とく子
山寺に来つく秋の月夜かな　奈良縣　清水露軒
對岸の灯はほの暗し聲虫　伊勢　はつえ
菊の根にやるや硯のあまり水　信濃　横川蕗枝

蜻蛉とぶ眞葛ヶ原の斜日哉　堺市　中川かう子
亂れうつ砧の音や宵月夜　紀伊　秀子
佛描く繪の具解かばや蓮の露　熊本　富野かず子
大和路や紀の山かけて子規　下谷區　櫻花子
秋晴や舟に吳の人越の人　神田　鶴岡とく子
稻妻や水葬すみし浪の上　大阪市　生田みのり女
出水して人さわぐ夜や稻妻す　高岡市　北本歌子
稻妻や丘をかけゆく裸馬　備中　實森定子
稻妻や闇に枯れ立つ天狗杉　茨城縣　榊はる子
稻妻や消へて不動の目の光る　尾張　永草謹子
風蕭々易水寒し秋の暮　奈良縣　中島みさを
尾花咲く野邊や古墳の物語り　下谷　幸枝子
明月や瓦冷たく露光る　神田　西山なか子
繪馬堂に燕の集まる時雨かな　靜岡縣　加藤だい
汲あぐる釣瓶に赤き落葉かな　佐世保　淺田淡花
初霜や雞ちらすごみ捨場　備中　大西好子
低うとぶからす枯野に時雨けり　三重縣　長井漣月子
押分けて茶水吸む井や萩の花　千葉　開哉女
月出てゝ行燈の直る端居かな　紀伊　尾上子
行水の盥に散るや柿の花　越後　瀧澤みつ子
花薄小狐踊る月夜かな　茨城縣　柳澤こう子
こぼす月汲む月涼し水車　下野　靜江女史
盆踊辻の地藏を圍みけり　伊賀　山村すみれ
游泳する小僧大工の暇かな　中野町　小川鶴子
かりそめにさして年經る柳かな　深川　野村としな
髮ゆうて涼しう向ふ鏡かな　駿河　岩崎てつ子
夏木立瀧の不動の灯かな　美濃　菅蘭子
蟬のなく一樹の陰に午睡哉　大和　久保登子
夏の月淺瀨を渡る脛白し　横濱　河久澤雨村
後朝の垣に亂れて萩の花　龜岡町　伊東菊枝
徳多き師の俤や白牡丹　駿河　寶雷

文學士沼波瓊音先生選評

四等

○奉公先の弟へ

大阪市南區内安堂寺町三丁目三番邸　渡邊みね

拜啓追々と凉しく凌ぎよき頃と相成候處、御許様には御無事の由嬉しく存じ居り候、されど酷暑の時は誰しも養生すれど秋の初めになれば、心を許し易く又夏を越えし大病人も死する事多しとか申候故、呉々も御氣を、お附け遊ばされたく候、言はずも萬々御承知なれど御主人には厚く御仕へ申し、夜學校へ參らせて頂く時は、一心に勉强してことに算盤は商人の最も大切なる物に候へば熱心に御勵みなさるべく候、いつも云ふことに候へど御許様には、吃りの習慣あれば何卒御改め下されたく、先日の御文にては御主人のお使ひ先の御門迄行くと其口上が出なく成り、二三遍も其近所を歩きながら、繰返し漸々のことで其御内へ入るとか、誠に同情の涙にくれ申候、然しては、御許様の御心得一つなれば、物事は急がずに、ゆつくりと言ふ様に心懸け渡邊家の次男として恥かしからぬ様に御改め下されたく候、御許様に限り御主人の物などに、手をかくるが如きことなどは、夢にも無之きは承知ながら、かくの様な事を言ふも弟を思ふ姉の老婆心よりと御許し下され度何卒朋輩の氣に逆はぬやう新參なれば、何につけひかえ目になされ憎まれぬ様にせられ度候、今日葡萄一箱御送り致し候間上は元より、御朋輩にも御分配遊ばされたく候。かしこ。

（評）弟を思ふ姉の情よくあらはれたるが嬉しうて。

五等

○野分のあした

香川縣　茂留女

さりげなき朝の空のにくさよ夜半ばかりおどろ〳〵しき音に夢さまされて枕もたげつゝ聞けば木の枝の折るゝ樣なるさては雨戸烈しくうちたゝく恐ろしさに野分と心づきては箱庭のやうなる園の上すら心もとなくておほふばかりの袖もがなとおぼえ候つとめておりたてばかつ〳〵咲殘りたる朝顔のやれ垣つくろひがほなりし蔓の糸もきれてさながら倒れ伏しつゝやう〳〵さきたる二つ三つの花ももの悲しげには此頃盛りの芙蓉ことさらあはれに眺

めしものをあたらしうも吹き折られ思はず涙こぼれ候ましてひろらかなる御園は一しほあさましき名殘をとどめたることゝ思ひまゐらするにも忘れがたきかの糸萩のきのふけふ盛なるべしなど思ひわたり候はいかに。御手洗ひ鉢のあたりの秋海棠それもはかなくおほどれふしたる事と存じ候とにもかくにも野らのやうに吹きあらされし悲みほかに分つべき方もなければ同じ心におはしますらむとかつは御有樣も承らまほしうて一こときこえ上げまゐらせ候かしこ。

(評)　古雅。

秀逸

○故郷の姉上へ

福井縣　零れ萩

蟋蟀の聲やう〳〵に繁き折柄、軒の伊豫簾もるゝ秋風の、いと心淋しく覺え候昨日今日、故里の野邊も桔梗女郎花のいかに美しき花をや迎へけむ。七日附のお文ならびに爲替金五圓たしかに落手、姉上樣にはいつもながらの御壯健、何より嬉しく存じ候さるにてもかよわき機織の御身にてありながら、今日の生計より斯かる大金を送りくだされ、何とも御禮の申し樣も無く、只々有難くとのみ思ひ參らせ候。されば私もあらんかぎりは質素儉約を守りて、學びの道ならでは空しく費ひ候まじ。思へば幼き時より、亡き母上に代りて、姉上がみ手一つに何から何までの御世話、噫我家の零落し今日、互に遠く離れて、東の都や西の里に苦痛辛酸を忍ぶ境遇にてありながら、尚世に姉上をのみ煩はすは實に殘念に堪えず心苦しく候。

あゝ、定め難きは浮世にて候、それより十とせの昔は春の海の如き樂しき一家團欒に美しき夢を描きつゝ、世の荒波も知らばこそ只靜かなる御代に尾上の松の深き緑のそれと變らぬ我家ぞとうたひて、永劫につきせぬ泉汲まむと思ほへしが、恨みや奧山に色濃かりし紅葉のやがては襲ひ來る雨や風に堪えて、落葉の儚き夢の幾夜つもり積りては、いつしかにながれを堰き止められて、枯れ果てし水のいづこに求むるによしなければとて、さなきだに寂しかりし夕を、散り行く花と倶に惜しき袂を別ち、心強くも姉上をふり捨てゝ遊學の途に上りし此身、あな赦し給へよ姉上樣、日夜古郷の草廬に辛き思をしのばれて、賤しき機織の業も我れが爲めかと思へば勿體なや難有や、などわれは斯くも不孝の身となり果て候ひけむ、あゝ再び戀しき故郷に戻りて、懷しき姉上が爲め慰藉の子となり終らんか。吁、されど〳〵、現在の悲は將來の悦を孕める兆に候へば、他日名遂げ功成りし曉には斯かる今日の有樣を

思ひ浮べて打ち笑ふ折も候ふべし、されば私も益々勉め勵みてあくまで世難に打ち勝ち、必ず〳〵錦かざりて立ちもどる決心に有之候間、何卒今暫く御心長く持ちくだされ度く、呉れ〳〵も祈りまゐらせ候かしこ。

（評）姉上もさぞ滿足に思召されん。

○音樂會の摸樣

麻布　みさ子

昨夜は御來客の由にて御出てなく、たのしさ、面白さにつけ、御噂申し居り口惜しう存じ候ひき。されば、せめて面影のたゞかたはしのみなりとも聞え上ぐべくかくは筆とり申し候。

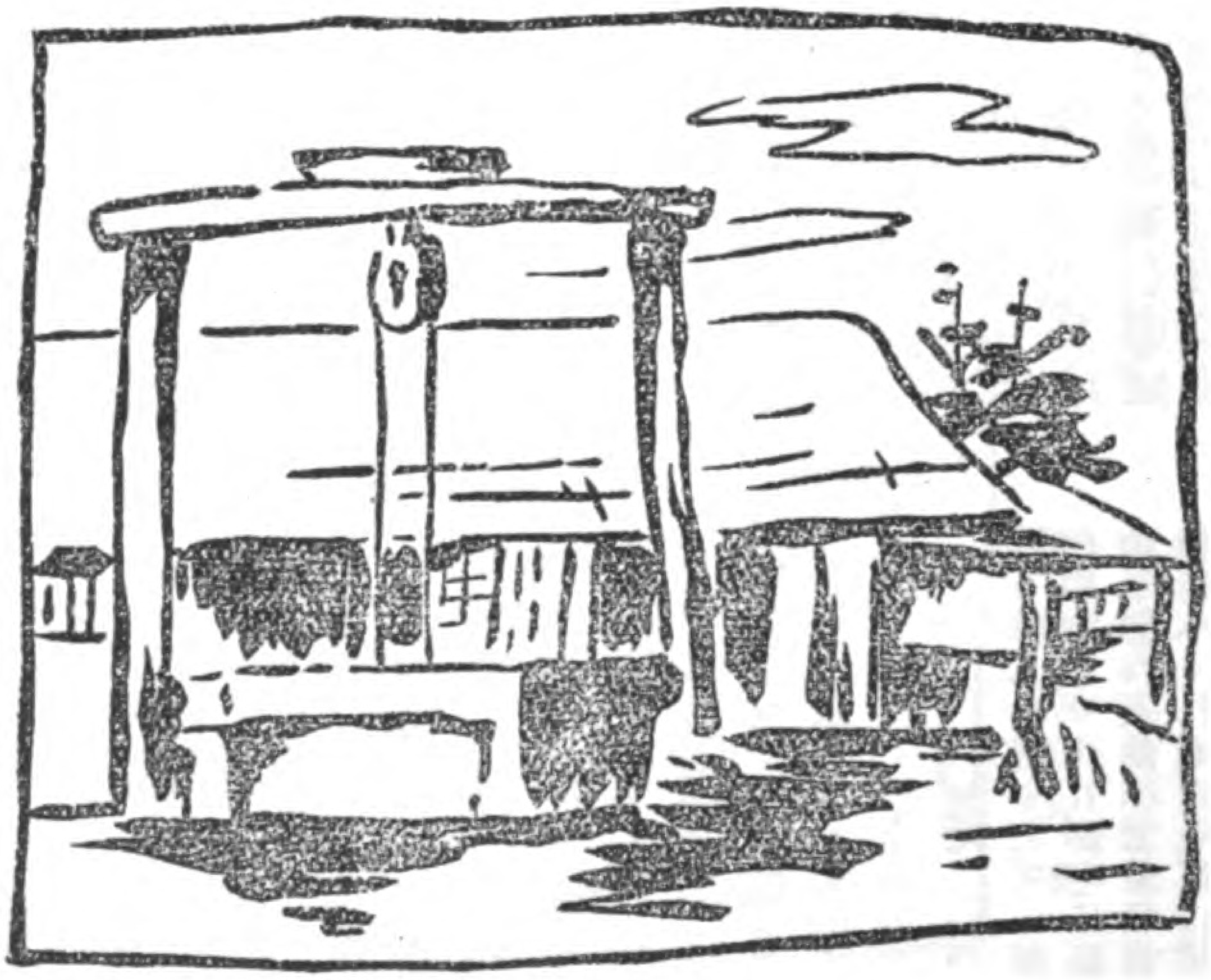
さて堂内は、立錐の餘地なきばかりの盛會なりしが、少しの騷ぎもなく、さすがに、人々の品格も窺はれてうれしう存じ候。

正面には美しく裝飾をほどこされ、兩側には七草の、いとゆかしくさゝれたるを見、心も靜になりゆく折から、やがて別紙番附の通り順次に奏されしが一絲一弦心も澄み渡りて進むに從ひ、いよ〳〵興わきいて、日頃御許様の深く好ませ給ふ、琵琶などに至りては、若き人などたゞわけもなう狂するばかりにほめたゝへ申し候。西洋音樂、また歌は、少しく心ある人にはいと滿足に見受けられ候、されど老人などは、やはり、日本音樂の方好ましき樣子にて、長唄、踊等には拍手雷の如くにて候ひき。又、遠くヒリッピンより來れる若き人々の歌、合奏などの御座候ひしも、いまだ耳なれざるに、異樣に聞え候も彼人々の熱心顏色に表はれ居りて、聽衆に深き感を與へ申し候。

喝采のうちに終れば、しばし茫然と致し今更殘りをしき心地せられ、ありしおもしろさを考へつゝ家路につき申し候。くはしくは、御目もじの上にと、右あらあら申しのべ候。

（評）よく要を摘みたり。

秋の空　東京　とき子



○遠足

本郷　秋の花

み空は高くすみわたり七草をはじめ千草は美くしく秋

を彩りて咲き亂るゝ今日此頃をたれこめてのみ此まゝに過ぎなむも、いと惜しき心地せられ候へば、思ふどち打ちむれて、かねての郊外遠足を催さむと思立ち候まゝ、御許樣も御越しはいかゞに候や。今更ならねど實に郊外のあそびは心をなぐさめ身を健やかにするのみならず、歌よみ文かくたすけともなりて樂しき事ならんと存じ御誘ひ申上候。みちづれは例の心おきなき節子樣等の友がきのみなれば、明後日の午前よりこのむれに加はり給はずや。よろずは御來否御もらしの上にと。御返事待ちたてまつる。かしこ。

（評）やさし。

○故郷の親友に

芝區　紫雲子

今宵月の下のいとつれ〴〵なるまゝに御懷しさのあまり一筆示し上〻〻。さて其の後は絶えて御無沙汰に打過ぎ居り候ところ御許樣には如何御暮し遊ばされ候やさだめしいつも御すこやかに渡らせられ候ことゝかげながら御喜び申上候。さてとや承まはり候へば先日は同窓會有之候由其の節は皆々樣御機嫌よく御揃ひ遊ばされ久し振りにて積る話しの數々もまた御得意の餘興もさぞかし御愉快に終らせられ候ことゝ只々御羨やましふ存じ候。あはれ夜毎日毎に慕しき故郷の空をめ眺てはそゞろにありし昔の忍ばれて中々に涙に袖のかわくひまも御座なく候。まことや世は萍草の浮なりとは常に承はり候へどもなどて斯迄もつれなき浮世にて候ものかな。懷しき父母君はともにこの世を去られ僅に殘る家財は皆人手に渡されたよる兄弟もなく戀しの兩親もなき姿は今この片山里のほとりに僅に伯母をたよりに薄命を保ち居り候。これも皆浮世の定とは存じ候へども何の因にてかく迄も果敢なき運命に泣くことにて候ものかあはれさをなき捨小舟いつの世にかは樂しき彼方の岸にこぎ着くことにて候にや。さらば豈さぬ名殘りは濱の眞砂の數より多きもあまり長々しく相成り候へば先はこれにてとめ申す可く筆の亂は心の亂とともにまことに御覽遊ばされにくゝ候とも何卒御許し下され度せめては熱き君が涙の一雫なりとも給はゞ嬉しくさらば君よ故園の秋の眺めはいかに。

（評）紙の持ち樣にて隨分世の中には樂しく暮せるものなり

○傳言

周防　滿榮子

取りきはしり書きして一筆申上候さて先程用事これあり秋月氏へまゐり候節同家より先日御宅に願ひ置き候仕立物明後日用ひ度候につき御急がせ申し恐れ入候へどもなるべく早く御仕立明日夕刻までに御遣し下され候樣傳へくれよとの事に候間早速まゐりて此事申上べしと存じ候處遠方より來客これあり私の歸宅を待ち受け居りしに付き失禮ながら手紙にて御傳言のおもむき御知らせ申上候先づは右用事のみかしこ。

○故郷の母上へ

熊本市　六花

其後は兎角學びの道に追はれがちにて心ならずも御無音申上候折柄ゆく

りなくも御病氣の御報知に接し實に〳〵驚き申候。吁御老體の御いたつき如何許り御心細くも又御不自由におはしますらんかと遙かに推し參りては身も世もあらぬ思ひに胸は裂けなん程に候へ共さすらいの身の如何にせん。御膝下に侍りて御藥一つ捧げ能はぬ今日の境遇只々心のみ御膝下に馳せ申すのみにて候さりながら只暑さの御障りとのみにて殊に妹の寢食を忘れて御孝養申上とやらにていさゝかは心を安め申し候。妹も御膝下を離れまゐりしより早や二年一日も早く業終へて萬分一の御高恩にむくひまつらんと日に夜をつひて勉强致居候。必々一年の後には錦衣て御拜顔申すべく候。申迄も御座なく候へ共呉々も御身御大切に一日も早く御全快遊ばされん日を神かけ祈上申候。

お客様　　大阪　越尾とみ子

○入學中の妹へ遣す

兵庫縣　ふじ子

春もいよ〳〵深みどり紫にほふ藤ばかま櫻花も最早名殘りなしきおりから嬉しき御玉章取る手おそしと拜し參候先々其許には御變りなく學びの園で尊き師の君に導れつゝある由かげながらよろこび居り候次に宿元皆々無事暮し居り候間御安心なさるべく候。

昨日の御手紙によればその許には此頃は入學當時とて少しも見知らぬ人なるに言葉までも異なり居り候へば只々寄宿舍の窓より汽車電車の走るを見郵便配達人を見ては宿元よりの音信かと思ひ居り候との事聞きて此頃は嘸かし心淋しき事と察し申候御承知の如く女學校は小學校とちがひ學科もよほど多く御座候へば少しも怠りなく層一層と骨折りて一學期には和田校出身者として恥ざるまでの成績にて樂しく夏季休業なさる樣心がけ候はては出身校の先生始め御兩親へ相濟ずと存じ候殊に學則なども變り居り候へばよく〳〵心を用ひ候て萬事上級生に従ひうたがはしき事は尋ね



候へ。其許はかよはき身なればよく運動もなす樣心がけ候へ遠く東西に別れては一入なつかしく存じ候へば御文拜しいらざる事まで申送り候。勉强中にも運動のみはよく心がけ候へ六月には一日も、早くかへり參らしきお話を聞きたく今より待ち申候かしこ。

○友人に

美作　大土井澄子

御中越の事早速校長に計り候處其樣に全國の名高き學校の〃を集むる所に出してはかへつて物笑の種ともならんか故に何卒あしからず先方へ斷りくれよとの事に候無論御地の學校に比して遜色あるはまぬがれがたき事には候へ共田舍相應に何かと整頓致孫に外ならぬ貴女樣より一生懸命との御頼み故私事も再三再四おしかへし〳〵歎願致し候ひしも校の不名譽になりてはとて御許しこれなく候間誠に〳〵友逸甲斐もなく相すまぬ事に候へ共何卒あしからず御許し下され度候。十五日には御校にて研究教授これあり候とや思へば早き物に候かな教生てふ肩書の下にて貴女樣は尋一我は單級にて乙種特別教授ななしあまたの參觀人に胸とどろかせしは去年の今日にて候ひけり何卒かの折の如否それよりも御立派に遊ばして御身の御名譽引いては母校の名譽我等の名譽をも御揚げ下さるやう遙に遙に祈り上候妾は例の如く快活なる君の御教授振今より豫想せられて猶ほゝ笑禁じ難く候なほ〳〵死むだてもあるまいに久しく無沙汰したとの御とがめ只恐れ入り候實は今年の休暇には母校の講習に參り貴女樣等とともに久々にてなつかしき寄宿舍生活の人たらんと樂しみ居候處生憎父事病氣にて看病にのみ日を送り皆樣に御無音致し候間此度の拙筆にて御詫致す心組に御座候。今や暑中休暇は終候昨年に比して如何に感じ給ふや實になつかしきは三十一名の同胞したはしきは母校にて候

はずや……あゝさはれ君よ子女の愛らしさは附屬もこゝも變らぬ者に候かな、かしこ。

○芙蓉の無心

福井縣　山本久子

ひま行くこまのあがき早くうちわかざして蟄をまれきしも昨日とこそ思ひ侍りしに早そよそよと秋風吹き渡る頃と相成り申候折から御許樣にはいかに御暮らし遊ばされ候や御伺ひ申上候さて父事年老いて此頃はただ手前勝手ばかり申し居り候が先日姉上樣御越の時の御話に御庭の芙蓉澤山咲揃ひ候由仰せられしを承りそれよりはただ芙蓉がほしい〳〵とばかり申しなり候まゝ御無心ながら一二本御わけ下され度御れがひ申し上候此鈴虫は今朝田舍の叔母の許より送りこし候まゝ二三びき御福分致し候花は此使へ御わたしいたゞき度御願ひ申し上候先は御無心迄かしこ。

○友失せしと聞きて

越後　白菊子

かぜの便に承り候へば、たまの樣御こと先つ日おかくれ遊ばされ候由、實に實におどろき入り申候、如何に老少不定とは申せ誘ふ風のあまりに情なく候ことよ、あはれ年わかき御身の高き御のぞみもおはしつらむにかくもはやう失せ給ひし事の如何に殘り惜しうやおぼしつらむと先づこそ涙にむせび入り申候。

共に共に、敬へ草つみてし庭のたのしかりしにつけ、遠く境をへだてし恨みは長うしてかなしさは一入に候ものを、昨日まてみひざもと近う御いつくしみ給ひし御兩親樣はじめ御姉妹樣の御かなしみ如何ばかりと深く深く御察し申上げ候、親しく御目にかかり御悔み申上げ度且つ御靈前にも飛り出て度は山々に候へども、山河遠くへだてし里心まかせぬ節々失禮ながら拙き筆もて御悔み申あげ候。

封じこめしは寸志に候へども御靈前に御供ひ下されたく候かしこ。

○都の友に

下谷　櫻花子

別れたてまつりてより、夏や秋やと行きかひて、はや冬の空となり候を都の御住居、いかに渡らせられ候や、こゝもとには、かた山里の習ひとて、日毎〳〵にすさぶ木枯の、おち葉ふきまく音すさまじきに、ましてあした夕、窓うつ時雨ならでは、おとなふ人もつゆ候はず、みた栄の戸とざしたれば、人すまぬ里めきて、あやしう色も香もなきながめなるにたゞ炭がまのけぶり、峰のましらの聲をのみ、二なき友とたのみて、明かし暮らし居り候。さるをよべより、雪ふりいてゝ今朝なほやまず、荒れたるかき根も、築地のくづれも、玉しき渡し、さては前栽の木々も中島の松も、ひとつ色に六つの花咲きて、やり水の音も埋もれ、池の汀の氷、かゞみと見ゆるもいとうれしく、今日この頃、ひたすら御許のみなつかしう、共にながめ得られ候はゞ、いまひときは、興味も深く候はんになど、おぼしやられ候ひぬるを、君には如何におわしまし候哉、都には、上野すみ田と、名だたる所多く候へば、御こゝろゆく方にものし玉ひて、さぞや御心なぐさめ居られ候はんと存じ上候

○天長節

佐賀　田中要子

待ちに待ちたる天長節も早や間近く相成り申し候、今年は昨年の如くペストも流行致さず候まゝ其にぎはひは一方ならず第一に海兵團にては露西亞の軍艦を作り日本海に於てバルチック艦隊を全めつさせし有樣など實形の如く空彈を以てもよふさるゝ由又其他にもいろいろとかざり物等是あり候、次に市中にては町内毎ににわか、おどり、を出す事にて妾の町内よりは龍宮おどりをもよふされ幅一間半長さ二間半高さ一間以上の高大なる龍宮城出來上り其上にて月光の舞衣ひるがへして天女のおどり是あるはずにて候、妹のよしは其おどりの中に加はり近頃は毎夜けいこに參り居り候其他の町内にても是におとらぬしかけ出來上り申し候由人人の噂にては今年程にぎおふ天長節はあるまじくなどゝ申し居られ候、とかく口や筆にてはつくしがたく候まゝ御祖母樣御同道御見物に御出て下され度く久しぶり妹の手ぎはも御目にかけ度候

○郷里の義父へ

日本橋　坂美輪子

燈火の下親しき候と相成候折から父君樣には御けしき美しう渡らされ候や御伺申上候其後はまことに御無音にのみ打ち過ぎ候段何卒さるかたに御許したまはり度候さてとやいとも嬉はしき御膝下を涙ながらに去りしけ昨日のやう覺え候處嗟世はいつまても春ならずして虫の音しげきけふ此頃と相成てはいとゞ故國の慕ばれて朝な夕な西の空のみあふがれて父

上樣母上樣にはいかにと文よむひまも御身の上の忍ばれて戀しさのいとどまさり候幸に妾事恙もなくてなれぬ旅の空にいよ〳〵文の林の奥極め居候まゝ何卒御こゝろ安う思召たまはり度候あはれ父君樣よ御身すこやかに御待ちたまはり度やがて錦着て郷に歸り及ぶ限りの孝養をなむいたし御二方樣の御心やすめ候はんと存じ候餘は後の便にと申殘し候。

かしこ。

○友の許に

大坂　濱村清子

別にこれと申候用事もなく候まゝ早寐いたし候て隣に伏せし父の鼾の聲もいと高く今し方迄新聞讀み居りし母も眠につきし樣子時計はつい先さに十時を報じ候へ共何やら淋しく孤燈の下に書見致居候處郵夫の一聲に郵便受をさぐれば懷かしき君樣よりの御手紙いつも乍らの御麗筆いと床しく拜しより〳〵仰せの如く苦しき暑さもいつしかすぎ世は秋の時節と相成候貴女樣にも御障なく入らせられ候由何より御目出度存上候日々心にはかゝり乍らもいとなみ事の繁さに思ふに任せず御無音致候だん惡しからず御容赦下され度候折々給はる御玉章を取出しては御言の葉承る心地に候へ共おもかげ見れば何となく物足らぬやうにていとゞ雲井のはるかなる思ひせられかゝる時御うつしゑにてもあらばと存じ居候處御めぐみ下さるとの御手紙いと嬉しく存じ候甘花園の花開けばとてそを見に行くにもあらずひとり庭の破れし垣根の一輪の菊を眺め楓紅葉したればとて窗面には行かで庭の五尺の楓を賞し淋しく暮し居候私どなた樣に限らず御手紙いたゞくが何より嬉しく別けて君樣よりの御便り拜する時は色々と昔の事など思ひ出し無限の感にうたれ申候さやけき月の光をうけて破れし窓の下に悄然とさする時我が思ひのいづれに遊ぶかを御察し下され候はゞ一片可憐の



きび畑　肥後　矢名子

御同情被下いつ迄も御見捨てなく御たより下され度候近頃はこゝかしこに惡しき病流行致候へばずゐ分共に御要心專一に折上參らせ候先は御返しまてかしこ。

○鈴蟲

三重縣　長井蓮月子

今夕湯あみも果てゝ夕顔の手入に餘念なき折柄、石燈籠の影より這ひ出てし小蟲、鈴蟲によく似しと兄上の仰せに、捕へおき候處、先程より黃金の鈴打ち振る如き美音にて鳴き出し候、其音の餘りに可愛くてひとり聞かんも口惜しう、かくはもたせ差上げ候へば、今宵文よむ窓のほとりにさし置きて、やさしく鳴き出ずるを、折々御耳傾けて、きゝ給うよう、先づは鳴き止まぬ間を取り急ぎ。かしこ。

○故郷の友に

小石川　唐崎

降りしきる雨いつやむべしとも思はれぬ今日此頃御前樣には如何渡らせられ候にや最早夏蠶も出る時に候へど貴家にては例年の通り春蠶だけにて候や私は去年の春御前樣とあの廣き原に桑つみに參り空に歌ふ雲雀と合せ唱歌致し候ものを今は只電車工事の音煩さき町に日々暮し居り候思へば御前樣の御身の上羨しく候過る日御許樣よりの御文拜見致し候に意外にも御前樣には上京の念やみ難く一二年の後に親の許しを受けずとも御出京なさるとかそは御誤りには候はずや兎角若き者はまよひ易き事には候へども決して獨力にては成功おぼつかなく恐るべき誘惑の繩にかゝりやすく候まゝ此事とくとく御考への上いかにしても御上京致さるゝ思召なれば御兩親樣に再度の御願なさるべく其上御許し無之候はば最早是れ迄と御あきらめなさるべく候なまじい學問ありとて致し方なくそれより年老ひませる御兩親樣につかへさせらるゝ方宜敷きかと存じ

無礙をもかへり見ずかくは申上候倚此詩集面白くは御座なく候得共姿の心ばかりの送りものに候へば雨の日のつれづれに御らん下され度候かしこ。

○勵さんへ

福井縣　片山千里

勵さん、又此度の一學期試験に、甲ばかりでしたつて、おえらい事、お父つさんも、お母あさんも、さぞお喜びでしたでせう、姉えちやんも嬉れしくつて嬉れしくつてたまりませんよ、早速何か御褒美をと、勵さんがいつも欲しがつて居らつしやる、サーベルと帽子を買ひに行かうとしましたが、きつとお父つさんやお母あさんに買つてお貰ひなすつたでせうからと、止しましたの、然し姉えちやんも何かあげたいのですから、何でも勵さんの欲しいものを云ておよこしなさい、きつと買つてあげますから、倚ほ暑中休暇の中にも、遊んでばかりいらつしやらずに御勉強なさいよ、さようなら。

○鎌倉の叔母へ

淺草　渡邊とよ子

其後は御變りも御座いませんか、小櫛にそよとの風も無い此頃の御暑さ、そゞろに涼しい叔母様のお宅が忍ばれます。殊に亡くなつた母様が未だ御達者でそこにお出でのやうに思はれましてお懐しう存じます。母様が大層お悪く成つたと云ふ御文を頂きましてからは、毎日心細く、散る花にも、鳴く鳥にも胸を驚かし、姉妹とも神様にお祈りを缺かす日とては御座いませんでしたが、あゝお亡くなり遊ばしたと聞いた時は二人してお形見と成つた御うつし繪を抱きしめて、一夜二夜は泣き明しました。お變らぬは父様の御身持、母様もどんなにか其れを御心配なさいましたでせう、常から御病身の姉様、重ね〳〵の事に、此の春よりは分けてお窶れ遊ばし、終日の御用をすませ、門に倚つて空を仰ぎながら、父様のお歸りを待つ其の後姿、見れば見る程母様がお亡くなりに成る前に、よく彼様なお姿を成さつて居た事が思ひ出され、姉様も若しや！と、もう〳〵私の心細さ御察し下さいまし、今すぐにとは申し上げません、少し涼しくても成りましたら叔父様の前は何とか御都合遊ばして、一度御上京の上、お心の狹い姉様をお慰め下さいますやう、其れまでは私もそれを樂しみにして力の限り盡しますから、何卒おきゝずみ下さいますやうに、色々申し上げたう御座いますが後日にゆづりまして、さやうなら。

○友に

上總　紅雨女史

近年にまれなるあつさの、餘波さへきびしく候を、御地にも如何に凌ぎがたく暮したまふらむ。學校もいよ〳〵先日より始業となり候へば、苦しといひつゝも、出席致し居り候。さて過ぎにし七月十日、兩國にて互にさきくとたのみて、惜しき別れをなしまゐらせし時は、また近きほどに、やがて嬉れしき御目もじとばかり期しつるに、おもひきや家事の御都合にて、君には此の夏を限りにて、都の學びの庭を退かせたまはんとは、誠に朝に夕に手をとりて親しくむつびつる友を失ひたる私のかなしみは申さずもあれ、成業に間もなき際に至りて、やみがたきよしのあらせられてとは申しながら、かれての篤き御志を枉げて、断然廢學と決したまひたる御心の中をおもひやり奉れば、いかに慰めまつらん言葉もおぼえず、なか〳〵に、此の身先づ涙ぐまれ申し候。幾度かの熱涙に枕を濕したまひ、幾度かの深き吐息の末に認めたまひたりけんとおぼゆる此の願書、字跡に御口惜しさの籠るかと見えて、そゞろ涙にぬらし候ひぬ、されど、よく〳〵去りがたき御事情なるべし。父母の心を苦しめんことの苦しきあまりにとは何よりも悲しく、身にしみて泣かるゝ御言葉に御座候。かゝるあつぱれなる御志を持たせたまふ上は、すでに世に處するすべの理を御會得あそばされたる御しるしなり。强ひて御通學も要なき事ならんと、且つはよそながらうれしくも思ひなぐさめられ申し候、もはや、何事も申すまじ、仰せの件々、委細かしこまり、取り計らひ申し候ひぬれば、御安心あそばされ度候。

こゝ、暫し、これまでの如きおんめもじはかなはぬ事とは成り侍れど、なほおたがひに行末とほき身、いかで袂つられし先の日のたのしさを繰りかへさん折りの候はざるべき、時々のたよりはかならずきかせたまへ。御不自由なりときく折柄の新刊書などは、をのれのつとめとして御送り申さんほどに、たゆまず御自修あそばされよ、たのしき御家庭に、樂しき自然にしたしみて、清き御心を一入みがゝせたまはんことを。申すまでもなけれど、終りにのぞみて願ひあげ奉り候、あら〳〵かしこ。

新歌謠　編輯局選評

三等

月の十五は島ての掟沖に漁船を出しやせぬ
　　京都市下長者町新町西入　山口愛華

四等

歌は追分聲追ひゆけば村の境で月が出た
　　岩代國伊達郡小島村　菅野和子

五等

千葉の浦から京都の兄に電話かけたや秋の風
　　下總　岩井白子

秀逸

◎

氣比のお宮に根ざした虹は與謝の海越へ橋立に
　　鹿兒島縣　犬飼たき子

◎

私は大島孤子そだちどちら向いても海ばかり
　　伊豆　上原雪子

◎

足袋も縫つたし障子もはつた冬が來たとて大丈夫
　　仙臺　花子

◎

稀に出て來る箒木の星で掃き清めた天の原
　　筑前　高松秀代

◎

二十五絃の遠音をのせて吹いて來る樣な秋の風
　　下總　神田みち子

◎

氷はつたる諏訪湖の上は姫が走つた自由じやもの
　　信濃　おゝくに

◎

家は流され親子は別れ墜る涙の福知山
　　若狹　津田汐汀

◎

霧の海原吹く朝風に萩の小島のゆら〳〵と
　　丹波　難波あいの

◎

枯れて丸太となる樫よりは其日限りの百合の花
　　芝　白羊子

◎

兎のもちつきてつだひがてら私や行きたい月の國
　　靜岡縣　青木靜山

◎

私の手製の花かんざしお孃樣につこりおつむりに
　　花子

◎

飾りの奥樣十九か二十昨日干したよお褄を
　　紀伊　宮谷島子

◎

女工女工と馬鹿にはするな元は五百石武家生れ
　　横濱　秋香

◎

嫁にゆくのないなみてひとりつくや小樣に胡手毬
　　新潟縣　村松つい子

◎

雨よ降れふれ千日なりと川の向ひにとのはない
　　香川縣　西山かずゑ

新歌謠

○雲の日和山夕日がさしたあすは嬉しや祭かりか　名古屋　敏　子

○今日は盆やと月さんまでが圓い顔してうれしそに　相樂郡　有野良子

○越後物産天然瓦斯は私しの庭にも吹いて居る　越後　日下きよの子

○七里向ふは宮島さまで沖は名物蠣の舟　廣島市　和田しづえ

○戀しや飯豊で富士山見たがひくい越後の海は見ぬ　羽前　杉葉女史

○門司は悪病函館大火關東平野に水が出る　長崎　山口蝶子

○行けば虫の音歸れば砧月の中なる多摩の里　上總　木内秀子

○照れば張物曇れば仕立雑誌よむのは蚊帳の中　三重　なてしこ

○風は北吹く港の火事はふり袖火事よりまだひどい　渡島　鷗島女史

○御空はきたやあの懸星て二百十日の荒れ空な　相模　鍋田しづ子

○村て一番鐘撞坊の私今年朝顔まだ見ない　筑前　夕　霞

○太鼓打つ〳〵鎮守の森で勇む踊の聲もする　牛込　秦はる子

○千鳥いなゝく平の風に落葉舞ひたつ神樂月　大阪　二三女

○葉書買ふのも身をさく思ひ私しや都の苦學生　和歌山市　寺井　學

○見たい見たいと思へば夢に見せてくれたか母の顔　神田　鶴岡とく子

○五十四郡のみのりを御覧みんな黄金の花じやもの　靜岡縣　織田ちよ子

○磯の浜辺を歩いて見れば月が浮いたり沈んだり　尾張　内山文子

○三百五十餘年の昔此所に生れた日吉丸　遠江　鈴木三榮子

○遠くなります追分節に松原並木が暮れかゝる　上野　荒木あい子

○さても涼しや今宵の風は何處の國から吹いてくる　上野　小暮たつ子

○月を慕ふて朝日が出れば夕日慕ふて月が出る　大阪　西畑芳枝

○主無いお寺に白萩咲いた蝶が番する月が見る　淺草　矢田千賀子

○橋が落ちると騒ひだ川も燈籠流した事がある　池田町　寺部君子

○町で奉公が仕たいと思てくれば矢張りかへりたい　美作　雀子女史

○鬼が島までお供をしたる日本一の吉備團子　下野　[illegible]町子

○赤い襷て花嫁さんが一生懸命に稲を刈る　日本橋　三森ゆき

○今年や豊年お倉がたりぬ庭へ積うか雨がふる　美濃　伊島芳草

○椿落ちても形くずさぬに少女心はなぜもろい　京都市　宮原みどり

○京の昔にかはらぬものは加茂の流れと舞姿　常陸　幸　子

○秋は淋しい淋しい秋は床の下まで蟲の聲　越後　豊澤親都子

○家のまはりに樹が四本ある梅に櫻に梨に柿

評論文

文學士沼波瓊音先生選評

四等

○内證ごと

[illegible]　森下うばら

○何事によらず、一度爲さんと思ひたらんには、力の限りをこれに傾けて、必ずその成就を思へかし、生中のことして捨て置く、せぬに劣ること數等なり。見よ、物臭く疊める衣類の、再び着る時皺多くして、いかに不快を覺ゆるかを。

○鏡裏に映る牡丹花あり、美しけれど採るべからず、名もなき草なれど、培へば遂に實をも結ばん。動かぬ現實の樂みは、嘗むるに味なく、聞くに香なきが如し、尊き所以は玆にあり。これを知らずして、徒らに流行を追ひ、悶えと叫び光明と呼ぶ、恰も池水に月を求めて溺るゝ猿の如し、今か〳〵とて益迷ひ、遂には全く救ふべからず。われは此の猿の多きを悲しむ。

○金鍍の眼鏡をかくるものは、變色せんを恐れて、暑き時いよ〳〵汗を流すものなり。まことに物の何たるを問はず、其の眞價以上に見せんには、容易の困難にはあるべからず、人間に於て益難し、玆に至れば、虚榮は全く大なる苦痛なり、人に對する毎に、物事に遇ふごとに、尻尾を表はさざらんことを之勉む、鍍金の變色を憂ふるものと、苦悶何の選ぶ所ぞや、而も往々、頭かくして尻隱さずの愚を演ず、憐れむべし。

○友と語りて夜更けたり、時器鏘々と十時を報ず、友は二人、一人は直ちに柱頭を仰ぎ、他は耳を傾けて音の數を讀めり。前者は女俠的、後者は武家的なり、前者は式部のモデル、後者はお姫樣の典型なり。前者に勇あり、後者は謀あり。人生の事頗また雜、孰れか是、孰れか非なるを定め難し、要はたゞ機に應ずるに在矣。

（評）急所を突かずんば止まざる文、最終の一節殊に妙なり。

秀逸

○賢母良妻

福島縣　大内良子

賢母良妻は古來我國婦女子の理想で外國に對して誇るに足るの美德であります、然るに頃者輕薄な新聞雜誌紙上、所々の女學校生徒の理想が此賢母良妻に一致してゐるのを笑つて、種々の罵言を加へ、若し夫れ男子に目的を語らしめば、賢父良夫たらんと欲すと云ふものあるかなどゝ申しますが、是れは我國の體面を汚し世を墮落させようとする卑劣漢の所爲であらうと思ひます、勿論男子には賢父良夫たらんとすと云ふ人はありますまい、しかし種々の目的を立てるには必ず良妻を待つて成功せんことを企圖して居ます、其故は男子が世に立つて奮闘しつゝある間には必ず失敗苦痛煩悶等種々なる災厄に逢ひます、此時妻たるものは助手となり慰藉者となつて、夫を助け勵まし慰めいたはり、然而る後に始めて圓滿なる成功を見るのであります、然らば男子の成功には女子の成功を含んで居るのでありますす、論より證據東西古今ノ史上に名を止めてる英雄には必ず賢母良妻が附帶して居ます、否賢母良妻に英雄が附帶して居ます。

それから賢母良妻主義は世の墮落を救ふ上に於て最もよいと思ひます、自分が未來賢母良妻を理想としてからは、決して墮落される筈はありません、つまり今時の靑春女子墮落の聲を聞くのは、其觀念が無く只理想より何より慣れて、女子は將來人の妻とならなければならないと云ふことを忘れて居るからであらうと存じます、そして其主義だからとて外に目的を立てられないことはありません、自分は家庭にあつて其主義を實行し、別に敎育美術等種々の事業に盡瘁する、又最も可なることであります、

惟ふに賢母良妻主義は如何なる方面から觀察しても此後益々奬勵せんければならんと存じます。

(評)　着實なる論。

○婦人論

徳島縣　平田しげ子

アラビヤ物語に曰く、「地上に於ては有德なる愛らしき婦人と比較し得べきものなし」と、實に然り、然れ共是善なるに於て、いへろのみ其惡しき所に於ては、果して如何、セントクリソトムは曰く、「婦人は必然の災害自然の誘惑物、望ましき、厄難、家内の危險物、生命を奪ふべき魔物、紅粉を施したる、邪惡物なり」と、要するに婦人を以て、天眞爛漫たる、天使となすも、大魔物となすも、是善惡二方より觀たる結果に過ぎざるなり、然れ共天使たるも大魔物たるも、女子の女子たる責任は如何、アナヤーシス曰く、葡萄は三樣の實を有す、甲は快樂の實、乙は酩酊の實、丙は後悔の實な

身」と、思ふに女子に於ても亦三方の責任を有す、則ち良人に對する責任、父母に對する責任、兒女に對する責任、是なり。

白樂天かつて曰く「人生婦人の身となる勿れ百年の苦樂他人による」と、然り女子の人と成りが、男子に對するの責任の重大なるは、古來の史籍を繙きて女の爲めに、名を揚げ家を興し、また身命を臻し國を滅せしもの明々瞭々として證する所なり、然らば女子の、男子に對する責任重大なりといはざる可らず、而して此等の關係は、婚姻によりて、生ずるものなり、古來婚姻を以て、子孫の繁殖にありとしたるは大なる謬見なり、故に曰く夫妻にして、子なくんば去ると、是れ女子をして器物視したる言也、然らば婚姻とは何ぞや、男女同一體に歸すると、自己の生涯を、幸福ならしめんとする希望是也、されば夫妻の關係冷淡ならざるを要す、子孫繁殖は勿論、婚姻の重要なる事は、相違なきも、是を以て唯一の目的とするは誤謬なるを免れず。思ふに男子は、世に處するに常に汲々たる、生存競爭の場裡に立ちて、或は優勝劣敗の渦中に投じ、或は蹉跌に境遇し、或は不平憤恨の其身に集まれるなどは、是皆悶き、ホームに慰藉を求めざるはなし、而して亦男子は、妻君の滿腔の熱誠と同情の涙とに、再び勇氣を回復し、其成功を期圖するに至る也。

宵月　茨城縣　小堀とし子



此れに反し、此時に當りて、女子の良人に對する態度の冷酷ならんか、靄々たるホームは、間斷なき爭論の濫觴となり、黯澹たる、巷と變ず、人生の不幸是れに、如くものあらんや、畢竟是人生の幸福となるも、不幸となるも、一つは、其妻の責任を、盡すと否とにあり、カウレー氏嘗つて曰く「貞操なる細君は其良人をして、純潔秀美な細君の容貌は、花園の如く彼の愉快を感ぜしむ、女の精神は、最も有益なる書籍の如し」と。

夫れ亦母親としての責任は、妻女としての責任に比して、毫も異なることなし、米國の富豪家カーネギー氏曰く予の心、志、自治心、富貴は、皆母親の賜なりと、蓋し兒女に對する、母親の感化力の偉大なるを知る、

孟母の孟子に於ける、楠夫人の小楠公に於ける皆然らざるはなし。

余讃辨じて、玆に至る、母親としての責任を、全うせんがためには、愛情と温順とを要す、バイロン氏曰く、「男子の愛は其生涯中の一部なり、然れ共女子は其全部を愛す」と、女子にして愛情なからんか、是厄介なる動物にして子孫繁殖の爲に其存在を、認めらるゝのみ、ビーコンスフヰルド曰く「人間萬事婦人による」と、吾人は女子の社會に於ける勢力の大なるを知る。未來の良妻賢母たる者果して、如何なる感かある。

（評）引用多きに過ぐ。

○營利について

山形　江女

「彼は營利主義である」といふことは、人を排斥する一の文句となつて居るが、營利といふことは、果してさ程に嫌惡すべきことであるか。

營利といふことは、平たくいへば「金錢を儲ける」といふことである、金錢を儲けて、富を計るに、何處に惡い處があるか、嫌ふべき處があるか。

夫れ人類として世に處せんとするには、いふまでもなく衣食住といふものが必要である、旣に衣食住が必要であるからは、之を得る爲めの金錢が必要である、その必要な金錢は、或る手段によつて儲けねばならぬ、即ち營利といふことをせねばならぬ、それに、營利といふことを、如何にも惡いこと嫌ふべきことのやうに云ふのは、實に、おかしなことである。

今日、社會の上に立つ人は、皆な一定の職業といふものを持て居る、勿論、其の職業には種々ある、鍬を握るもの、筆をとるもの、書冊をいだくもの、算盤をはぢくもの、銃劍を擔ふもの、國政をとるもの、凡て廣い意味から云へば、みな職業である、彼等は、具體的に精神的に、それ／＼勞力を費して或事をする、その報酬としては、利益を占める月給を受けとる、凡て、金錢といふものを以て、其の職業につくす價値を拂はれて居る、換言すれば、それ／＼營利の爲めに働いて居るではないか、若し彼等に、金錢といふ報酬がないものとすれば、誰も、齷齪と仕事をするものはあるまい、營利といふことは、そんなに惡いことでもない、嫌ふべきことでもないのみならず、人類として世に處する正當の道である。

たゞ、營利といふことの爲めに凡て他のものを忘却して仕舞ふ、といふことは惡い、如何なる手段をしてでも金になりさへすればよい、人は迷惑しやうと、自分だけ善ければ結構といふ樣なのは、いけないのである、即ち、不正の利、不義の富、などを貪るのは、斷じて排斥せねばならぬ、世人が、營利主義だといつて排斥

するのは、この不正不義の利を貪る者のことである、決して、正當の商賣をして居るものや、道に適うて居る職業に從事して居るものを、かれこれいふものではない。

從つて、或る營業者が、營利を目的とするものでない、と公言して或る事をなすとき、それを以て、全く少しも利益をせずになすものと思ふのは間違ひて、それは、決して不正不義の利益を貪る爲めでない、といふことなのであらう、如何なる商賣人と雖ども、何處かで自分の爲めになる即ち「利益する」といふことなしに、わざ〳〵資本と勞力を費して事をなすものは、まづ萬人に一人もあるまい、あつたら瘋癲にあらずんば、必ず白痴であらう、然るに、營業者が、營利主義にあらず、というて事をなしたるを見て、一錢も利するな、一文も儲くるなと強請し、若し、少しにても報酬を得るときは、彼は營利主義の奸徒なり、というて排斥攻擊するは實に無智の至りである、人世に處する道を辨へざる者である。要するに、不正不義の利益は、斷々乎として排斥すると共に、正當なる營利をば、飽まで是認して、その發達隆盛を期しなければならぬ、兎角二者を混淆して一概に之を排斥するのは、極めて淺薄なる誤謬といはなければならぬ。

（評）何かうまい例でも入れても少し具體的に論じてほし。

お友達　　富城よし子



○德義と報酬

石見　撫子

世の人常に云ふ報酬を要する行爲は神聖に非ずと。然れど我等は余く報酬なしにはたらき得るや否や。我は報酬を求て自ら苦しむ者也。他の窮厄を救ふ時己も亦何時かは救はれん事を豫想し他に利益を頒つ時は他より感謝を得ん事を思ふ故に他より其報酬を得ざる時怨恨生じ苦痛も來る、誠の德義はしかく商賣的のものにはあらざるなり眞の德義の報酬は決して外に求むべきに非ずして内に求む可き者なり。試に饑えたる者に食を與へよ必ずや汝の精神に平和を來す可し試に惱める者に慰めを與へよ必ずや汝の腦裡に安慰を生ず可し平和や安慰や而く大なる報酬を握りつゝ尚他の報酬を貪りて苦しむは洵に愚の極ならず哉。報酬無しに働く能はざる、我等は此報酬の前に勇ましく働かざるべからず。

（評）美はしき論旨なり左れど未だ實際に觸れず。

短文

編輯局選評

二等　○馬

宮城縣米谷町　沼倉ふく子

或る日妾は物見峠に遊び升た。其の時峠の隣山の頂きに馬が七匹草を喰ひながら遊んて居たので、實に可愛かつたんてす、夕方歸る時見れば、峠より三森遠い所に六匹遊んて居り升た、夕日は馬等の背を照らす、オヽ、可愛馬等よ。

天馬を産すみちのくの山、少女の瞳と馬の瞳と何れか優しき

三等　○蝶ごよみ

丹波氷上郡和田村　難波あいの

二月三月梅花の頃、野の若草には薄紫の三分蝶が宿借ますが、四月菜花の頃には白、黄の蝴蝶が長閑に舞て、七月庭に鬼百合が聳ると、紺に紅水色の大紋ある鳳ふ蝶が重げにふは／＼舞て來ます、九月鷄頭花の盛には小い紺金の蝶が群をなし、十月一年の舞終めには、白蝶が賑はします。

大小蝶ごよみ、花ごよみ、自然は正確なり

四等　○七夕の朝

福島縣福島市陣場町六十二番地　村井むら子

舊暦の此朝早く川て毛髪を洗へば奇麗になると云ふのは昔からの云傳へなので、私等は暗い中、阿武隈川に行のてす、霧のこめた涼しい川岸て、ちやぶ／＼洗ひ新藁て根を結びさげて、未だ眠からさめない靜かな町を通つて歸宅するのてあります。

織姫は銀河の畔にて

五等　○山小屋の生活

奈良縣吉野郡賀名生村　中富よしみ

遠く夏雲の樣な嶮山の群を東の窓に控えて、近く高野登りの山伏や順禮を、西杉皮圍ひの透間より覗く事も出來る、縱の林におほはれた南の破れ窓では屢々狐の聲も聞く、北側の扉を開けば山又山の彼方遥に故郷の空を望み得られる。あゝ世に遠いかな山小屋の生活。

畝火、耳成も昔の人にして

秀逸

○銀杏の樹　和歌山市　岡崎さき子

祖父樣の祖父樣に當る人が江戸から下向のとき、何とか云ふ驛で青錢二百文で買てきて植たのだと云ふ土藏のそばの大な銀杏の樹、毎年何升と云ふ程實がなつて、御隣やお友達の處へお分配をしたり、御料理に用ひたり致します、妾は此實が金色に熟む頃は、一番愉快であります。

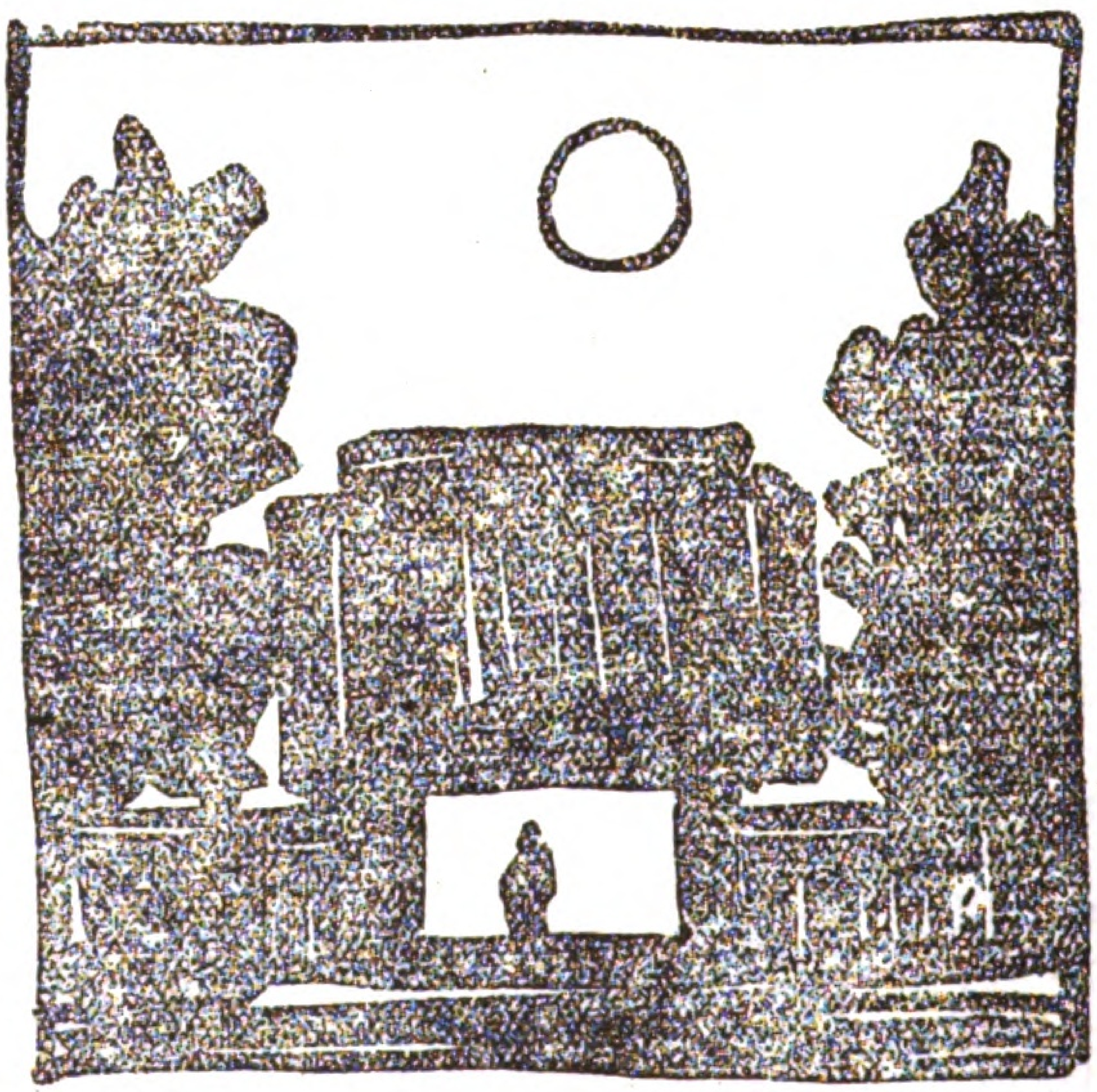
銀杏に歴史多し

○河木　四多摩　森田喜代子

私の住居は極々景色の宜い玉川を一目に見はらした家なのです、そして今度の水出には河木を澤山拾ひためて何しても此冬中には燃しきれない程有りました、私は餘り勿體ないやう思ひますから隣のあんまさんと、一丁計り隔たつた所の足の惡いお爺さんの元へ運んでやりました。

洪水の餘慶

山門の月　靜岡縣　淺井みどり子



○校内日記の一節　石川縣　黑田藤枝

今日、早稻田大學商業科の生徒が、二人、控室の一隅へ、小店を開かれた、中には、好な好なリボン、美い繪葉書、香の好い石鹸、香水、種々樣樣、其廻りを取まひての大繁昌、私も香水とリボンとを買つたら、代が五十五錢やがて、金入の底をたたいたら、四十八錢、バツと驚いて耳たぶは火のつく樣。

行商生徒、紅圍粉陣に闘ふ

○新聞の記事　茨城縣　石川久子

妾新聞に黑ふちのはまつた廣告を見ると何んとなく胸か一杯になります他人でさいもさうなのですから家の者の身にとつては如何ばかりてしやう

秋は殊に多く、二つ三つは毎日のやうにある

○金帆　　埼玉縣　淺見みな子

紫の霧が仄に薄れて金波銀波の密語は夢のやう、沖に朧の島影は天津女神のおはします御園。——と見る緑の松の木の間に迄風を孕む金帆一ツ、島の女王へ戀のみ文の使であらう。

八大龍王も靜かに守れ

○朝顏展覽會　　佐賀　西君子

今年初めてお父さんと姉さんと弟と私と朝顏を九鉢づつ分けてそだてました、滿開の時叔父に見て貰つたら私のが一等をしました二等が弟で次が父次が姉でした御褒美にはきれいな植木鉢を貰ひました。來年はその鉢に植ゑて又一等にならうと思つてゐます。

小園藝家

○たのも節句　　伊豫　服部とめ子

伊豫には面白い習慣があります、舊八月一日にたのも節句と云つて新粉て人形や鳥獸の形を作り、神に祭り、其日半日仕事を休むのてす、我家ても皆て種々の物を作りました中て一番をかしかつたのは下女の作つたチンてした、體の割合頭の小さかつた事、鈴の大き過ぎたこと、それに眞白てあつた新粉が鼠色になつて居たのてす。

それこそチン（珍）

○商人の娘　　佐世保　いちじく女

私の内は商人てすから、まあおはいり、毎度有難う御座いますとかお世辭を言はなければなりません。私は始めの内は何だかはづかしい樣な氣がしましたが今は何ともありません、お客が馬鹿にしても何だ自分は商人じやないかと思へば一つも腹か立ちません。

算盤を持つた事の無い女には分らぬ呼吸

○たすき　　岩代　笑ひ女

私は、茶屋の娘て御座いますが、心の美、婦人の美を損じぬ樣にと、殊に、一番仲の好い襷に、意を用ひて居ます。夏は、單衣に配合好い時色、一松抔を、其他の時季は、鶯茶、白木綿の細くけを掛けて居りまする。

紅梅庵、白藤

○木犀の花　　上田ひさ子

古いお手函の中から見出した木犀の花、考へると既十年許り前お隣の教會て日曜毎に唱ふ讃美歌を子供心の面白さにいつか暗誦しましたのを、能く覺えましたつてうら若い牧師が折て呉れたのてした。色も香も襪せては居りますが何だか彼時の事が痛切に感じられます。

胸のむ

○夜の洪水　　兩多郡　中島縫子

雨の音――奔流の響――人の叫聲――烏羽玉の夜の天地に反響して、げに悽慘の極、遙か河向ひには提灯の明滅として狼狽する氣配、不圖、作馬の樣な濁流の中央に當て、すつくと起つた一大怪物、あゝそは人家の流れるのてあつた、折から何處てあらう、破鍋を叩く樣な鐘の亂打！雨は又一入降り出した。

見出しの用意

○白羊宮　　麴町　淺井千鳥子

電燈の光りがまたゝいて大通りの店家は晝と思はれる程あかるい。散歩の歸るさふと書店に入ると一番眼に入つた銀文字のもの、詩集、詩集「白羊宮」てあつた。買う止めやうともぢ〳〵して遂に多くもない財布を挑つて買つてしまつた、此詩集は永久手許を放さないて。

如何に貴き財布も詩集の價に及ばず

○くつの露　　徳島縣　紫濃子

久しぶりに歸省したので田舍の、叔母樣を訪はうと思つて、甥の輝次を連れて家を出ましたが、途中に蜻蛉が居れば捕れと云ひ、みみず見附ては蹲踞んて歩かず、それに細い草道の一足毎に懸るくつの露を、私の絹半ケチて拭はされたのは大弱りてした。

かゝるは神の罪ならで

○おさげ　　岩代　菅野和子

お晝迄仕上げねばならぬ縫物を控へてあるに、千代ちやんは「姉ちやんネお垂髮に結つて頂戴よ」と迫る、五月蠅とは思つたが豐くりした頰に、懸を見ては惡い顏もできず、ぢや結ひませうとふりむけば、髮結道具一切準備してある。

リボンも新しく

○稲苅　　福井　片山千里

朝は早く日の出ぬ前に、ぞく〳〵と降つた霜を摑みながら、手も足も今に斷れて仕舞かと云ふ樣な思をして、晩には指の腹が破れて、血が流れるのもかまはず、折角苅らなければ、一人前の百束はむづかしいのでございます。

斯くて千束の稲は倉に充つ

○私の日記簿　　山口　伊藤しづき

一番始めが金錢受入の部、次が同支出、其次が受信に發信の部と別記してゐますが、近頃交際家となつたものか、其受發信の部が餘程增して來て、旣に一月から九月迄受信番號百四十號に發信が百九十號に達しまし

た、どうも外交が下手で困ります、其變金錢の部は何月も受入の方が多いのです。

矢張上手なのでせう

○稲妻　　下總　三橋千代子

月もなき秋の暗夜今ありし星さへ見るまに雲におほはれ村雨模樣の空、やぶに啼く蟲の音細く何となく物哀れなり、暗夜の黑雲手をのばす如き中よりひらめく稲妻、ま晝の如くに路の草叢、まばらに降る雨さへ明に見へた。

叙景の秘訣を知る

○大きな聲　　京都　濱部郭公女

私の伯父は聲が非常に大きいので或る時私は思ひきつて「伯父さん其麼大きな聲をなさら無くつても聞えます」と謂ひましたら伯父は私に向ひて「聲は大きいがよい、世の中の凡ての惡事は小さい聲から起る」私は非常く此の言葉に感じました。

女は小さくともはつきりと

○男女競泳　　豐後　花葉子

臼杵名物は遊泳の大會で、撰手は男女共約五丁餘の處を泳ぎ渡るのです、男子の持つ大小紅白幾流の旗は女子の櫻の造花で殘る隈なく飾られた三階傘と相映じ、入亂れては豐な海面を、互に敗けじと進む態の美しさ、勇しさ、其兩脇は何時も見物兼聲援の舟でぎつしりです。

浦姫うらやむ

○暴風の朝　　すゞしろ

おそろしと思ひつゝまどろみて曉にさめぬ、雨戸細目に明て見れば風のみなり。弟の云し樣に藪はおじぎして藷の葉は躍て稲は降伏の躰。濁た川は大蛇の鱗の樣な波が、向ふの二階でも雨戸細目の亂髪は白き頬に緋のしごきして袖も裾もひらめいてはぎも表は、ふと顔見合せてにつこり。

二百十日過ぎて

○井戸の朝　　香川　元女

日もまだ、見えないで、朝風そよ／＼と、烏は森から鳴いて出る、あちこちの撥釣瓶が、ギーギーと鳴つて居る、樵の爺さんが出かける、柿の木の露が光りだした竿の乾物に、赤い／＼日がさし初めた。

光明世界

○虹　　民子

朝日がきら／＼と東天に昇て其の美しい七色の御姿を薄雲のぼんやりとした中へ御寫しになつた時、朝露に

庭下駄の先を濡らして散歩して居た詩人の面には笑が溢れたれど裏の畑に鍬の土を落して居た農夫の眼には云ひ知れぬ愁の色が浮んで嗟又七日荒れるのかな――

一は崇嚴を以て一は恐怖を以て自然に感服せらる

○玉虫姫

桐生町　波江子

秋風にゆるゝ千草が蔭の鈴虫は、歌ふにあらで、思ひの人を奪はれて泣くなるとか。月美はしき秋の夜は、いとゞ昔の戀しくて、友の面影も偲ばるゝを、あはれ、箪笥の底にたゞ一人、妾が衣守る玉虫姫の思ひや、如何に。

衣の香を身にしめて

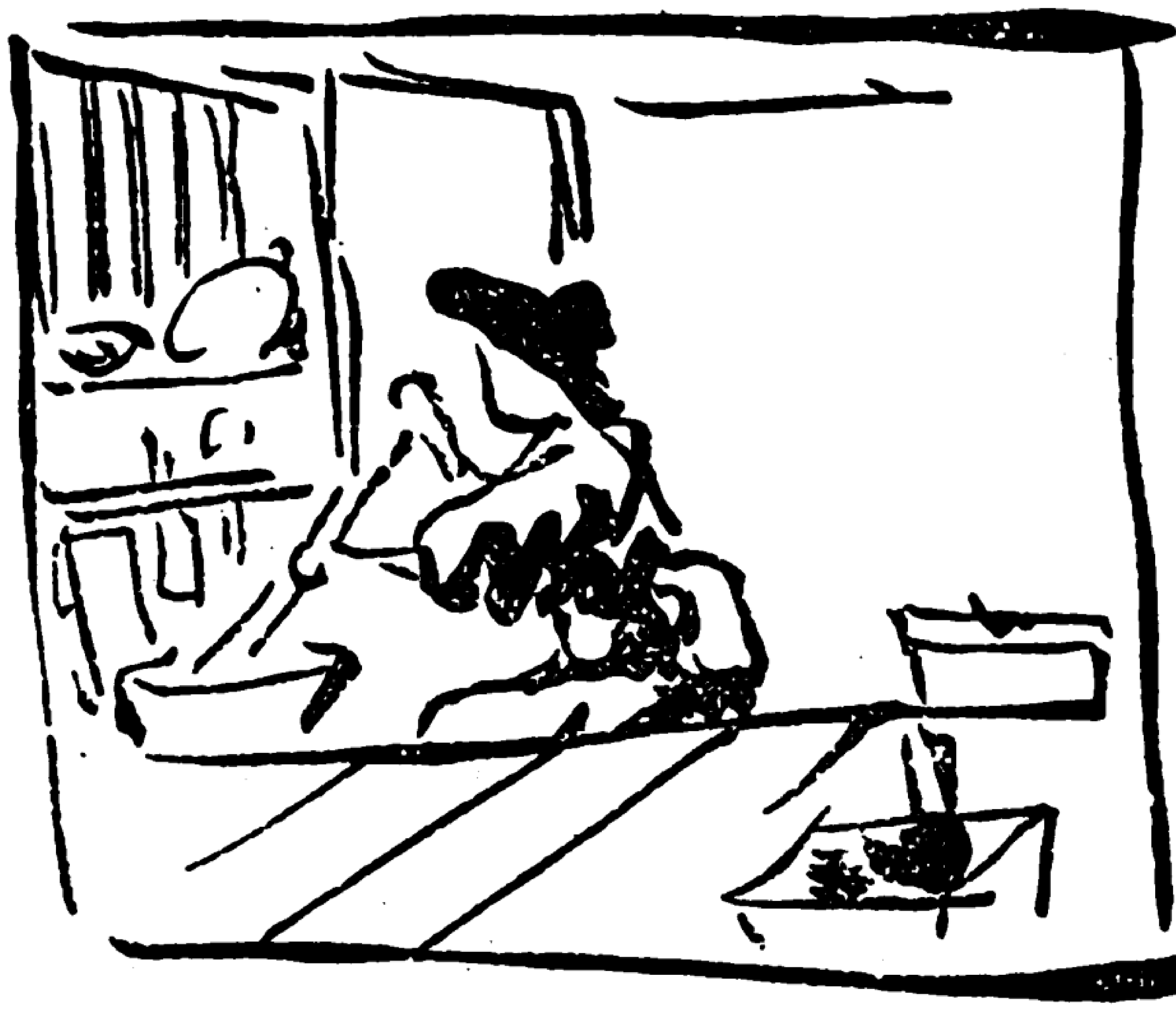
○小春の一日

大阪市　武田とし子

麗らかな小春日和、空は一點の雲もない。京橋の上を往き來る人も心地よげに、品のよい奥さんは伊勢崎絣の着物を着た男の子を連れて南へ渡る、大方博物場へでも往くのでしよう。色の黒い爺さんが大寺餅の車を橋詰めに止めると駐車場の車夫がチラと見た。今道頓堀行きの巡航船が下つてゐる。

大阪の京橋

料理　埼玉縣　村上花月



○桑摘

茨城縣　柳澤てう子

里は今秋蠶時です。夜の霧が薄く靉いて、明けやらぬ桑畑の其處此處に、白いものが動いて居るのは、ぴつしよりに成て桑摘む娘の手拭です。其桑の葉末の露の一つ一つには、未だ星が宿つて居ます。

葉のあとは蝶の形に摘み殘すとやら

○新奥様

大森　月岡花枝

私の家の裏に某高等女學校を卒業された方と言ふ奥様がありますが或夕方惡いと思ふたが一寸塀からのぞいたら少尉の軍服が衣紋竹に引かけて子供が三人はだかで泣いてゐる、奥様は御腰を捲くつて御琴をてろりんしやん。

枕はそばにころがつたまゝ

○井の中の家庭

備中　しづ子

私の家には毎年七夕様の日に井がへを致します、去年

三匹生かして置た鮒にやゝが出來て入人家内になつて居ました。そしてまことに睦じそうに見えるのでございます、來年間にはお孫が出來て一層和氣靄々たる家庭を作て、せまい非の中で天下大平と歌ふてありましよう。

雲谷列官の血統、繁昌す

○おつり　上總　館城美代子

私は箱紙油などを買つて、おつりの一錢未滿のものは必らず此箱へ入れて出さないことゝ定め、本箱の傍に一つの箱を備へて置きました、今日は九月一日で丁度滿五個年になりますので開いて見ますと三圓五十九錢七厘ありました。

一種の貯蓄法

○秋の夜　鳥取市　上山千重子

利鎌の影細き夜を、霜結ぶ野寺の鐘の聲、すゑは遠く亂れて消えぬ、淋しき秋原の伏庵や。さらぬだに病みし此の身は佗しさの遣る瀬なきものを、枕邊に針取る無心の妹は一針々々に秋を縫ひ行く。

短文の技巧派

○手結の濱　土佐　潔子

ザーと打ち寄せた波に、妙しい海藻や美しい貝殼、さては菊目石などが運れてきては、ころころとなげ出される、此の面白い汀の樣に興がつて餘程歩いたらしい、何時も其の樹陰によう立つ一本松は、恐しい大きな岩にかくれてしまつた。(日記の一節)

文致に秩序あり

○「しら萩」　下谷　幸枝子

「しら萩」が本屋で賣切れたのでお友達と雨の降る中を大鋸町の本社へ買ひに行つた處、妾は道を知らないので、通三丁目で電車を降りた、折柄雨は益々烈しく友も妾もびつしより、巡査と電車の監督、車夫、煙草や、硝子や、疊やと都合六度聞いてやつと、「しら萩」を手にとつた時の嬉しさ。

わざ／＼雨の中を入らしつたのは大變でした、番頭さんに代つてお禮を申します

○靜かな朝　常陸　幸子

戸を開きますと、霧がかゝつて松原の松がうすう。庭の叢のあたりに、細い細い聲で蟲がないてゐて、秋らしい朝風に桔梗の花が搖れると、花の中から露がほろり散りました。糸のやうな雨が音もなう降つてきて、風もないのに、百日紅の花が紅くちる。靜な朝です。

靜かな文

○奇妙な地名　宮城縣　千葉みどり

私の村に奇妙な地名があります、それは穴端といふ所と、幽靈といふ所と、白裝束といふ所と、夜通といふ所とがあります。これをつゞけると「穴端の幽靈白裝束で夜通に來た」となりますきみがわるい

○昔と今　信濃　世良田ゆう子

簞笥の中に古い太織の着物がありましたから母に尋ねますとね、着物は母の十七八の頃、自分で糸をとつて、そして山から染草を摘んて來て染めて、祖母樣に織つて戴いたのですつて、そしてそれをクリスマスに着て行つたら皆が大變立派だつて驚きましたと。其時分にクリスマスがあつたのですか

○田舍生活　越後　失名

始めは恐かつた總今はなアに母樣のお湯を湧して下さる間にちやんと解いて小田の草取りに行き蛙の鳴く頃家に歸ると千鳥も取り込んでありますそして月見草のパチ〳〵云つてひらく時女子文壇をみて朝顏の咲ふ頃迄にきつと僥積んだ夢を見るのてす

○花の數　美濃　櫻子

晴れて心地よき朝めづらしくもとく起き出てし芳子何れに行きしかと、呼びて見れば朝顏棚の下に立ちて、兩手にあまる朝顏の花數いかにせむかとためらつてゐるのてした

○私の望　下總　秋山よし子

姉の千代さんは洋行して昨日歸つて來たお隣りの西山さんを理想の人とし從妹の百合さんは早稻田大學の佐野さんを未來の夫と定めそして樂しく暮すと云ふ私はそんな事は大嫌ひ毎日夕景色を眺めつゝ畫を書くのが大すきてすよ

○小川　長岡市　佐藤浪子

私毎朝裏の小川へお洗濯に行くのてす、麗かな朝の光はいつぱいに滿ちて向岸には千草色好く中に幾多の野菊が可愛らしい花を咲かせて居るヒラヒラと清い流の上を黑羽の蜻蛉が打つれて舞ふては花にやすむのてす私はいつも見惚れて洗濯衣を流れに取られやうとします

○神戸と東京　神戸市　弓月

私は神戸の中央て生れまして今でも同じ所て同じ家に居りますそして東は京都西は明石より怨りませんから誰方にても神戸程よい所はないと申しますと東京へ行つたら神戸へ歸るのは嫌になると云はれます

○私の願　大阪市　大西幸枝

振袖の三枚重だの、金側の時計だの、寶石入の帶止だのと、そんなものてはなく女子文壇から頂く懸賞品て、着物から半衿まで揃へて記者先生のお宅へ御禮にあがり度のが私の何よりの願なのてあります

○つばめ　長門　雛桔梗子

例年の燕が今年も古巢て三羽の雛を生みましたが孵化て四日目にお隣りの猫が親燕を二羽共とりましたので未だ目さへも開かぬ雛は孤子となりました私はすぐ巢から出して籠に入れ小さな蟲をとつて養ひやりましたが翌日遂々死んてしまひました嗚呼來る年からは歸り來る燕もありますまい

○葡萄　磐城　織内八重子

お庭の隅のあまり高くもしない棚より五房六房ブラリとぶら下た葡萄、弟の芳ちやんは、さも珍らしさうに毎日毎日眺めて居たが、いつの間にかお隣りのお政ちやんと無雜作に跨へた竹馬に乘つて、よく遊んで居ると思つてたら葡萄は一ツもない。

○夢に入るまで　北信　園子

今宵は鎭守樣の秋祭り、床についたのは十一時も半ば過ぎてあつた、お向ふの箕錣彈じく、パチ〳〵はたとやめば、夜は次第に寂寞に鎖られて、只膳のパタ〳〵のみうるさい、とゾロ〳〵人の足音、孫子、武夫、皆らしいガヤ〳〵おや芝居ももうはれたか

○天然の庭

京都　島田千代子

大德寺は名高き巨刹で。方丈は少し高み坐して東の方を見ると。春の頃は茫々たる廣野一面の消雪の花盛り黃白の毛氈を敷き詰めたる如く。遙か向に鴨川堤一直線の松原少し北の方に比叡山高く聳え四明が嶽髣髴と認めらるゝ。實に純乎天然の庭園を利用せしは小堀遠州が意匠じやと

○永久

福岡縣　はる子

私は、山中の田舍娘です。て榮譽も望みません。名譽もほしくありません。只此の雄々しい山間に湧き谷川の淸水を汲み、巡らず變らず樂しい今の家て永く暮したいのです。

○私の日課

埼玉縣　山中津瀾

私は片山里の農家に生れた少女です每日學校から歸りますと風呂の下をもすのです、そして穩かなお天氣の時は本を讀み乍らも充分にもせますが少し風が出ますと諸姉樣の御存知ない程煙いのです。

○きりぎりす

下野　廣子

弟が水泳の歸りに、田圃で捕ひて來たきりぎりすを、小さな虫籠へ入れ樣としたので、私は靜かに弟を諭して、庭の藪へ放してやりましたら、其れからは每日、私が裁縫をして居る庭先きへ來ては、さも愉快さうに鳴いて居ます。

○髑髏冠

たけを女

丈は丈より長う顏花の咲く人の、何に悶ゑの狂死の、野末にのこる一つの髑髏、月にほふ春ならば、其眼窩より紫の小花夢と咲かう、今宵繼まつ白の什狐が冠つて、空嘯いて悄然と、闇にほのめくしろ金すゝき、露落つる事しきりなり。

○雛鳥

淡松　白ばら

私の家には今年の春卵から出た雛鳥が十羽居ます私が每日お米を洗ふ所へ來て其のお米を食べようとしますあまりのかはいさに少しやり少しやりして居ました時後から姉さんと呼ぶ妹の聲にふとお米を見ましたら半分ないくらゐになつて居ました。

○ハンカチ

豐前　工藤榮子

妾の今流した淡紅色のハンカチ、だけの下のうずにまきこまれて、龍宮までにげて居ると云ふ穴のおくへおくへと、あゝ妾のハンカチは、はたして乙姫樣の御殿まで行きつくてあろうか。

○心細い

橫濱　芙蓉

二三年前迄は些少の粗骨でも嚴しくお誡め下さつた母樣、此頃は如何なされたのか大きな誤をしてさへ何にも仰せられません、私は其が又何だか非常に心細く思はれてやつぱり先の樣に御遠慮なく叱つて戴きたいと願うのであります。

○四化蠶

土佐　大和田靜子

私のお母樣は大變蠶がお上手です、春蠶も夏蠶も秋蠶も澤山お飼ひになりましたが、皆上等でした、そして今は四化蠶と云ふのを飼れて居ます、二十一日すれば上簇するとの事ですから、いづれ田の面に黃色の波が立つ頃には美しい玉の樣な繭が此の間の內へ山爲すことてありましよう。

○妾の家

下總　匝瑳東陽女

妾の家では子供が生れる度、一本宛庭に木を植ゑるのです、兄さんが生れた時は桃、姉さんが生れた時は栗、妾が生れた時は梨、妹が生れた時は蜜柑、今年生れた一番末の弟の時は櫻桃、一本大きな柿の木は父の生れた時植ゑたのです。

○家內の上下

上總　もみぢ女史

妾しの家の勝手では、お父さんが一番上座で、その次がお母さん、兄さんと姉さんはそのつぎ、妾と下女のおみつがその下で、愛猫も妾と一所、犬と雞は土間の上、そして每日喜ばしく御膳に向ふのです。

○田舍へ

筑前　あさつゆ

此春母に願つて濱の畑を一畝ばかり買ひましたので私の手一つて茄子を

すりなど作りました處が思の外よく出來ましたので父母がその位作りすればもふ田舍に御嫁入しても世話なしだと云ふてからかふのですよ。

○三人　本所　百代

相生町の三人娘、とおカツヾの頭からの評判の仲好、去年の春、揃つて優等で女學校を出たが今では、一人は大學に、一人はお嫁樣に、殘る一人は肺か病むて、淋しく過して居る。

○早起朝顔　青森縣　佐々木愛子

朝に早く起きる人は丈夫だと云ひますが、花に於ては早起きの朝顔が弱くて日が照るとぢきに萎へて終ひますが、閑庭の松葉牡丹はなか〳〵達者て焦げつくやうな土を匂ひ燒くやうな踏石を包んで美くしく咲いて居ます

○山奥　神戸　櫻町

學校に近い犬上山の姿を見ると私は直ぐこうゆう考へが出る。もしもあの峰の奥深く人跡絶へた深山に、太古の姿を表した松杉、谷の眞洞、紫水晶の如な泉の水が湛てあるかと思ふのです、

○學校　麹町　山岡ふみ子

姉樣は和洋裁縫女學校私は女子商業學校弟は番町小學校次の弟は上六小學校に通學して居ります夜になると自分々々の學校の自慢を云ひます私や弟はまけずに一生懸命に云ひますので皆樣に笑はれますの

○私のたのしみ　丹波　奥村千代子

私が、常にたのしく思つて居る事は、朝とくよりおきいてゝ、日每夜每に鷄よ雉よと可愛がつてゐる、五羽のひよこを起して、うれしそうなかほゝ見ながら、餌をやるのが私の一日の一ばんたのしく思つて居る事であります

近江水口　[illegible]　吉田まつゑ



○むづかしき問題　淡路　桑山子

けさ妹が思ひ出したげに『姉さん何でも他處へ逃げる時は熨斗を添へるもの?』といふので、何氣なく『えゝ』と答へますと、『あの梅山の姉さんをお嫁さんにあげた時も熨斗をそへたの?』といひました。嗚呼學校て何時も優等とつた私も殘念ながら此問題には‥‥

○好き　豊前　角鋼　雪枝

兄さんお好きなのは旅行て、姉さんは裁縫て、弟は鐵砲て、妹は人形てあります、そして妾は讀書が一番好きてすわ、皆さんは何がお好き。

○秋の日　上毛　大沼微音子

青い〳〵秋の空には、白雲が二筋三筋、蜻蛉は此の涼しい日を縫ふては西に東に、畑の豆はパチ〳〵と音がして居る、彼方の杜には百舌鳥の啼く聲が、自分の心のせいか、何となく實乘り豐かな此の秋を祝するやうてある。

○蜘蛛の巣　しげ女史

朝早く庭に出て東の方を眺むれば彼方に大きな朝顔が咲いてましたからこれを手折らんと走り行けばあらまあ木と木との間にかけた蜘蛛の巣が妾しの顔にべつたり付いた時のいやな心持。

○妾の望　なにがし

昨日母上が妾し夜縫ふ物の賃をお前にあげませうと云はれましたから妾しの望みは來る四十五年の博覽會まて貯金してなつかしき記者先生や親しき桑子さんや香子さんに面會し記者先生や桑子さんの案内て東京市中や博覽會を見物したいのお何よりの望みてす

○日曜の樂　日向　渡砂まさよ

私しが發起となりまして講習會を開く事にしました、會員が拾五名會長が瀨川德子さん副會長が私理事が島村政子さんと山田義子さん、日曜毎に德子さんの內で始の日が生花と造花、次が裁縫と料理其次が讀書と談話會、新樣に段々極めてあります。

○風俗の移り　和歌山市　須磨子

今から丁度五六年前で御座います私が東京から和歌山へまゐりまして横から前髮を剖け御ちご髷に結ふて紫の御袴をつけて學校へ行ますと皆樣が大きな前髮だ？牛若丸だと笑ひました然し只今はどうでせう女學生は無論新織の職工迄横から大きく剖て御袴をつけてなり升。

○七日詣で　成田　小倉秋風

舊暦九月一日から七日まで、曉がたの二時頃を成田山に登るのです、鬱蒼とした御森か拔けてゝ二王門をくゞり神楼を渡れば、左に峙つ落雷の大公孫樹、右に聳ゆる三重の大塔も唯眠るかのやう木犀の香の肌に秘して何たる神秘であらふ。

○蝶　大坂　むらさき

氣持のいゝ朝風にひら〳〵と舞ふて來た小さな蝶、どうしたはづみにか、楓の枝にかけて居つた蜘蛛の巢に縋りました、すると今まで葉の下にかくれて居つた蜘蛛は「しめた」と云はぬ斗りに急いで動き出しました、私はとんでいつて巢を破つてそつと蝶をつまんで露を含んで居る草の上に置いてやりました。

○休暇中　相模　土筆子

私は學校で、實地に商業を學びました、紙卷煙草紙材箱に、りぼん類の一寸した小間物、商業は中々、面白いものですネーと、申しますと、父は笑ひ乍ら、休暇四十日、是非御願み申したいつて。

○稲刈　大和　西窪長子

稲が實のりましたので妾と妹と下女と三人づれで稲刈りに行きまして妾と妹とゝ刈るだけ下女がたばねるのよ下女がたばねるだけ二人でよう刈りません。

○秋の夜　豐前　ばら子

お母さんは衣を縫い姉さんは女子文壇を讀みそして私は其のそばで毛糸を弄びつゝ姉さんの女子文壇を讀むのを聞くのです之を一番樂しみとして夜のくるのを待つのです。

○漁火　伊豆　杉山艶子

風の聲、波のひゞき、何となく淋しい夜です。沖に連る漁火を數へつゝ立つて居ると、遠き彼方の松原あたりから、聞えくる唄の一節「來るか〳〵と出て濱見れば……」、「濱は松風音ばかり……」。あはれ其處にも吾と同じ想ひに得堪へぬ人が……。

○飯も食はずに　下總　藤崎美奈子

お父さんは、飯も食はずに、お隣の隱居さんと、碁打の眞最中、妹の松ちやんは飯も食はずに、何か編物の眞最中、そして妾は飯も食はずに、句案の眞最中。

○勝じき雀　千葉　牧野松操子

毎朝私は鎮守樣へ行きます雀は待つのであろうお屋根へ集り私が神前へお米を供へお祈を終ふともう我物顔でお互に爭ひ始めます。

○無邪氣　愛知縣　林ゆき

私は、毎日尋常一年の兒童を相手に、笑つて暮してゐます。或時、郡視學が、巡視に來られて、私の教室へも入て、觀て行かれました。視學の去られた後で、兒童は「先生彼の今の髭生した大きな人は、天皇陛下ですか。」と、私は思はず、噴き出しました。

○葡萄　美作　大土井澄子

園藝書を讀むで弟と二人で作つた葡萄甘い實が澤山なつたので水に近づいて腐れぬやう虫害をうけんやうにと紙をつけた結果此頃はもう皆水々と熟して段々と水にうつるやうになつた。

○秋の野邊　本所　淡紫

秋風一夜四より亘りて、葉がくれに咲く朝顏。道もせに打ち伏す男萩。女萩。露み黃金の玉とあざむきつゝうしろめげに立てる女郎花。何をかこちてうらみ顔なる葛の花。誰とはなしに招く尾花。ゆかりの色ふか

く匂ふ桔梗。藤袴は野邊をにほはせり。

○眠られぬ

岐阜縣　西原志な

いつもは大抵十一時頃に、寢すむのですが女子文壇が着いた其晩は、一時が打つてもまだなかく寢つかれませぬ、妾女子文壇を讀んで居ますと、ちつとも眠むたくありませんもの。

○冷水摩擦

下谷　赤堀久

手水鉢に薄氷がはつてゐる。寒い朝だけど思ひ切つて膚を脱ぐとつぶつぶ栗が立つて丁度鷄の皮のやう。斑々の紫色になつた皮膚を濡手拭でギユーんく擦る。皮の底からにじみ出す樣に紅い血の色が濺つて毛穴からはポツポと湯氣がたつ。膚脱ぎの儘でも最う寒くない迄に身中ほてつて來た。

○順禮

熊本縣　富丸若子

何處の順禮かしらん、六十位の老婆と、十五六の可愛少女は今しも森を出て、河岸に立ち、老婆は孫娘の手をとりて懇意に川面を指し、何かつぶやいて居たが、やがて、南無阿彌陀佛くとかすかな念佛續いて聞えた。

○燕の言葉

桑名　しげ子

猫が燕の巣をねらつて居りましたとも知らず歸り來りし親燕は此の有樣に驚き一聲高くピーとなきますと子燕は皆巣にひそみました。

○噫秋は來ぬ

山梨　藤枝子

一時はなかくさかんに咲いた大輪の朝顔の花も、今朝見れば、透垣にまつはる蔓の風にゆらぐも痛々しゆう花も大分小さくなつて、其間を小鳥がチヨイくくゞつてゐる、噫もう秋は來ました。彼の砂へ字を習ふてる水害地の兒等も寒さを感ずるでせうに。

投書家　麹町　山下薄紅女



○近所

神田　吉田たつ子

私の家は醫師與は會社員下宿屋が前で寄宿舍が後にある中で常ににぎやかなのは小供の多勢あるお隣下宿屋からはパチく碁を打つ音や流行唄などが聞える一二の號令男しい機械體操やベースボールするなどいつも愉快げなのは寄宿舍である私の家は家庭こそ樂しいが六ヶ敷顏した病人が出たり入たり實に世は樣々である。

○妾が島

肥前　濱千鳥

妾が島は九州の最も北端なるごく小さな島で、周圍わずか七里、戶數が八百餘、人口約四千五百、漁業が盛んです、今は鰹が大分とれてゐる、この鰹を夜の目もいねず製造したものが、皆樣のめしあがつてゐる鰹節です、そして之を大阪神戶博多長崎其他の各地につみだすのです。

○稲と大豆

伊豫　賤子

田植前に弟が取つて來て鉢に植ゑた稲、早房々と實のつて居ます、田の稲は未だやうく花が出た許りですのに、又私の蒔きました大豆、早實が澤山なりました野へのは未だ花盛りですが、て弟は僕の稲は豐作だと喜び、私は大豆の能く實のるのを樂んで居ます。

○可憐の花

愛知縣　林ゆき

私が風呂の下を燃べて居ますと、燃料の中から、乾萎びた紫の花が出て來ました。花も盛すぎては薪となるのでありますが、私はたゞ可愛相で、焔の中へ投り込む事が出來ませんで、徐つと取除けて置きました。

○我の希望

南埼玉　春野

大きな家をこしらへて記者先生と女子文壇愛讀のお姉樣とたのしく一生を送りたいのよそれが妾の希望。

笑話

松料局選

三等

○新しい魚

福井縣丹生郡吉野村余田　片山千里

奥樣「魚屋さん此の魚は少し古い樣ですね」
魚屋「いーえ奥樣昨日も誰やらそんな事をおつしやいましたけれども、全く新たらしいのでございます」。

四等

○大丈夫

和歌山　岡崎さき子

甲女學生「貴女のお國は大そう水で荒れたつて新聞で見ましたがお宅は如何ですか」
乙女學生「ありがとう宅は大丈夫よ家は借家ですし商賣が石屋てすから」

五等

○目的

長崎市舘内三番戸　山口蝶子

甲少女「貴女は卒業前てすが卒業したら後の目的はどうするの」
乙少女「私の目的は卒業の後ち赤飯をたいて祝ふのよ」

○香水

民子

娘「でも私なんぞが斯樣な物を買ふと笑はれるかられー」商人「いえーなにあの吉村さんの娘さんもれ私が買ッたなんて外所へ行て云はないて御呉て一ッ買て置きましたてすから。」

○割引

茨城縣　小松崎つぎ子

甲「妾は女學校へ、入學しやうと思ふが月謝はいくらでしやうれ。
乙「一ヶ月五十錢だといひます。
甲「學生はいくら割引があるてしやう。

○無邪氣

長門　白露子

教師子供に向ひて「あなたは何故遲參したのです修身の時何と云ひました
子供「道て遊んてましたの　朝寢したのでは有ません

○會話

横濱　井上久子

先生「中村さん何を話して居るのです、今何の時間だとお思ひてす。」
生徒「今は會話の時間です。」

○生馬の目

京橋　久子

田舎者派出所へ來て「ヘー一寸くら伺ひやす己ぁ東京へ來たら見べえと思つて居やしたが生馬の目を抜く所ちうはどこてがんす

○理想

長門　田口たつ子

妹「姉さん理想つて何？
姉「理想つて理想よ外に云ひ方はないわ
妹「やつぱり姉さんも知らないのだわれ……

○ねいさん

靜岡縣　加藤だい

冬「あなたは姉さんが二人あるのれ」夏「いゝえ私一人よ」冬「あら二人よ」夏「でも一人は姉さんの姉さんだもの」

○つまみ食ひ

山口縣　深霞女史

奥樣が御飯の時に棚を見てあら梅や御豆はどうしたの？はい腐つて居りましたから捨てましたまだ腐る筈はないがと以後注意して居られると毎日の樣に何や彼やとなくなる或る日下女はつまみ食ひに餘念のない時梅やおまい何をして居るの？下女眞青くなつてはい奥樣まだ腐つては居りません

○巡査と愚者

京都　村上梅子

巡査「オイ貴樣は何處の者だ」愚者「わしは熊やんと同じとこじや」巡査「年は幾歳だ」愚者「熊やんと同じ年じや」

○燒いた種子

鹿兒島　柳子

子供「かあちやん此とうもろこし、來年の種子にしてれ」母「まあ、燒いたとうもろこしなんかだめですよ」子供「なぜ、それでもこれまくと燒けたとうもろこしがなろよ。」

讀友倶樂部

文學顧問

問　妾は雜句語を學びたいと思ひますが東京で雜句語を敎へる學校はありませんか、自宅敎授所はありますかまた讀本か何かありますか（本郷、秋山八重子）

答　ラテンは範圍の狹いものですから外國語學校で敎へる位なもので迚も女子の學校で敎へる處はありますまい、讀本もありません、自宅敎授所だつてありません、あれば特別に賴んで敎えてもらう位の事でせう

問　記者樣、號は何かより處がなくむやみにつけるものではないのでせうか、一寸お伺ひ申します（一少女）

答　左樣雅號はいろ〳〵のはづみでつけるもので、偶然につけるのもあり、考へてつけるのもあり、面白半分につけるのもあり、必要に迫られてつけるのもあり、先輩につけて貰うのもあり、假につけて一生用ゐる人もあり、いつも變へて居る人もあり、より所の深いのもあり、意味のないのもあり、一概には言へません

問　私は此女學校を卒業しましたら東京の美術學校に入學致したふ存じますが何處がよろしいでせうか成丈一年位で卒業が出來て裁縫刺繡をおもにする所は御座いませんか（陸前、加藤片破月）

答　女子英學塾、共立女子職業學校などは何うです、何れにしても一年で卒業はむづかしいです

問　記者樣妙な事を伺ひますが、本を送りますのには何匁でも一册ならば帶封で送つても宜しいのですか、又何匁に付て何錢の郵稅を拂へばよいのですか、必ず次號で御知らせ下さい（東京市小石川區表町百〇九北澤房子）

答　二册以上でも帶封で送つて差支えないのです、三十匁毎に金二錢の郵稅を拂ふのです、三十匁を超過すると三十匁以上六十匁まで金四錢、以上其割合です、但し重量は三百匁迄と限られてあります、これは書籍のことです、雜誌は又規則が違ひます

問　何ひ上げ候國語を學ぶには如何なる書物が宜しく候哉御敎へ下され度候（南總ＨＳ子）

答　『言海』は能く國語を集めてあります

問　記者さんに伺ひます、里見八犬傳は何所の發行が一番分り安くて善いでしようか、其の代價を共に知らせて下さいませ（南總、秀月女）

答　博文館發行、帝國文庫の中の八犬傳が最も讀み易い、一册六十錢で三册續きですから一圓八十錢になります

問　記者樣新聞の小說、小品文などに禁轉載或は不許轉載としてあるのはどういふ譯ですかお敎へ下さい（下谷、峰子）

答　其作を外の雜誌、新聞、又は書物に載せてはいけないと云ふ事です

問　宮中の女官とまではゆかずとも宮中に仕へるには如何なる手續を經べきか又學力はどの位要するか何卒明細にお敎下さい（哀願女）

答　第一は身分でせう、身分の低い者が宮中に仕へることは一寸出來ません、學力で宮中に仕へ得ると思へばちがひます、手つゞきと云つても身分さへ高ければ自然に出來るでせう、公然天下に發表すべき手續きがあつて女官になれるわけのものでありません、更に考へなほして御らんなさい

問　小說黑潮後編の發行所及び定價等御敎示の程願上候（本所、茂枝）

答　「黑潮」後篇は未だ出ないでせう

問　前の俳句欄の秀逸に姬百合を折れば神秘の匂ひかなと云ふのがありましたが神秘の匂ひとはどう云ふ匂ひか御敎へ下さいませ（三重長井漣月子）

答　假に姬百合の匂ひとは何んな匂ひかと尋ねられたら說明に困るでせう、匂ひは說明できません、只比較して百合の匂ひは何の花の匂ひに似て居ると說明するより外にないのです、されば神秘の匂ひも說明は出來ません、作者が百合の香を神秘に感じたので、神秘とは何かと問はれたら神秘は神秘なりと答へる外仕方がないのです

問　河井道子先生の住所を問ふ（大阪、中野秀枝子）

答　麴町區五番町十六女子英學塾內

問　太田三郎先生の住所を問ふ（いり子）

答　本郷眞砂町一番地多賀館方

問　國語傳習所は何處にありや(小枝子)

答　神田三崎町一丁目

問　大槻文彦氏の日本文典の代價發行所(野田町愛讀者)

答　中等教育日本文典定價二十五錢京橋區南傳馬町吉川弘文館發兌

諸孃と記者

○記者様文はよほどうまいのでなければ紙上にのせて頂けないのですか、いつも出て居る文はどれもよりぬきばかりですか、まづいのはみな沒收されるのでせうね、宿所姓名を記者様だけにお知らせするのにはどうすればよろしいのでございませうかなにとぞお知らせ下さいませ、(すが子)記者曰、まづいのは沒收になります、紙上に出る作の何の點まですぐれてゐるかは比較上の話です、宿所姓名を記者に知らせるとは、例へば此原稿の如く紙の端へ欲いて置くのです)○私は記者先生に御わび申さればならぬ事が有升其れはよくも本誌を拜見致しませずと先月初て誠につまらぬものをたび／＼投書致しました事です、日夜御多忙の記者様に御手數をかけまして何とも相すみませんこのゝちは毎號必ず熱讀致しまして皆様の御文章に追ひつける樣になりましてからまた先生の御厄介になりますつもりです(大阪清子)(記者曰、ものゝ順序をわきまへられた仰せ、謹んで承りました、何うか熱心に讀み、熱心にお作り下さい)○森田赤諾子さんに、仰せの事は賞品を發送した後に拜見しました、殘念ながら何うする事も出來ません、此次には賞品發送掛宛にして申込んで下さい(記者)

○記者様いつもご壯健でお愛度く存じ升先日は隨分大嵐でしたれ當地は非常な被害です私の村でも六人の死者がありました其他不思議なのは私の家から十五町ばかしはなれた大きな山が崩落して其の上に廻り十町もある大池ができましたそれて毎日見物人が二三百人位通り升田舍ですから種々な迷信的な噂とり／＼です(登久子)(記者曰、お國が書いてないから、何處か分りませんけれど、何れ山に近いお住居らしいです、全く大洪水には、左様な事變も多かつたでせう)○記者様私は如何にも字が下手で困ります、少しきまつて書きませうと思ひますと大變な醜て御座います卷紙一本はへりてです、それて切めては八十の手習でも致さうと存じますが一冊の手本をどういふ風に習ひましたら早く上手に成る事が出來るてせうか、恐れ入りましたが御教へ下さい(東京、さだ子)(記者曰　記者も字が下手だから御挨拶申上る資格はないかも知れませんけれど、一つの字を手本通りに好く書ける迄十日でも二十日でも習ひ、一つがうまくなれば次へ移ると云ふやうにすると字は上手になるさうです)○記者様に御願ひ致します私はしづがやの娘です兄三人は上京して新聞や牛乳配達をして勤強して居ります私も同窓の友が日々に高等な智識をたくはへて行きますので誠に口惜しくてたまりません私は一思に家出をして土にかじりついてても理想を貫きたいと思つて居りましたが一人の朋友にとめられてしまひまして一先づ思ひ止まりました記者様どこかに私を下女に使つて下さつてそして女學校へ入學さして下さる家はありませんですか私が理想を貫いたあかつきには必ず御恩はかへします記者さまいかがでしようか誌上て御答へ下さい(すみれ女)(記者曰、下女に使つてくれる家はあつても、女學校へ遣てくれる家はありません、あつても學問と下女仕事とは兩立しません、志望は結構ですが無分別な事はせずに、時機の來るのを待つて安心して勉強する方針をお取りなさい、此事はしば／＼言ひました)○記者様短篇小說投書するのに六十行を必ず一枚の半紙にかゝればなりませんかそして其他の文章でも皆一枚しか用ひられませんか一寸お知らせを願ひます(白露少女)(記者曰、一枚に六十行は書けません、三枚になつても四枚になつてもかまひません)○下總の田村敏子さん、今月の十五日迄の原稿は來々月發行の誌上に載ります(記者)○麻布のすみれ女さん、小說につきての質問は麻津先生に直接にお伺ひになりませんければ何とも御答へ致されません(記者)○旅順の二葉女さん、滋賀の樂子さん、お寫眞は一應拜見した上でなくては確答は出來ませんが差支なくば御送り下さい(記者)○北見の田初さん、關本町の池田光子さん、投稿は女子文壇社宛て宜しいのです(記者)

○佐賀、山櫻。鈴木粂子。高知、紫陽花。峯岸みつ。京都、人見鏸子。秩父、町田伊津子。本郷、鐵の花。石尾、武者きく子。長門、田[illegible]女。京橋、尼子喜子。俵文子。あき子。濱名太田みつ子。沼津、渡邊とよ。つれ子。大阪、鎌田春枝。春野露女。ひさし。和泉、高橋輝子。本郷、保延七草子。茨城、登與子。紀伊、岩田すみ子。千葉烈子。本所理子。京都、若紅。新

四、山田たか。石見、松瀬信子。山陰、賢女英月。乳深初音。濱田、三明千鳥子。下野、累陸。愛知、石黒まん子。南部、清子。土佐、長崎てる。安藝、宗子。若狹、むらさき女史。芳子。静。水戸、貞子。大阪、幸枝子。熊本、富丸若子。神田、谷鶴子。貞女。神奈川、篠崎磯子。大阪、こゆき。佐渡、中川ふじ子。愛どく女。名古屋、蝶子。鳥取、薇々子。因幡、三橋寿子。千葉、吉原靜江外一同。喜代子。下野、すみれ子。野の花。隠岐、白露。山里百合子。靜岡、山北千代子。深川、喜代子。紅葉子。京都、宮原みどり。千葉縣、一女。羽前、樋口紫子。埼玉縣、佐久間多満江。千葉縣、柳月女。日本橋、一少女。門炎城、田村波弥子。大阪、四端芳枝。北海道、五十嵐しげ。信濃、依田芳枝。下總、柳すみ。周防、朽葉子。越中、おぼろ月。宮城縣、日高花子。岩代、せん子。鹿兒島、菫子。鳥取、猶笑子。京都、望月峯子。上毛、松村千代子。下野、今井清。淺草、大村富美子。新舞鶴、吉田貞子。大阪市、二三女。本郷、磯子。下總、花岡馨子。伊賀、山村りやう。意の人。長野縣、白井須賀子。以上諸嬢からのお申越は一々拜見しました別に差支ないことにはお答致しません投稿規則は毎號の卷末にありますから御覧下さい。(記者)

圖書換讀

○御不用の小說雜誌をお持ちの方は何でも關ひませんから一册宛御送り下さいお禮には上等繪葉書にリボンを添へて、猶先着十名へは婦人世界女學世界文藝倶樂部の何かたも差上げます(北海道小樽郡錢函村新開花子)○妾の手許に小說不如歸の新しいのがありますから不如歸の歌とお換へ下さる方は御申越し下さい(鹿兒島市東千石町三三小牧君江)○手元に面白き本澤山ありますから何うぞ御交換を(秋田縣河邊郡濱田村松谷方石山やえ子)○妾は音樂が大好きです手元に陸奥の花、信濃の宮、扇の礎、信濃の春秋、六段の曲、讃岐の院、其他澤山ありますから新製の栞かお寫眞にてお申込あればお送りします(信濃國上水内郡大豆島村市川豐治郎方青木茂子)○諸姉樣妾の手許に小公子、黑潮、冒險奇譚、お伽噺類の本及び和歌俳諧の山文、少女界等ありますから何なりと御交換下さい(福岡市車通り荒戸町山本松子)○幾何學辭典、代數學辭典、英和新辭典、女學世界及女子文例等不用になつて居りますから誌上にて御知らせあれば御申込み順に差上げます(德島清子)○春日信子太田君枝松田あや子樣初め外廿八名の方々先日は御送本下され難有う御座いました下毛の喜笑子樣消印にて御住所不明困りました何卒次號にて御知らせを、今後とも何卒!!(東京府下王子岩崎信代)○下野梅月子樣すまの曲お送り申しましやうから御不用の雜誌と御交換下さい御住所を至急(土佐國佐川、ゆり子)○私に鷗堂先生の書道講義錄一ヶ年半全部完結のものがあります諸賢方にて御望みの御方は御申込下さい(北海道後志國磯谷郡能津登村伊勢作太郎方すい子)○誌友の皆樣の中で大槻文彥先生著日本文典雁のゆきかひ(著者は失念いたしました)大鏡の一部でも構ひませんが御不用になつてます御方は妾の中等教育女子の作文家庭衛生訓日蓮上人(山崎紫紅氏著)詩學の資料立志成功學生座右訓自然と人生と御交換下さいませんか御待合せならば男子の方でも厭ひませんからどうぞ(日向國宮崎町上之町一丁目廣間秀子)○皆々樣私の手許に露營の夢、殘月、金剛石、簡易箏曲集、八段ノ曲、殘夢、俗樂全集等のヴアイオリンの樂譜及び人の妻(小說)眩雨笠、若き妻、等の本を持て居ますから皆さまの中で魔風戀風、金色夜叉、天うつ浪をお持ちの御方はどうか交換して下さいませ(廣島市國泰寺村九十番地ノ一兒玉みさほ)○幸ある諸姉樣達よ妾に「女訓解釋」「女學生訓」いづれかを御貸し下さいませんか「日本新用文全」「新編女子記事文」其他種々の雜誌にてもよろしく御禮のしるしとして御返却します(山口縣大島郡油田村梅部滿子)○春雨著無花果、葵山著貴族の戀、狹衣著日の出島、高砂の卷、文藝倶樂部を所持す木下尚江著良人の自白(四册)と交換下さる御方はありませんか(大隅國肝屬郡田代村館大佐賀ふき子)○皆樣のお内に不如歸、金色夜叉、蝶子、魔風戀風、黃菊白菊、美辭寶典などありませば私の詞のしるべ、廣島みやげ、英作文本、字音かな遣ひ、健腦法、遊學案内、萬國地理問答、博物學問答、物理學問答、英學生、女學世界、文庫、英字新聞、文藝倶樂部、少年界其他當地のゑはがきに栞を添へてさし送ります何卒御交換下さいお願します(廣島市千田町中井永次郎方あさ子)○妾の許には文學訓、才媛文集、女子消息文範、作文寶鑑、平家物語、古事記、自然と人生、新體詩集、女學生訓、不如歸の歌其他小說類と雜誌は各五册を有します先着五名に限り妾のみにくき寫眞を神に誓つてよ(靜岡縣駿東郡北郷村大御神天野

英子)○姉上たちの御手許に夏子、不如歸、伯爵夫人、乳姉妹、金色夜叉、己が罪などを御持ちの方はどうか御惠み下さいましな御禮には御望みにまかして絹ハンカチ絹栞りに刺繍を入れたのか家庭の友を二册づゝ御送りいたします(岡山市東中山下百十九四岡龍子)○妾は古小說、峰子、横戀慕、多情多恨、ひとり寐、青春(春夏二册)世間娘氣質、麗子夫人、奇美人、戀無常、戀女房、の十册を持て居ますから御望の方は相當小說又は舶來繪葉書で申込んで下さい(石川縣羽咋郡中甘田村福野岡部よし子)○誌友のみな樣方の中に、孝女白菊、己が罪、女夫波、不如歸、の新體詩が御座いますならば私しに送つて下さいな必ずゝゝ小說本か何かで御禮いたします(牛込區市ケ谷田町三ノ七鈴木方谷欣子)○御許樣方の所に草村北星の著百合子御持の方は御一寸下されよ必ず御返禮致します又同じ人の著した露子夫人もね願ます(越後西蒲原郡燕毅町五〇二五十嵐文子)○愛讀者の諸嬢樣よ書籍の交換を願ひますよ諸嬢樣の中に不如歸を御持ち合せの御方は送りて下さい其の御禮に新夫婦、戀女房、濱子の小說を御禮致します(佐賀縣杵島郡北方村松村八重子)○皆樣の內で新不如歸、朝晴、はま子、夏子、文藝倶樂部なにゝても女子に關した小說を御送り下さいな、私の所には女學世界、少年世界、少女世界、少年界がありますから御交換をねがひます(長野縣稻荷山上八日町中島よし)○誌友の諸姉上樣よ何卒書物の交換を願ひます妾の許に白百合、叢菊白菊、及び栞繪端書等大に不用の者ありますから諸姉上樣の中で入用な御方は御申込下さい又繪端書を送つて下さつた方には御禮として本誌(但し、古物)を一册づゝ返禮致します(下野國苑川村小塙佐藤かほる子)○讀者の諸姉上樣私の手許に素人藥物學、教育學、教育史、家事教本、教育小說、小說叢書、赤毛布、末廣鐵腸作雪中梅、南翠作隱君子、女學生訓、手輕食パン製法、卯花月夜、其他文藝倶樂部、女學世界、文藝界など數部御座います食道樂か其他御不用の本と御交換下さいまし(大阪市東區神崎町八番地生島方峰山元子)○さて朝夕は少しは涼しくなりましたが諸姉樣方には御變りもなく御愛度御座ります諸姉上樣方も御承知の通り我山梨縣は非常の大水害でありまして私なども命だけはとりとめましたが自分の好きな書物なども皆流してしまひまして他人の家に厄介になつて其日を暮し居と云ふ哀れな有樣です諸姉上樣の中に青海やまた何にか國語の書物を御持ちの方は貸して下さりませんか又讀み古しても宜しふ御座りますが婦人の讀む新聞を送つて下さりませんか御恩は死んでも忘れません(山梨縣中巨摩郡國母村後屋遠藤靜江)○私の許に左の不用書がありますから繪端書にて申し越して下さい篠原嶺葉氏のハイカラ合孃、士手の道習、妾腹華族、四國立志編、古き文藝倶樂部、日本歷史辭典、女學世界、美辭麗句、ムラサキ、女學生、絹栞をお持の方はお惠み下さい乾度お禮はいたします(千葉縣夷隅郡國吉町刈谷今井直子)○誌友の姉上樣妾の元にハイカラ田舍娘、女子記事文林、己が罪、女學生の氣質、戀か夢か、澤山の夫婦と其の外不用の小說ありますから姉上樣御不用男波女波、夏子、伯爵夫人、心の波上中、御持の方は御交換を願ひます(秋田縣河邊郡新屋町矢野はな子)○諸姉樣の中に少女界三卷三號及び五號を御不用の方は私の女子文壇と御交かん下さいませんか又外國少女鏡、內國少女鏡其他の小說雜誌何年のでも結構ですからおかし下さいな讀み終ればすぐ御返却致します御禮には女子文壇、少女世界、少女界を差上ます(東京府下町田村池田白菊)○皆さんの內で雜誌婦人、文庫、新聲、中央公論、ムラサキ、婦人世界、花守、花守日記、順禮紀行、作歌入門、玉むし、女夫波の歌等御送り下された御方には妾よりは源氏物語、萬葉集、廿八宿、夢の跡、小詩國、新詩辭典、青海、あけぼの、おもひ草、女學世界、女子文壇何外に澤山ありますから御好に應じ差上ます(肥後國菊池郡菊池村佐藤なほ子)○誌友の諸姉樣、私は樂書文學の一卷一號から三卷終號まで取揃へて持つて居るので御座いますが一卷二號と三卷の臨時增刊みつ潮が欠けて居りますのでお持ち合せの方が御座いますなら御惠み下さいませんか御禮には手製の栞か繪葉書で必ず御返しいたします(大阪市東區上本町八丁目番外三九二、蛇川方佐野玉屋)○左記不用の書籍御座います御入用の諸嬢方の御申込に應じて御頒ち申します但上等繪葉書のものに限る、心の波、花たば、百合子、母の面影、ヴエニスの商人(山口縣玖珂郡川越村野水みつ)○諸嬢樣の中で七八九月發行の婦人世界御持の御方は繪葉書編物の類と御交換願度御座います右の中一册だけ御持ちの御方でも宜敷御座います(東京市下谷區御徒町一ノ七橋本なみ子)○私の手元に色々の小說が澤山あります諸嬢が讀

み古しの小說と交換してくれませんか先者二十名へは私の寫眞に繪葉書三枚一組を添て御返しします（下總海上郡富浦村辨官寺區湯淺方松崎千代）〇ローレライの譜を御存じの御方が御座いましたらば賦かせて下さいませんか（麻布六本木町廿八番地 細谷茂子）〇姉樣方の御內に女子遊學便覽御不用の方は御送り下さい御禮はきつと其以上のものていたします又女子大學高等師範の規則書御送り下されし方にも右と同樣まちがひなし（讃岐多度津濱町 香川政子）〇諸姉樣姿は、思出の記、不如歸、不言不語、大福帳其外新小說、新不如歸、國民中學會の講義錄第一學期全部より第二學期全部、中學生本年二月發行より次々其外種々持て居ますから皆樣さうとうの本と交換したいてす、乳姉妹を送て下された方には右の內望の物を送ります（熊本縣鹿本郡中富村下分田 九八八 富丸定安方若子）〇誠に申し兼ねますが皆樣の中にて「文庫」の八月號御所持の方が御座いましたならば、私の近刊新聲、北光、詩人、ムラサキ、ホノホ其他の書物と御交換下さいまし（麴町區土手三番町二十二 山下里子）〇皆樣の內に金色夜叉の脚本、青春秋の卷、朝晴等御持の方は私の小說小夜しぐれ、青春の春の卷、事實小說橘英男、中等作文辭典、ミユイアーヘッド原著倫理學等と交換して下さいましな且又御自分の寫眞か上等の繪はがき一組以上て申込だ方には御送り申します（佐渡新穗村長畝 土屋木瀨子）〇諸友のなつかしき諸姉樣方の內に文藝千草の錦、雜木林、文章組立法、蕪村句文集、涙痕集などの書物が御不用てありましたら、私の萬國地理學七十五錢、生理學七十錢、生物學六十錢其他中學世界、青年譯會、少女界などの舊號雜誌と交換して下さいな（新潟縣佐渡畑野村栗野江 谷川桂月子）〇絹子、想夫憐、濱子、御不用の御方樣は何卒私に御見せ下さいませんかすぐ御返し申升御禮は相當に致しますから又私の持てる小說と御交換してもよろしう御座い升（仙臺北六番町六十三 橋本讓久子）〇諸友の姉上樣私は田舍の者てありまして一昨年より病氣にかゝりましてぶら〳〵してゐます就きまして皆々樣の內に己が罪の下、及び不如歸をお持の方がありますればお惠くださいお禮はきつと致します（岡山縣和氣郡神根村大字神根本北川はつれ）〇諸嬢樣の內て明治卅八年以後の音樂學校入學試驗問題御持參の御方は私に御讓りか御貸しかして下さいませんか御禮は必ず致します勿論甲種師範科入學試驗てす出來ますならば本年度のを願ます（福岡縣嘉穗郡穗波村大字堀池細川茂樹）〇皆樣私しの處に藤村詩集、青海、作文熟語辭典、女子教育管見、婦人の日常生活法、露子婦人、無花果、谷間の姫百合、夏子、不如歸、ハイ子の詩其他まだ澤山不用な書籍も小說もあります何方にても源氏物語、伊勢物語、土佐日記お持ちの方は御交換下さいまし（長野縣下高井郡岳北の地山里百合子）〇諸友の皆樣のお中に、詩集二十八宿、みだれ髮、さゝぶゑ、顆欒、暮笛集、花守日記、夏廂、舞姫、ハイネの詩、わが想ひ等御不用の方がありますならどうぞ御惠贈下さいませ、私は當地名物のあの「信夫文字摺」のハンカチーフ或は半襟て御禮致します（福島市上町福島民友社內澀德金三郎方むらをか）〇今妾しの手許に土佐日記、青葉若葉、青年と處世、美文韻文の料、帝國畫報、日本歷史、西鄕傳記等の不用書が有りますから皆樣の中て上等の繪葉書八枚に寫眞一枚を添えて御送り下さつたお方に御望の物一部と其の餘に秀才文壇一部を添えて進呈致します（丹波國船井郡桐ノ庄字熊崎 大下增太郎方青山みどり）〇皆樣の內に今村農學士最新蔬菜栽培書、蔬菜園藝教科書、和洋草花培養法、園藝教科書、學校園設置法御送の方には作文辭書、地文教科書、小說女浪人、朧月夜、和洋禮式女子の手藝、宇宙之歎示、神島正統記と交換を願ます（下野栃木錦町一七八番地 大島海十郎方岩木芳子）〇貴姉上樣よ妾の手許に己が罪、不如歸、夏子、兄の仇、少女錢、金色夜叉、ほとゝぎす等の書が不用になつて居りますから皆樣の中て思出の記、寵風戀風所持の方は交換を願ます（福島縣伊達郡福田村大字羽田字宮前十番地三浦高子）〇諸嬢の中に不如歸の歌、絹子、己が罪、濱子等御持ちの方は私の思出の記、女學世界、日本の少女、婦人世界などゝ交換して下さいませんか高價のものは相當の御禮をきつといたしますまた未使用の上等舶來の繪葉書て御申越しあれば雜誌なら何冊でも送ります。（岐阜市京町二丁目林奕也子）〇諸姉樣方にて紅葉全集、千草の錦、娘に與へる母の書翰、公爵夫人、露子夫人御不用の方は私の女學講義前後どちらでも婦人技藝講義第四號より每日新聞、夏子、絹子、嫁が淵、朝日櫻、寵風戀風と換へて下さる方はありませぬか（山口縣阿武郡小川村須子常子）

繪葉書交換

○繪葉書の御交換や玉章の御交換を願ひます（和泉國泉北郡南池田村萬町　高橋婦子）○滿天下の諸愛讀諸君よ美麗なる繪葉書交換を望む返事即日（新潟縣中頸城郡島坂村大字中宿一八尾島隆子）○誌友の諸姉樣妾は初めてこゝにお仲間入なさして頂きます然し學校の都合で來年四月當地を去るかも知れませぬがそれ迄の間は當地に居りますから何卒繪はがきの交換を願ひます（京都市外伏見京町大黑　星野とみ）○皆さん御願ひよ何卒聞いて頂戴や妾し大層エハガキが好きなのよ御同情して下さる方々何卒々々交換して頂戴な願つてよ（丹波國船井郡入木村春日神社より二軒目福嶋榮子）○誌上の姉上樣よ私は淋しい田舍に佗しく月日を送つて居りますから繪葉書御交換を願ひます（秋田縣雄勝郡稻庭町　石川榮津子）○誌友の諸嬢樣よ繪端書の交換を永久に願ひます返信は必ず致しますから御住所御名前を明瞭に願ひます（東京市赤坂區田町七ノ一櫻田方杏芽子）○誌友の諸姉上樣方よ美人繪はがきの交換頂戴ずぐはがき第四種郵便にて着否や御返事は戰役紀念繪はがきに紀念スタンプを押印したるものを御送附致し升（山形縣西置賜郡小國小坂町中津川いはきち子）○東京帝室博物館御發行二十五週年紀念端書二枚一組御望の方あらば僅に十組ありますゆへ未使用の外國製花の繪葉書三枚づゝ開封にて御送りの方へ差上ます（東京神田元久右衛門町二ノ六服部萃子）○繪葉書に和歌一首俳句一句書いて亦寫眞編物雜誌玉章など御送り下さい特に拙ながら敬慕せる我縣の誌友樣に願ひます（下野那須郡荒川村森田三八須藤榮子）○妾は此度初めて愛讀者になりました何卒皆々樣博く寫眞や繪ハガキ（但し未使用）の交換を願ひます（石狩國雨龍郡北龍村伊藤よし子）○諸姉樣私は俳句が大好きですから繪葉書に俳句を書て送つて下さい（熊本市細工町花里白島）○親はしの諸嬢よ淺學の妾を御見捨てなく和歌俳句自筆エハガキ（水彩畫）の御交換を願ひます（千葉縣香取町香取小林露江子）○懷かしき誌友の姉樣よ相變らず繪葉書の交換を先着十名限り北越風景の繪葉書一組づゝ差上ます猶は寫眞編物の交換も（越後古志郡綱道遠山藤吉樣方日下きよの子）○淋しき田舍の私にいとゞ戀しき繪葉書下さいまして誠に有難御座いますそして皆樣寫眞の交換もねがひます（栃木縣下都賀郡寺尾村字尻内福富清子）○御見捨なく繪葉書の交換を願ひます御返事には善光寺紀念スタンプにて必ず〳〵差上ますよ尚古本の御交換も願ひます御返事に少年界、少女界、なとめ、など上ます（長野縣下高井郡中野町上小田中町田さみ子）○皆樣美しい繪葉書を送て下さいまして誠にありがとう此上ながら御見捨なく繪葉書玉章などを送て下さい（大阪市東區内久寶寺町三丁目四番地和田時子）○本誌知名の作家に繪葉書交換を希望致します（和泉貝塚町本町笠原春之助方にて辰井はな子）○皆さん私は田舍の一女學生てす どうか御交際を願ひます繪端書の御交換なも願ひますよ（丹波氷上郡柏原町内田澄江）○妾はこんな山奥に住んで居ります何卒が文學が大好きて女子文壇を愛讀してます何卒諸嬢さま各地名勝繪葉書を御惠送下さい北海名勝繪葉書を以て必ず返禮致します（北海道石狩國雨龍郡（妹背牛局區内）宇和吉永豐子）○皆樣が不相變御文通下さるので妾嬉しくつてなりませんのよどうぞ皆樣永久に御交際下さいましな又妾は當韓國皇帝陛下即位紀念スタンプ付繪葉書を四拾枚計り持つて居りますが舶來繪はがきか珍らしいスタンプ付繪葉書と御交換下さい御送り下さいましたら直に御禮申上ます（韓國京城旭町二丁目奥田千草子）○誌友皆々樣懷しき御玉章又繪はがきに和歌を認めて御送り下さい（日本橋區矢倉町九生方綾子）○皆樣妾は世にも幸無き孤獨の者てすから繪葉書が何よりの慰めてすどうか和歌か新體詩を書いて下されば猶結構てす（大阪南區大寶寺町東三丁目廣島内加津子）○田舍者の何も知らない者てありますが繪葉書が三度の御飯よりも好きてありますから御姉樣方の御持ち遊ばしてる色々のと御取り換致したいのであります（千葉縣印旛郡三里塚櫻小路春江子）○御懷しい誌友の皆樣美しい繪ハガキありがたう妾歸省して居ましたので御返事の後れた方も御座いましたがどうぞ惡しからず此後も繪ハガキや玉章の交換を御願申します（信濃國上水内郡大豆島村市川豐治郎方青木茂子）○どうぞ繪葉書交換を願ひます（神奈川縣立高等女學校寄宿舍大角くま子）○每度交換して頂きましてありがたうエハガキのよいのを願ひます（近江國栗太郡下田上村字里山中久松方きみ子）○誌友の皆樣妾繪葉書、外國繪葉書、肉筆繪葉書などを持つて居りますが料理法の書類及び附つき編物などを御送り下されし方に限り先着十二名の姉樣に御望みのものを送ります（大阪市南區内安堂寺町三丁目三番邸渡邊みれ）○親愛

なる姉上樣給葉書澤山下さいまして難有存じ升此後も御交換れがひます（京都四條寺町赤井又七樣方中島花子）○永久に趣味ある繪はがきの交換を願ひます先着ヶ名へ寫眞にて返禮致します（大阪江戸堀上通二丁目伊丹榮次郎方岩田學子）○誌友の皆樣 私の手元に舶來の繪はがき三十枚美人はがき名所はがき等合せて二百餘枚ありますから何卒繪の方へ歌俳句詩など書いて交換を願ひます（福島市新町六七 石田芳子）○誌友の諸姉樣方美しの御繪葉書澤山御惠み下され有り難く一々御返事を差上た筈ですがもし登つて居らぬ方があれば早速御知らせ下さいそうして此後も益々御交換を願升（京都四條寺町郵便局上田靜子）○何卒スタンプの交換をして下さいな皆樣お送り下さい着次第お返事致します寫眞の交換も願ひます（播磨國揖保郡千本村本佐野方泉つゆ子）○なつかしい皆樣よ妾は田舍に住んでゐて各名所の繪はがきを集めてをります何卒各地の名勝繪はがきを御送り下さい御禮としては妾埼方の名所を送ります又音樂も好きなのよ曲譜の交換を願ひます（山口縣玖珂郡柳井町友重方村田紫子）○諸友諸樣の君よ妾は幼き頃から郵便古切手や古葉書を蒐集するのを一つの樂しみとして居ります只今の處では大方一萬の數に近うなつて居ります皆樣の御内へ來た郵便の古切手の部分のみを剝いて可成澤山送つて被下方はありませぬか遞信省發行戰役紀念葉書數種、女學世界、秀才文壇其他不用の小說等及粗末ですが自筆の繪葉書を添へて屹度御禮致します（大阪府東成郡榎並村大字内代川中與榊谷すえ子）○繪葉書の交換を お願ひ申します（大阪東區北渡邊町 冨谷百合子）○私はクリスチヤンですが皆樣の中で御惑じなされた聖句又は御好な讃美歌を繪葉書に書いて送つて下さい私方よりも聖句とか讃美歌を書いて御返禮致し升尙カード玉章の交換を願ひ升（宮城縣登米郡登米町千葉よし子）○御地の風景等もぞく〳〵御知せ下さいな妾も當地の風景繪葉書を御送り申上ます（神奈川縣久良岐郡六浦莊村三分大道長島すが方長島まつ子）○妾各地方の名所の繪葉書を集めたいのでござい升がどうぞ贈つて下さいませんかお禮には吉野の櫻とならび賞せらるゝ牡丹の名所長谷寺の繪葉書をお送り申ます（大和國宇陀郡伊那佐村 山村きくゑ）○妾は美しい繪葉書や諸雜誌の交換が大すきなのよどうぞ皆樣多數交換を願ます（愛知縣知多郡大府村大字長草 加古香美子）○繪はがきなり寫眞なりの御交換を御願申ますことに御寫眞を御贈り下された御方には美麗な繪はがきを以て御禮申上ます私は田舍に居りますけれどエハガキ丈は自分ですきの爲上等の品をも澤山あつめて置きますからどうぞそれ（越後沼垂町字吉原大橋たま子）○私は只今臺灣總督府始政十一周年紀念繪葉書を二組持つて居ります内壹組（紀念スタンプ付）と政府發行の觀艦式紀念繪葉書壹組と交換したいですが御望みの御方は書留郵便で送つて頂戴な（安藝國加茂郡廣村 大新開吉岡智惠子）○切望繪葉書交換の者に御座ります何卒宜敷御交換をれ殊に紀念スタンプ付寺院神社の印影ある物歡びます（京都市岩上高辻上ル 山本彦方紫雲子）○誌友の諸姉樣よ種類の如何を不論ず繪葉書の御交換を永久に願ひます失禮ながら先着の方五名には舶來珍品にて御返禮致します（大阪旭旁町二丁目 山下誠）○皆樣私エジプト、イギリス、ドイツ、ロシヤ、フランスの古切手が七十二枚ありますからお望みの方はエハガキて申し込んて下さい、エハガキに古切手五枚づゝ添へておくります（岐阜縣山縣郡谷合高等小學校大野清枝）○誌友の姉上樣よ妾は繪葉書や玉章の交換が大好きてすから永久に御願ひ致します先着者五名には美しき繪葉書に栞を添へて御返し致します（京都市上京區新烏丸 夷川上ル戸野榮樣方羽倉信子）

寫眞編物交換

○誌友の諸姉さまたちよ私は只今不育な寫眞が二拾枚ありますからみなさんよ御寫眞、雜誌、美人繪葉書等にてどし〳〵申込下さいませ但し華法男子と認めましたらおことはり（近江坂田郡鳥居本町字中山 平田道子）○誌友の姉上樣方私は水彩美女畫はがきを少し持つて居ます皆さんの中でひぢつき下さる方には品によつて二組以上差上ます私の寫眞も必ず添えます但五人樣限り其他は私の造つたものて御返しします（大阪南區宗右衛門町 福岡方宇野靜江）○今度はエハガキ交換に并せて皆樣の寫眞一葉づゝ御送り下されませ只今は手許に三十六枚ありますが田舍とは云ひ寫眞館もありますれば何時にても燒增をしてもれなく御返し致します（高岡市通町三十一番地北本歌子）○何卒繪葉書の交換して頂戴な又私は編物が大好きなのよてすから絹系やいろ〳〵のひな形も御惠み下さいなきつと御禮致しますから（深川區常盤町一ノ七川村喜代子）○何卒是から繪葉書玉章の交換を又寫眞に玉章

な添へて御送り下さつた御姉様には雜誌一部に自製の襟兎れづみ紙等の袋物か又は編物を添へて御禮致します（福島縣豐田郡佐江崎村字能地池田都那子）○誌友の諸嬢樣よ私は大へんさびしい田舍に住んでゐる者ですが御交際を願ひます又諸嬢樣の御寫眞を御送り下さい是非編物て御禮致します（滋賀縣甲賀郡多羅尾村平田しげ）○妾は編物や寫眞が非常に好きですからどうぞ願ひます御禮としては家庭新聞や福岡日日新聞（一ヶ月分）是れは何時迄も御交際下さる御方へ進呈します其の他先着二十名には必ず雜誌類て御禮します其の他は美しい繪葉書て（福岡縣糸島郡怡土村井原酒志平太郎内よし子）○妾は學校卒業後田舍へ歸り獨り淋しく自然の景色を唯一の友として暮して居ます何卒諸嬢樣に寫眞の交換を願ひ末長く姉妹の契を結び下さいな（大阪府豐能郡枳根莊村字神山福西ゆり子）○寫眞や編物造花飾りボン等の交換を願ます先着二十名樣に美麗のひじつきを添てきつと御返禮致します（和歌山縣海草郡安原村字松原木下寅之助方木下美笑子）○私は編物をけいこしたいと思ひますが片田舍で敎へて下さるものが御座いません御惠み深い諸姉さまよ何でも宜しき故御送り下さいませ御禮に雜誌數と上等な繪葉書とをさし上げます（埼玉縣兒玉郡本庄町吉羽よね子）○私しは去る八月の誌上にて御交換を願ひました處五十八名の方々より美しき御寫眞御惠み下され誠に難有う御座いました直樣御返禮申ましたが殘り九名の御方にはそれぞれ不日不束な寫眞を呈しました只今十二枚計り燒増させてありますす先着者十二名樣に限り御送り申します美しき御寫眞にて御申込み下さい私しのはプラチナとブロマイドです（青森縣大野村字島田下山彦右衛門方中川寒風子）○大阪の吉田靜子さん郡山の鴨田よし子さんお二人とも手紙の只取りとはあまりひどいではありませんか尙お姉樣方よ私寫眞二十枚程ありますから何卒御交換を願ひます（茨城縣東茨城郡中妻村中山道江）○誌友の皆樣栞（絹製）御所有の御方は御送り下さい安藝の風景繪葉書でなりと嚴島管絃祭紀念のスタンプ付の繪葉書でなりと御禮致します（廣島縣高田郡根野村佐伯梢月）○御なさけ深き諸姉樣寫眞掛かヒザツキ其他色々のあみもの送つて下さいました御方には栞にてうつしネリボン、エハガキ送つて下すつた御方には其れ以上の御禮いたしますから御ねがひ申します（讃岐國多度津東濱町香川政子）○皆樣の内に絹糸編の寫眞掛かレース糸肘突かを御送り下さる方はありませんか御禮には大和名所繪葉書（但十二枚）一組のものに絹糸編の美麗なるらんぶ敷をそへてたゞちに返禮致しますよ「らんぶしき」は十個あります故先着十名樣に限ります他に後着十名へは奈良名所繪葉書一組づゝすぐ御送り致しますよ（奈良縣高市郡坂合村字檜前森本あさ子）○私は田舍の一隅にくすぶツて居る不束者ですが編物を覺へ樣と思ひましても敎へて下さる人樣がありません何卒血あり涙ある諸姉樣如何な糸でしたのでも編方さへ知れゝば宜いのですから何に限らず編物をお惠み下さいませんか相應のお禮は必ず〳〵致しますよ（陸奧五所川原町林さだ子）○皆樣のうちにハイカラ百種、好姿種、美人繪葉書其他どんな繪葉書にても袋入御惠送下されませんか御禮としては栞、寫眞掛、編物何んでも價格に應じて送りますよ栞は花形、枝折、三十節あります返事は早速男子にてもいとひませんわ（常陸眞壁郡河内村杉山定平方よし子）○私は昨年の春仙臺の女學校へ入學致しましたのどうぞ御交際をれそして美しいあみもの送つて頂戴な御禮はきつと致します（仙臺市東四番町三十一渡邊方加藤よしの）○誌友の姉樣どうぞ繪はがきや寫眞の御交換を御願ひ申ます先着の十名へは名所繪はがきを添へて御返しいたします（美作國久米郡加美村大字原田三四三池上露子）○誌友姉樣私に編物肘突栞どれか送つて下さい御禮として秀才文壇、ハガキ文學、主婦のつとめ、閨中の光明、女子文壇、婦人畫報、中學文壇等の不要書一部御送ります就いては御寫眞と寫眞掛を御送り下さる方には特に信濃新聞半ヶ月御禮として差上ます（長野縣下高井郡日野村三三五小根澤月船）○誌友の諸姉諸兄よ末永く繪葉書玉章の御交換を願ひます編物や肘突栞等を御惠みくだすつたお方には早速リボンや繪葉書で乾度御禮いたします（宇都宮市驛町六半田方木島壽子）○編物雜誌栞玉章の交換も不御禮は神に契つて致しますよ（讃岐高松市外常屋町柏原病院内横井壽代）○皆樣美しいお寫眞や繪葉書を難有う此の後も何うぞ猶未使用の繪葉書をお送り下さる方には妾の見惡しい寫眞てお返し致します（播磨國揖保郡神部村遠藤ゆき子）

諸嬢の交際

○薄倖な私の境遇を憐れと思召す御方もあらば、御手作の造花や、編物、又御地の珍らしきものを送

つて下さい御返は直ぐ差上げますからねえ空吹く風と御見捨なく永久に淸い〳〵御交際を願ひます（信濃國北安曇北城村楢川嵜枝）○惑み〳〵深き皆さんよ妾は谷そこ暗き里で御座ます語ろに友なく淋しく月日を送りて居りますあゝ慈善心に富める皆さん御交際を願ますのよ（陸前國大河原町字小山田の里 丸山香花）○永久の交りをねがひます（大阪西區薩摩堀返町寺田秋子）○玉章や珍物御寫眞の交換もね御返事はきつといたします（大阪府下泉南郡樽井村市野富子）○繪端書寫眞玉章を御送り下され然る時は妾方よりは韓國風景風俗の畫ハガキ見惡しけれど妾の肖像をそへてきつと返事は致し升（韓國龍山老松町吉谷番一内齋田ちか代）○誌友の姉上樣よ妾の如き淺學無才のものにも色々の美くしい御本やら繪端書な御送り下されて實にありがたく存じますいち／＼御返事申ましたつもりでは御座りましたが多數の事ですからおとしたのも御座りましようがぜひ惡からず御ぼし召し下されまし貴い紙上を御かり申まして一寸御返事申ます以後もぜひ御交りを願ひます又繪葉書寫眞の御交換も願ひます（本鄕區本鄕六ノ六 淸明社内保延七草子）○誌友の諸姉樣方長らく御無音に打過ぎまして誠に濟みません何卒惡しからず短文和歌俳句の交換して頂戴（東京神田區猿樂町二○角田樣方 大江眷柳）○誌友の皆樣私は小學校を卒業して女學校に入學し樣と思ひましたが家計上遂に許しませんて今は農業の傍本誌を唯一の親友として淋しい山里に唯一人月日を送つて居りますから何卒諸姉樣不便と思召し末長く繪葉書玉章並になし花の御交換を願ひます又地方新聞の御交換を御願ひ申し上げます（靜岡縣安倍郡南藁科村澤谷 牧野八重）○誌友のお姉さん妾は小千谷町の片すみにすんで居る不束者ですが末長く繪葉書外の御交換を願ひます（越後國小千谷町山口かつ方山口千代子）○御交際の榮を給はりし五十二名の御方々へ厚く御禮申上げます尙今後とも何分宜ろしく御願ひ申します（秋田縣由利郡院内村院内 四十八番地三浦紅蓮子）

懸賞品發送報告

例によつて懸賞當選諸孃に各所定の賞品をお送り申しました、猶發送未濟の部に記名のお方は至急住所姓名を御知らせ下さい。

第十一號の分（九月廿七日發送）

○服部水仙○綸澤元子○くれなゐ○角田秀子○田中久子○鈴木馨子○長谷川しん子○北本歌子○奈美木翠子○片寄しな子○野島里子○岸村李子○松ヶ枝浪江○青木たか子○山田くに子○松永しげ子○岩木美枝子○須藤元子○伏見八千子○宮城梅子○黒野とみ子○加藤つたへ○淺井こう子○失名

第十二號の分（十月八日發送）

○三輪葉津惠○鈴木幸子○未成女史○知慈子○小林馨枝○ひさ子○明野久子○紫濃子○杉山艶子○森田なか子○中里きん子○綸澤源子○森井せい子○服部水仙子○深瀨ます子○天城はな子○高橋龜枝○藤原信子○芙蓉子○加藤嬉美子○森田志滿子○栗山英子○山田沖子○さゆり子○山田てる子○佐々木げん子○犬飼たき子○橋本賀壽尾○野邊はる衣○千葉まさ子○星野とみ子○山田てる子

▲發送未濟▼○三河、若千代○山陽、秋雨女史○紀伊、三宅水仙○小芳○小石川、深山櫻木○ふみ江女史○下谷、藤雨子○江尻、筑地すみ子○失名（以上十一號分）○山梨、藤枝子○豊後、花葉子○福山、工藤以津子○水戸、重子○京都、てう子○水戸、君子○麴町、孤蘆女史○愛知、近藤重子○相模、長塚よし子○岩手、小枝子○豊橋、白井つな子（以上十二號分）

剽窃詩文の注意

第十三號の分　○越前、萬巻子。新體詩一等「化粧室」は『文章世界』一巻七號和田孤盈氏作を○紀伊、貞操媛女。論文三等「我を救ふ者は我なり」は『中學文壇』第七年第七集山本肉舟氏の作を○紀伊、前田かをる子。短文秀逸「思潮」は『秀才文壇』五巻四號阿部筑陽氏の作を

第十二號の分　○尾張、奥田久江子。和歌秀逸「夏の山」は『日本勸業銀行月報』第十六號和貝栗村氏詠を、何れも剽窃と認む。

◎今回注意を與へられたる諸孃は○大阪、もと子○北越、秋山花馨○上野、雨笠竹沼女○大隅、染香女○三河、女探偵○佐渡、中川ふじ子○麻布、一愛讀女○沼津、注告生○信濃、愛讀女○愛讀の一少女。

精讀を望む！

文壇餘興　新年旅行（新課題）

新年から文藝遊戯は文壇餘興と代ります、代りましても矢張皆さんに課題して面白い文藝上の遊戯を試みたいものてす、偖て此新年旅行は假に記者二人が全國を旅行することゝして盛んに諸孃に歡迎して頂きたいのてす、其方法は左の通りてすから能く讀んて下さい。

▲諸孃は如何にして記者の旅行を優待するか此れに答へるのが此餘興の主意てす▲歡迎すると云つても其事を詳しく書けば大變てすから一寸した思ひつきだけてよろしい▲記者に御馳走する時はどう云ふ料理を出すか、新年だから新年らしい儀式に據るか、或は變つた新式に據るか▲其地の名物を御馳走するなども面白い▲如何なる人に紹介するか▲又、記者に向つて雜題を出すのてす、しやちほこ立をしなければ此橋は渡さないとか、歌を詠まなければ次の宿へ通さないとか、まさか紙上てしやちほこ立は出來ないが、詩歌俳句を作ること、雜問に答ふること、何かの相談に乘ること、五分遊戯をやる位の事は好んてしますから遠慮なく望んて下さい▲其代り諸孃も亦出來得る限り話をすること、誌友會や問遊會を開くこと、面白く應接すること、名所舊跡を案内すること▲氣の利いたお土産を出すこと▲凡て贅澤な設けは記者の方から辭退しますが。誠意ある無邪氣な而して奇拔な歡迎方法は欣んで受けます▲新年の事てすから新年に因んだ遊戯も面白いが又必ずしも新年らしくする必要もない▲記者を大いに欣ばしめるか、大いに苦しめるか▲成るべく記者の答へ得られるやうなこと、挨拶の出來得られるやうな風に書いてもらひたい▲寒暑と繁閑を除いて日本全國の中なら何處へても參ります、道順に東海道から廻つて行かうと思ひます、東京も其中てす、少しも歡迎して下さらない土地は汽車か接て素通りして了ひます、だから諸孃は揃ふて歡迎して下さい、記者は寄りたくても泊れなくては閉口てす▲最も記者を感ぜしめたる方に賞品を差上ます▲右の事を書く文章は凡て十六字詰十行內外、「新年旅行」と題を書き縣名市町村名は忘れないやうに、お名前も勿論てす▲諸孃から集つた原稿を整理し選拔して記者の新年旅行記を新年紙上に發表するのてす、實際行くのてはありませんから遠慮なく盛んに歡迎して下さい▲賞品は一等一圓、二等七十錢、三等五十錢、四等三十錢、五等二十錢の價格に相當する旅行用具を進呈します▲〆切十一月二十日

記者通信

▲口繪アート紙　雜誌に繪葉書を附けると云ふ事も少し時勢後れの感があるので、本號より見合せ其代りに、寫眞口繪の用紙を改善し、舶來上等紙を用ゆることにしました、其爲に如何に鮮美になつたかは諸孃が御覽になる通り。

▲投書規定の改正　新年より各欄の選者に多少異動あり投書規定にも多少改定した點があります、皆本號の十七頁に出てますから見落さないやうにして下さい。

▲新年號　本誌新年號には趣味深き大附錄を添えます、其如何なるものなるかは新年後の體裁、刷新と共に次號に詳しく發表します、樂んでお待ち下さい。

雜報

▲女子商業の紀念會　女子商業學校にては創立第四週年紀念會を前月十七日高等商業學校內に開きました、午前には祝辭、澁澤氏の演說などあり、午後は音樂會を開いた、西洋樂あり、日本樂あり、殊に萩岡松阿等の三曲、杵屋連中の長唄は大喝采、庭園には同校生徒の慈善市が開かれなか／＼繁昌して居た

▲日本女學校紀念式　十月十八日全校第七回紀念式がありました、校長の式辭に次いで、來賓澁澤雨宮兩氏の講話、職員生徒の賀辭あり、終つて生徒の製作品及び其苦心の趣向になれる歷史人形を展覽せしめたるが、何れも無邪氣にして興味あるものてした。

▲女子職業學校の增築　同校にては志望者多き爲め教室の狹隘を感じ、今回從來の校舍の外、更に三階建一棟を增築しました。

for sick people?

すか。

Y: I thought they were very indigestible.

芳：私は大層不消化で悪いと思ふて居ました。

H: You must not eat clams, but take only the soup made from clams which is very wholesome.

花：蛤の身は良けませんが，其汁丈は滋養になります。

Y: I am glad if your mother could enjoy them.

芳：御母様が召上がれたなら，何より嬉しう御座います。

H: But why did you not your name with the gift? Our maid brought the basket in, telling that a messenger had left it.

花：何故御名前を進物に，御付け下さらなかつたのですか．下女が籃を持つて參り，今御使の者が置いて歸りましたと，申ましたのですもの。

Y: I wanted to give you a puzzle, that was all.

芳：貴女困らせようと思ふたからです。

H: Certainly you puzzled me.

花：眞個に途方に暮れました。

Y: Then what made you think I was the sender?

芳：一躰何が私だらうと思はせましたか。

H: I remembered that you told me of going on a picnic to Anamori this week, and that you would get figs, persimmons and clams there. Don't you remember that I laughed at the idea of getting clams in autumn?

花：貴女が此週間中に穴守に遠足に行くから，無花果，柿，蛤等が買へると仰いました事を想出しました．其時今時分秋に蛤なんて私が笑ひましたを覺えていらして？

Y: That was why I sent them to you.

芳：其理由で私が蛤を御目に懸けましたの。

H: Yes, I thought so. Any how, we appreciated them very highly. Did you gather them yourself? Of course you bought them.

花：然うだらうと思ひました．兎も角，非常に喜んで頂戴致しました．貴女が御取りになつた蛤ですか．勿論御買ひなさつたのでしよう。

and was frozen with the cold. Then she gave it her own jacket; and a little farther on, one begged for a frock, and she gave away that also.

At last she got into a wood, and it had already become dark, and there came yet another child, and asked for a little shirt. and the good girl thought to herself, —"It is a dark night and no one sees me; I can very well give my little shirt away," and took it off, and gave away that also. And as she so stood, and had not one single thing left, suddenly some stars from heaven fell down, and she saw they were hard, smooth pieces of money; and although she had just given her little shirt away, there was a new one made of the very finest linen. Then she gathered the pieces of money into this, and was rich all the days of her life.

(From German Household Sales)

て之に與へつゝ進み行く時，上衣を乞ふ者に逢ひ，之にも又乞はるゝ儘に取らせたり。

終に林中に入りし時は日既に暗けれど，又一人の小兒來りて襯衣をさへ懇望したり．小女思へらく，こは闇夜にしあれば，誰も我を見る者なけん，然れば之を與ふるも苦しからじとて，脱ぎて渡せり．彼は赤裸にて佇立せる時，忽ち天より星の降るあり，急ぎ觀るに皆固き滑なる貨幣なりけり．又彼は襯衣を今施せし儘なるに美しき布にて製りし新しき下衣あるをみ，貨幣を拾ひ集めてこれに包み，一生富貴に送日せしとぞ。

（獨乙御伽話）

Clams.

Hana: Yoshi-ko San, was it you who sent us such abig basketful of clams yesterday?

Yoshi: How do you know it?

H: Then surely it was you, How good you were to send them, particularly when my mother was sick. Do you know clam soup is very good

蛤

花：芳子さん，昨日大層大な籃一杯蛤を下さいましたのは貴女でしよう？

芳：如何して御存知？

花：其なら，確に然うです．眞個に御親切ですね，別して母が不快の時に尙更て御座います．病人には蛤の御汁は大層良う御座いますのを御存知て

Yet one rich smile,
and we will try to bear
The piercing winter frost,
and winds, and darpened air.
(Bryant)

The Star-Money.

Once on a time there was a little girl; her parents were dead, and she was so poor that she no longer had any little room to live in, or bed to sleep in; at last she had nothing but the clothes she was wearing, and a little bit of bread in her hand, which some kind soul had given her.

She was, however, good and pious. And as she was thus left alone by all the world, she went forth into the open country, trusting in the good God. Then a poor man met her, who said,—

"Ah, give me something to eat, I am so hungry!" She gave him the whole of her piece of bread. Then came a child, who cried and said,—

"My head is cold, give me some thing to cover it with." So she took off her hood and gave it to him; and when she had walked a little farther, she met another child who had no jacket

暖き笑を
今一度
受けなは凛々　骨に刺す
霜,風,雪空　堪へ忍ばん。

星の金

昔一人の小女ありけり，彼の両親早く死去して，住家は愚，臥床さへ無きまてに貧苦し，終には着のみ着まゝにて某慈善家より施されし麪包一片の外一物もなき身となれり。

然れども彼は善良にして信仰厚き者なりしかば，此世に於て誰とて頼む者なけれども，至善の神に依頼して廣き郊外に行きけるに，一人の憫然たる者に逢へり。

「我甚しく飢へたれば，何か食物を與へ給へよ」と乞はるゝに，小女は手にせる麪包を悉皆與へたり．稍々ありて小児に逢ふ．此小児は，

「我頭寒ければ頭巾を給へ」と泣き叫びければ，小女は己が頭被を取りて施與したり。かくて少しく進み行くに又一人の童子あり．外套なく凍へん斗りなる彼を見し小女は己の外套を脱ぎ

英文（一）

津田梅子閲　河井道子述

November.

Let one smile more,
departing, distant sun,
One mellow smile
through the soft, vaporing air,
Ere o'er the frozen earth
the loud winds run,
Or snows are sifted
o'er the meadows bare;
One smile on the brown hills
and naked trees;
And the dark rocks
whose summer wreaths are cast,
And the blue gentian flower,
that in the breege
Nods lonely,
of her beauteous race the last.
Yet a few sunny days,
in which the bee
Shall murmur by the hedge
that skirt the way,
The cricket chirp
upon the russet lea,
And man delight
to linger in the ray.

十一月

名殘の斜照を
夕陽よ，
薄霧越へて
送りませ
凍る岡の上に
朔風や，
荒野に雪の
飛ぶ前に。
名殘の微笑
與へてよ，
枯木寒山
夏衣
脫きし岩根や
夕風に
淋しく靡く
龍膽に。
今暫くの
日和には
蜂は間籬に，
蟋蟀は，
赤みし野邊に
歌ふ時，
人は日向に
樂しまむ。

投書家並に愛讀諸孃は此社告を御覽下さい

改正

募集課目



選評（文學士中村枯林先生、小栗風葉先生、内藤鳴雪先生、横瀨夜雨先生、巖谷小波先生、佐々木信綱先生、與謝野晶子先生、谷江風先生、山中古洞先生、）

甲種
○美文（廿四字三十行以内）
○日記文（廿四字三十行以内）
○新論文（廿四字三十行以内）
○實用文（廿四字十五行以内）
○お伽噺（振假名付廿四字八十行以内）
○新體詩（振假名付十句以内）
○短篇小説（振假名付廿四字八十行以内）

乙種
○和歌（一首宛）
○新派和歌（一首宛）
○俳句（一句宛）
○新歌謠（一首宛）
○滑稽談（廿一字五行内）
○繪畫（一寸の二寸）
○短文（廿四字五行振假名付）
○文壇餘興（其時によると）

賞外｛○願問 ○學校通信 ○誌友倶樂部（凡て廿一字詰）

▲注意｛○凡て用紙は半紙に限る○課題は隨意なり○一人一章一句宛の事○取交ぜ全封差支なし○開封にて三十匁迄郵税二錢にて足る

以上は毎月十五日に〆切翌々月に發表のとになります

◎新年號（四十一年一月發行）に發表になります 投稿に限り十一月十八日夕刻までに本社へ到着を以て〆切といたします（但右の項目に依ると）

懸賞呈品

甲種		
第一等	賞金屆品類……	價格金拾圓
第二等	呉服物類……	價格金參圓
第三等	小間物類……	價格金八拾錢
第四等	便利圖書切符……	金五拾錢
第五等	同……	金四拾錢

乙種		
第一等	絹張洋傘……	價格金五圓
第二等	帶止、半襟類……	價格金壹圓
第三等	文房具類……	價格金六拾錢
第四等	便利圖書切符……	金三拾錢
第五等	同……	金貳拾錢

○賞品は發表翌月五日に故障なき當選者へ贈呈す、當選者は速に住所氏名を明細に通知あれ、

▲嚴守すべき投書規定必一讀を要す

○投書は各欄政治的時事論に渉るべからず○投書は題の下に必ず住所姓名を記し假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は別に認むべし○封筒は『原稿在中』の文字を記し中には他の用事の文句を記すべからず○投書に圈點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし

定價

女子文壇（毎月一回（一日發行）定期増刊年四回二月、五月、八月、十一月の十五日發行）

一冊（大判百頁）	前金拾錢	郵税共 前金拾壹錢
八冊（半年分増刊共）	前金七拾六錢	同 前金八拾四錢
十二冊（一年分増刊除）	前金壹圓八錢	同 前金壹圓廿錢
十六冊（一年分増刊共）	前金壹圓四拾四錢	同 前金壹圓六十錢

振替貯金又は爲替に限ると

輕便の送金法

女子文壇社の郵便振替貯金口座は第壹七貳九番です
○爲換料、通信料、書留料入らぬ安全の送金法
此の「拂込用紙」は何處の郵便局でも申出あれば何度でも無代て呉れます

明治四十年十月廿八日印刷
明治四十年十一月一日發行

定價金拾錢

不許複製

編輯兼發行者 東京市京橋區大鋸町十一番地 野口竹次郎
印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 石川金太郎
印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 合資會社秀英舍

發行所 東京市京橋區大鋸町十、十二番地 電話〔本局六〇七番〕 女子文壇社

特約賣捌元 ○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可

女子文壇 定價 無比 金拾錢 郵税壹錢